小豆地域県立学校再編整備事業（小豆地区統合校）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

蒲生遺跡

2017.3

香川県教育委員会

序　文

本書には小豆地域県立学校再編整備事業（小豆地区統合校）に伴い発掘調査を行った、香川県小豆郡小豆島町蒲生に所在する蒲生遺跡（かもういせき）の報告を収録しています。

蒲生遺跡では、弥生時代後期から近世にかけての遺構・遺物が確認でき、中でも中世前半期の集落に関する建物の柱穴が多く認められました。また、古墳時代後期の製塩土器片が多数出土したほか、近世の塩田関連施設も確認できました。

本遺跡の調査成果が、本県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、関係機関ならびに地元関係者各位には多大な御援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝申し上げるとともに、今後ともご支援賜りますようお願い申し上げます。

平成29年3月

香川県埋蔵文化財センター
所長　　増田　　宏

例　言

1．本報告書は、小豆地域県立学校再編整備事業（小豆地区統合校）に伴い発掘調査を実施した、香川県小豆郡小豆島町蒲生に所在する蒲生遺跡（かもういせき）の調査成果を収録した。

2．発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、香川県埋蔵文化財センターが調査担当者として実施した。

3．調査にあたって、次の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）
香川県教育委員会事務局高校教育課、香川県土木部建築課、香川県小豆総合事務所、
小豆島町教育委員会、地元自治会、地元水利組合

4．報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。編集は小野秀幸が担当した。

5．本報告書で用いる方位の北は、世界測地系の北であり、標高は東京湾平均海水位（Ｔ．Ｐ．）を基準としている。

6．遺構は下記の略号により表示している。
SB　掘立柱建物　　SD　溝　　SK　土坑　　SP　柱穴
SX　性格不明遺構及び製塩遺構

7．遺構図土層の土色色調及び遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖 10 年度版』による。

本文目次

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯……1

第２節　発掘調査および整理作業の経過……2

第２章　立地と環境

第１節　地理的環境……3

第２節　歴史的環境……3

第３章　発掘調査の成果

第１節　調査の方法……5

第２節　基本土層序……5

第３節　遺構・遺物……7

第４章　自然科学分析

第１節　蒲生遺跡出土鉄滓の分析調査……73

第２節　製塩遺構堆積物の珪藻分析……83

第５章　まとめ　……89

挿図目次

第 1 図　遺跡位置……1
第 2 図　周辺遺跡……4
第 3 図　調査区割……5
第 4 図　1 区西壁土層断面図……6
第 5 図　2 区南壁土層断面図……7
第 6 図　2 区西壁土層断面図……8
第 7 図　試掘トレンチ 2 断面図……9
第 8 図　1 区 1 面柱穴平・断面図……10
第 9 図　SK1004 平・断面図、出土遺物……11
第 10 図　SD1011 平・断面図、出土遺物……11
第 11 図　SD1012 平・断面図、出土遺物……11
第 12 図　SD1013 平・断面図……12
第 13 図　2 区 1 面 SD 出土遺物……12
第 14 図　SX1004・SX1007・SX1014 平・断面図……13
第 15 図　SX1003 平・断面図……14
第 16 図　SX1008 平・断面図……15
第 17 図　SX1008 出土遺物……16
第 18 図　SX1020 平・断面図、出土遺物……16
第 19 図　SX1005 平・断面図、出土遺物……17
第 20 図　SX1015 平・断面図、出土遺物……18
第 21 図　SX1019 平・断面図、出土遺物……19
第 22 図　SX1002 平・断面図、出土遺物……20
第 23 図　SX1006 平・断面図、出土遺物……21
第 24 図　SX1009 平・断面図……22
第 25 図　SX1021・1023 平・断面図、出土遺物……23
第 26 図　SX1001 平・断面図……24
第 27 図　SX1001 出土遺物……25
第 28 図　SX1010 平・断面図……26
第 29 図　SX1010 遺物出土状況、出土遺物……27
第 30 図　SX1011 平・断面図、出土遺物……27
第 31 図　SK1006 平・断面図、出土遺物……28
第 32 図　SK1010 平・断面図……29
第 33 図　SK1013 平・断面図、出土遺物……29
第 34 図　SK1017 平・断面図、出土遺物……30
第 35 図　SK1019 平・断面図……30
第 36 図　SK1020 平・断面図、出土遺物……30
第 37 図　SK1021 平面図……31
第 38 図　SK1022 平・断面図、出土遺物……31
第 39 図　SK1023 平・断面図、出土遺物……31
第 40 図　SK1025 平・断面図、出土遺物……32
第 41 図　SK1026 平・断面図、出土遺物……32
第 42 図　SK1027 平・断面図、出土遺物……33
第 43 図　SK1028 平・断面図、出土遺物……33
第 44 図　SD1001 平・断面図……34
第 45 図　SD1004 平・断面図、出土遺物……34
第 46 図　SD1005 平・断面図……35
第 47 図　SD1006 平・断面図、出土遺物……35
第 48 図　SD1007 平・断面図、出土遺物……35
第 49 図　SD1008 平・断面図……36
第 50 図　SD1009 平・断面図、出土遺物……37
第 51 図　SD1010 平・断面図、出土遺物……37
第 52 図　SB1001 平・断面図……38
第 53 図　SB1001 出土遺物……39
第 54 図　SB1002 平・断面図、出土遺物……39
第 55 図　SB1003 平・断面図……40
第 56 図　SB1004 平・断面図……40
第 57 図　SB1005 平・断面図、出土遺物……41
第 58 図　SB1006 平・断面図、出土遺物……42
第 59 図　SB1007 平・断面図、出土遺物……43
第 60 図　SB1008 平・断面図……44
第 61 図　SB1009 平・断面図、出土遺物……45
第 62 図　SB1010 平・断面図……46
第 63 図　SB1010 出土遺物……47
第 64 図　SB1011 平・断面図、出土遺物……47
第 65 図　SB1012 平・断面図……48
第 66 図　SB1013 平・断面図、出土遺物……48
第 67 図　1 区 2 面 SP 平面図……49
第 68 図　1 区 2 面 SP（1）平・断面図……50
第 69 図　1 区 2 面 SP（2）平・断面図……51
第 70 図　1 区 2 面 SP（3）平・断面図……52
第 71 図　1 区 2 面 SP（4）平・断面図……53
第 72 図　1 区 2 面 SP（5）平・断面図……54
第 73 図　1 区 2 面 SP（6）平・断面図……55
第 74 図　1 区 2 面 SP（7）平・断面図……56
第 75 図　1 区 2 面 SP 出土遺物（1）……57
第 76 図　1 区 2 面 SP 出土遺物（2）……58
第 77 図　SX1012・1013 平・断面図、出土遺物……59
第 78 図　SX1012 出土遺物……60
第 79 図　SX1012（包含層 3）出土遺物……61
第 80 図　SX1013 出土遺物……62
第 81 図　SX1016 平・断面図……63
第 82 図　SX1016 出土遺物……64
第 83 図　SX1017 平・断面図……64
第 84 図　SX1018 出土遺物……64
第 85 図　SX1022 平・断面図……65
第 86 図　SX1022 出土遺物（1）……66
第 87 図　SX1022 出土遺物（2）……67
第 88 図　SX1024 平・断面図……68
第 89 図　SX1025 平・断面図、出土遺物……68
第 90 図　SX1026 平・断面図……68
第 91 図　SX1027 平・断面図、出土遺物……69
第 92 図　1 区第 1 包含層出土遺物……69
第 93 図　1 区第 2 包含層出土遺物（1）……70
第 94 図　1 区第 2 包含層出土遺物（2）……71
第 95 図　2 区包含層出土遺物……72
第 96 図　椀形鍛冶滓（No. 5）の顕微鏡組織・EPMA 調査結果……75
第 97 図　鍛冶滓（No. 8）の顕微鏡組織・EPMA 調査結果……77
第 98 図　鍛冶滓（ガラス質滓）（No. 9）の顕微鏡組織・EPMA 調査結果……79
第 99 図　鍛冶滓（No.10）の顕微鏡組織・EPMA 調査結果……81
第 100 図　珪藻分析試料採取位置……82
第 101 図　蒲生遺跡の主要珪藻化石群集……84
第 102 図　蒲生遺跡の珪藻化石……88
第 103 図　大浦浜遺跡粘土遺構……90
第 104 図「汐汲（鹹水槽）」模式図……91
第 105 図　遺構変遷図……95

表目次

第１表　体制一覧表……2
第２表　蒲生遺跡出土鍛冶関連遺物資料一覧および分析項目……73
第３表　鍛冶関連遺物資料の化学組成……74
第４表　出土鍛冶関連遺物の調査結果のまとめ……82
第５表　蒲生遺跡の珪藻分析結果……83
第６表　土器観察表……97
第７表　石器観察表……110
第８表　金属器観察表……110
第９表　骨角器観察表……110

図版目次

図版１　遺跡遠景　東から　1
遺跡遠景　東から　2
1区 第1面 全景　南東から　1
1区 第1面 南半全景　北から
図版２　1区 第1面 北半全景　東から
1区 第1面 全景　南東から　2
1区 第1面 北半部遺構検出状況　南東から
1区 第1面 北半部全景　北東から
図版３　1区 第1面 鹹水槽群全景　南東から
1区 調査区周辺遠景　北東から
1区 第2面 全景　東から
1区 第2面 全景　北から
図版４　1区 第2面 周辺遠景　東から
1区 第2面 遺構検出状況（確認トレンチ3－試掘トレンチ2追加間）　北から
1区 第2面 全景　南から
図版５　1区 第2面 北端遺構検出状況　南から
1区 第2面 北端遺構検出状況　北から
1区 北半部完掘状況　東から
1区 西壁土層　北から
図版６　1区 西壁土層（下部追加）　北から
1区 西壁土層　東から　1
1区 西壁土層　東から　2
2区 平面精査終了後　北から
図版７　2区 全景　東から
2区 西壁土層　東から　1
2区 西壁土層　東から　2
2区 西壁土層　北から
図版８　SD1012 土層　西から
SX1004 土層　東から
SX1004 土層　南から
SX1004 完掘状況　南から
SX1007 土層　西から
SX1007 完掘状況　西から
SX1003 土層　東から
SX1003 土層　南から
図版９　SX1003 土層　北から
SX1008 土層　北から
SX1008 粘土層上面完掘状況　北東から
SX1008 完掘状況　北から
SX1008 完掘状況　北東から
SX1020 土層　東から　1
SX1020 土層　東から　2
図版 10　SX1020 粘土層上面完掘状況　南西から
SX1005 土層　東から　1
SX1005 土層　南から
SX1005 土層　東から　2
SX1015 土層　北から
SX1015 粘土層上面完掘状況　南から
SX1015 粘土層上面完掘状況　北から
図版 11　SX1015 粘土層上面完掘状況　東から
SX1019 完掘状況　南東から
SX1019 完掘状況　北東から
SX1019 完掘状況　北から
SX1002 平面検出状況　東から
SX1002 土層　東から
SX1002 埋土中大型礫検出状況　北から
図版 12　SX1002 粘土層上面完掘状況　東から
SX1006 土層　北西から　1
SX1006 土層　南西から
SX1006 土層　北西から　2
SX1006 完掘状況　南西から
SX1009 東西土層　南から
SX1009 完掘状況　南から
SX1021・1023 土層　南東から
図版 13　SX1021 完掘状況　南から
SX1023 粘土層上面完掘状況　南東から
SX1001・1002 土層　南東から
SX1001 南北土層 北半　南西から
SX1001 南北土層 南半部　北東から
SX1001 粘土層上面完掘状況　東から
SX1001 礫石検出状況　南から
SX1001 灰色粘土除去後　南東から
図版 14　SX1001 完掘状況　南から
SX1010 土層　西から
SX1010 土層　東から
SX1010 土層　南から
SX1010 土層　北から
SX1010 礫層礫検出状況　北から
SX1010 粘土層上面完掘状況　南から
SX1010 灰色粘土除去後　北から
図版 15　SX1010 完掘状況　南から
SX1011 土層　南から
SK1006 土層　北から
SK1006 完掘状況　西から
SK1013 土層　東から
SK1017 土層　東から
SK1018 土層　北から
SK1020 土層　西から
図版 16　SK1020 土層　東から
SK1022 土層　東から
SK1023 土層　南から
SK1025 土層　南西から
SK1026 土層　東から

SK1026 土層　南から
SK1026 礫投棄状況　東から
SK1026 礫投棄状況　北から
図版 17 SK1026 炭化物層上面検出状況　北から
SK1026 炭化物層上面検出状況　南東から
SK1026 鉄滓集中範囲　南東から　1
SK1026 鉄滓集中範囲　南東から　2
SK1026 硬化面半裁状況　南東から
SK1026 硬化面範囲　南から　1
SK1026 硬化面範囲　南から　2
SD1009 土層　南から
図版 18 SD1010 土層　北から
SX1012 土層　西から
SP1131 土層　東から
SX1012 土層　南から
SX1012 土層　北から
SX1012 土層　北東から
SX1012・1013 土層　東から
図版 19 SX1012・1013 土層　南西から
SX1012・1013 土層　北東から
SX1012（左）・1013（右）　東から
SX1013　東から
SX1012・1013 内 焼土・炭化物検出状況　北から
SX1016 土層　西から
SX1016 東西土層　南から
SX1016 完掘状況　西から
図版 20 SX1022 土層　西から
SX1022 完掘状況　西から
SX1024 土層　西から
SX1027 粘土面完掘状況　北から
SX1027 粘土面完掘状況　東から
SX1027 完掘状況　北から
SX1027 完掘状況　東から
SD2002 土層　西から
図版 21 出土遺物
図版 22 出土遺物
図版 23 出土遺物
図版 24 出土遺物
図版 25 出土遺物
図版 26 出土遺物
図版 27 出土遺物

付図

香川県　蒲生遺跡　遺構全体図　S=1/200

第１章　調査の経緯

第１節　調査に至る経緯

蒲生遺跡は小豆郡小豆島町蒲生に所在する。香川県教育委員会事務局高校教育課では、平成 29 年度の開校を目標とした県立高校の建設を同所で行うことを決定した。この建設工事に伴い、文化財の調査の必要性について照会を受けた香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課（以下生涯学習・文化財課と略称）は、予定地に隣接して周知の文化財包蔵地である「蒲生遺跡（かもういせき）」が存在することと事業範囲が広範囲に及ぶことから、事業予定地内への埋蔵文化財包蔵範囲が広がる可能性が高いと判断し、高校教育課と協議を行った。その結果、埋蔵文化財の包蔵状況を確認するため、試掘調査を行うことで合意した。これにより、平成 25 年８月と平成 26 年９月に生涯学習・文化財課によって試掘調査が実施された。その結果、試掘調査対象地のうち、766㎡で弥生～古墳時代、中世期の遺構・遺物を確認したため、隣接する蒲生遺跡の範囲内にあるものとして文化財保護法に基づく保護措置が必要と判断された。

第１図　遺跡位置

第２節　発掘調査および整理作業の経過

発掘調査は、平成 27 年４月１日～７月 31 日の期間で 766㎡（一部遺構面が２面あるため、延べ 1,242㎡）を対象として開始した。しかし、調査中に遺構が調査区外に広がることが判明したため、生涯学習・文化財課と高校教育課が協議した結果、28㎡を追加して保護措置必要とした。最終的には 794㎡（一部遺構面が２面のため、延べ 1,298㎡）を対象に調査を実施した。蒲生遺跡は埋蔵文化財センター発足以来初の島嶼部における調査であったことから、発掘作業員などの人材確保など四国本島側での手法が適用できるかどうか不明であった。このため、発掘調査は発掘調査支援業者に業務委託して実施した。

整理作業は平成 28 年４月～６月の３カ月の期間に直営方式で行った。

発掘調査及び整理作業の体制は第１表のとおりである。

第１表　体制一覧表

	平成 27 年度			平成 28 年度		
香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課	総括	課長	増田　宏	総括	課長	小柳　和代
		副課長	小柳　和代		副課長	片桐　孝浩
	総務・生涯学習推進グループ	課長補佐	愛染　伊知朗	総務・生涯学習推進グループ	課長補佐	愛染　伊知朗
		副主幹	松下　由美子		副主幹	松下　由美子
		主事	和木　麻佳		主事	和木　麻佳
	埋蔵文化財	課長補佐	片桐　孝浩	埋蔵文化財	課長補佐	片桐　孝浩（兼務）
		主任文化財専門員	山下　平重		主任文化財専門員	山下　平重
		文化財専門員	乗松　真也		主任文化財専門員	乗松　真也
香川県埋蔵文化財センター	総括	所長	真鍋　昌宏	総括	所長	増田　宏
		次長	前田　和也		次長	森　格也
		総務課長	前田　和也（兼務）		総務課長	森　格也（兼務）
	総務	主任	寺岡　仁美	総務	副主幹	斎藤　政好
		主任	丸尾　麻知子		主任	寺岡　仁美
		主任	高木　秀哉		主任	丸尾　麻知子
		主任	中川　美江			
	調査	調査課長	森　格也	整理	資料普及課長	古野　徳久
		文化財専門員	小野　秀幸		文化財専門員	小野　秀幸
					整理作業員	大林　真沙代
					整理作業員	原　節子
					整理作業員	川井　佐織
					整理作業員	正本　由希子
					整理作業員	竹内　悦子

第２章　立地と環境

第１節　地理的環境

遺跡の所在する小豆郡小豆島町は小豆島の南東部の大半を占める。島の東面すべてと南面の大半の海岸線を占めるほか、北面の一部も取り込む。内陸部も島の中央部を東西に走る山地まで含み、範囲が広い。字蒲生は町の西端にあり、隣の土庄町と接する。

遺跡の南側は池田湾に面し、北側には標高 427.2 m を測る太麻山がある。太麻山の南西斜面からは尾根と谷が派生し、ここから供給される土砂と海流により浜提が形成され、遺跡はその上に立地する。大きな河川はなく、角田川・奥の谷川といった小河川が近接する。また、西側及び東側は共に太麻山から派生する尾根が海の方へ張り出して形成されたあさぎ岬、飛岬によって囲まれる。三方が囲まれることから、遺跡前面の海面は穏やかである。遺跡の立地する浜提は飛岬から西へ派生する小尾根の先端に発達し、その北側には後背湿地が形成される。また、現在もこの浜提上のピークを中心に集落が形成されるほか、畑地としても利用される。後背湿地は水田や畑地として利用されており、数カ所に直径２m程の井戸が開削され、湧水が利用されていたようである。

第２節　歴史的環境

旧石器時代・縄文時代

蒲生遺跡は小豆島町合併以前は旧池田町内にあり、町史編纂時点では当該期の遺構・遺物は確認されていない。今回の調査で縄文時代後期の土器片１点を確認しており、近隣に当該期の集落が存在した可能性が指摘できる。

弥生時代

あさぎ岬を挟んだ反対側に所在する入部遺跡で、土器が少量確認されている程度である。今回の調査によりわずかに土器・石器が確認出来た。中でもほぼ完形に復元できる製塩土器が土坑中から出土しており、近隣に当該期の集落が存在した可能性が指摘できる。

古墳時代

飛岬の東斜面に池ノ坊古墳の存在が知られる。副葬品を伴わない組合せ式箱式石棺２基が確認されたと伝えられる。隣接する土庄町渕崎に富丘古墳群・高壷古墳群などが確認される。富丘古墳群は県指定史跡で、双子浦に面する丘陵の頂部から東に伸びる稜線上に築かれる。頂部にある円墳は昭和 20 年の工事中に実施された調査で多数の遺物を伴う埋葬施設が確認された。蒲生遺跡においては、従来から古墳時代後期の遺物を主体として採取されているほか、今回の調査においても６世紀中頃の須恵器・土師器・製塩土器がまとまって出土しており、塩業を含む生業の場として用いられていたことが窺える。

古代

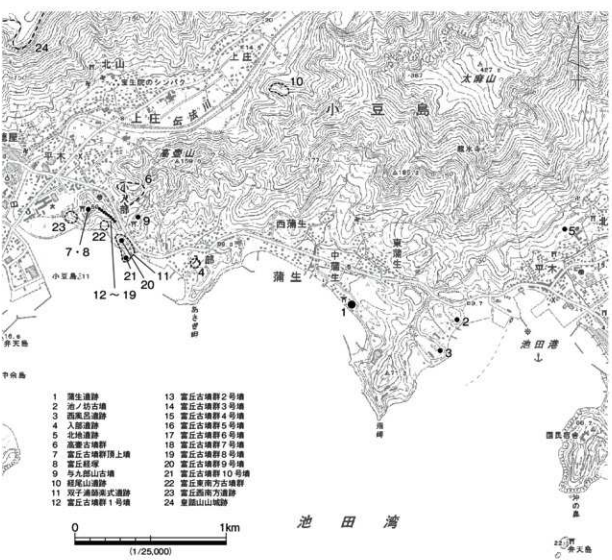
平城京跡出土木簡などから当該期の小豆島は「備前国児島郡小豆郷」に属しており、蒲生もその一部

であったと考えられる。周辺には当該期の遺跡は確認されていないが、蒲生遺跡でわずかな須恵器・土師器・黒色土器のほか、少量の製塩土器片が確認できている。平城京跡出土の小豆郷木簡の中に調塩木簡が認められることから、塩業が生業の一部を担っていたと考えられる。小豆島が荘園化された時期は不明であるが、平安時代には一島が肥土荘と号された。後に肥土荘は肥土山・上庄・淵崎に限られるようになり、石清水八幡宮領となる。その他の地区は平安時代後期には皇室領であったようだ。

中世

古代後期に成立した石清水八幡宮領肥土荘を除き、皇室領として扱われるが、13世紀初めごろにはその知行を九条家が行うことになる。

小豆島の塩業は、「兵庫北関入船納帳」の記載から15世紀代に1万石以上の島塩が通関しており、安定した生産が行われていたことがわかる。その製塩業の開始時期は天正年間までさかのぼるとされ、赤穂から来島した浜師の指導のもと、塩浜が開拓されたと伝えられ、その中には蒲生の所在する池田村も含まれる。



(国土地理院2万5千分1地形図「土庄」に加筆して使用)

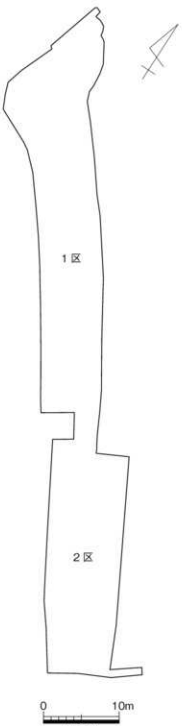
第2図　周辺遺跡

第３章　発掘調査の成果

第１節　調査の方法

対象地は南北 76 m、東西最大９mの範囲にわたり、面積は北側が504㎡、南側が290㎡を測る。北側は現地形の状況で南側に比べやや高く遺構面が２面あったことから、実掘面積は1,008㎡となり、総掘削面積は1,298㎡である。調査は北側を１区、南側を２区とし、１区から調査にかかり、１面目・２面目を調査した後、２区を調査する計画を立てた。しかし、１区の北側約１／３については第１面の遺構が複数重複し、当初の計画通りに調査をすると遺構面単位での調査が困難となることから、当該部分は第１面を完掘してから第２面に着手することとし、第１面の遺構が希薄な１区南２／３について先行して第１面を完掘した後、第２面の調査へ着手した。その後、２区に着手すると同時に第１面を完掘した１区北１／３について第２面の調査を行った。

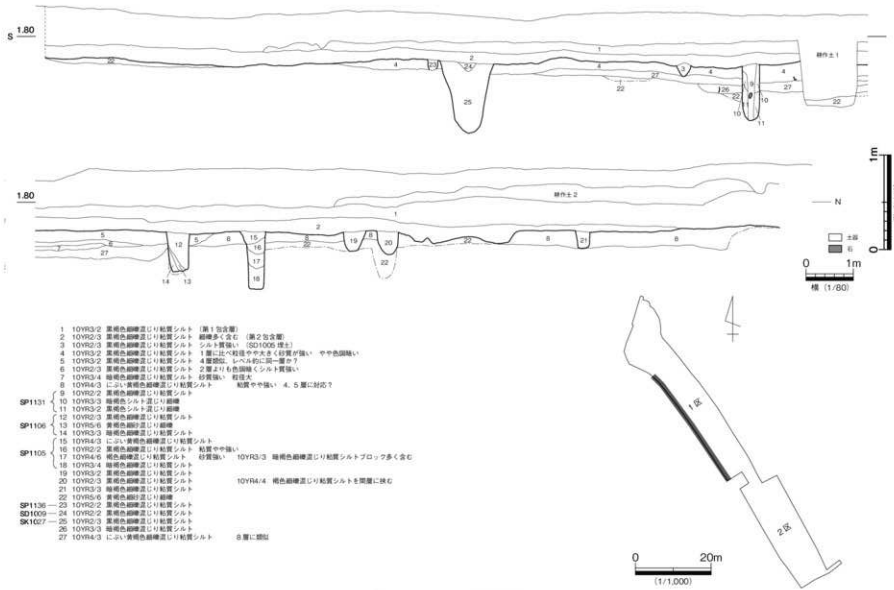
いずれの調査区も各面までは重機による掘削を行い、適時人力掘削を併用した。遺構検出・遺構掘削は人力で行った。



第３図　調査区割

第２節　基本土層序

遺跡の現地盤面は標高 2.2 ～ 2.5 mを測る。１区では概ね厚さ 0.3 ～ 0.4 mの耕作土を経た標高 1.8 ～ 1.7 mで第１面に達するが、２区は厚さ約 1.4 mの造成土、厚さ 0.3 mの耕作土、厚さ 0.3 ～ 0.4 mの攪乱層を経た標高 0.6 ～ 0.4 mで第１面に達する。１区第２面はさらに厚さ 0.2 ～ 0.4 mの包含層を除去した標高 1.5 m付近で設定した。浅いところでは同レベルで中砂～細礫からなる地山面が確認出来るが、１区中央やや南寄りではやや下がった標高 1.2 m付近に地山面を認める。低い部分には包含層が堆積する。基本的に第１面は１区では北から南へ緩やかに下り、２区で段カットに伴い約 0.7 m下がる。第２面は概ね水平である。地山面は１区では概ね北端と南端で高く中心部でやや窪む。２区は段カットに伴い本来の遺構面から大きく削平され、１区の各面に相当する遺構面は存在せず、すぐに地山面となる。なお、調査区全体を通して、耕作土直下の包含層を第１面被覆土として第１包含層、第１包含層を除去した後の第１面ベース層及び第２面被覆土となるものを第２包含層、局所的ながら第２包含層と第２面の間に堆積する層を第３包含層として調査した。第２面は概ね地山層が露出するが、一部で間に包含層を挟む。



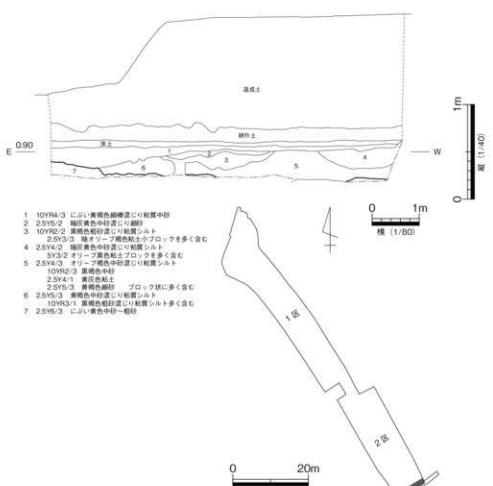
第４図　１区西壁土層断面図

第３節　遺構・遺物

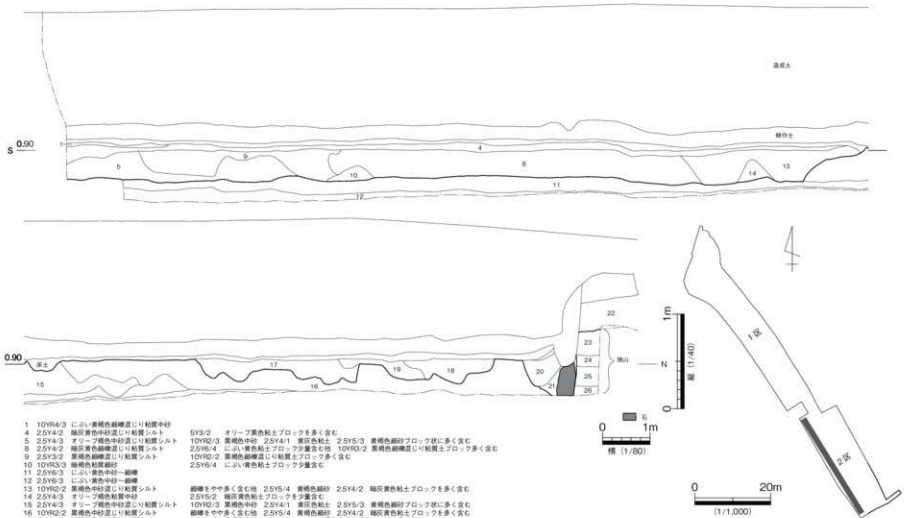
検出した遺構は、調査区毎に検出時に通し番号を付けて記録した。いずれの遺構も略号の後に４桁の数字を添付する。上１桁の数字は調査区を、下３桁は遺構番号を示す（Ex. SP1043→１区柱穴 43 番、SX2006→２区性格不明遺構６番）。基本的に調査時の番号は変えずに報告する。なお、染みの誤認などで遺構を解除したものについては、欠番としている。報告は第１面・第２面の順で、遺構種別毎にまとめて報告する。遺物については、各遺構出土分は当該遺構と合わせて行うが、原位置を遊離したものについてはすべて包含層出土として調査区毎にまとめて記載する。

第１面（中世～近世）

柱穴６基、土坑１基、溝状遺構６条、製塩遺構 17 基、性格不明遺構１基を調査した。主に１区に遺構は集中し、２区では溝状遺構３条、性格不明遺構１基を認めたのみである。以下、各遺構について記載する。



第５図　２区南壁土層断面図

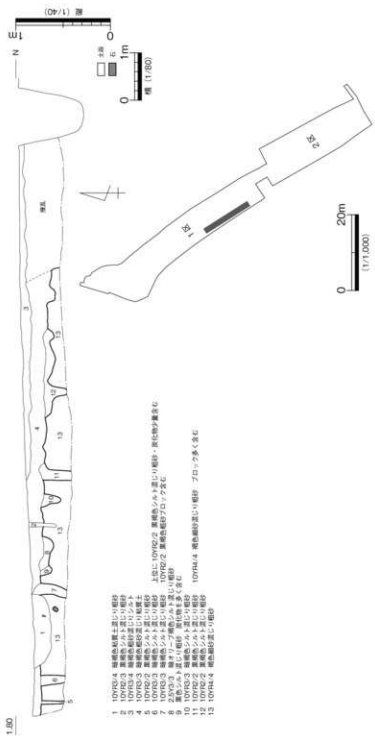


1 10YR4/3 にぶい黄褐色細礫混じり粘質中砂
4 2.5Y4/2 暗灰黄色中砂混じり粘質シルト
5 2.5Y4/3 オリーブ褐色中砂混じり粘質シルト
8 2.5Y4/2 暗灰黄色細礫混じり粘質シルト
9 2.5Y3/2 黒褐色細礫混じり粘質シルト
10 10YR3/3 暗褐色粘質砂
11 2.5Y6/3 にぶい黄色中砂～細礫
12 2.5Y6/3 にぶい黄色中砂～細礫
13 10YR2/2 黒褐色中砂混じり粘質シルト
14 2.5Y4/3 オリーブ褐色粘質中砂
15 2.5Y4/3 オリーブ褐色中砂混じり粘質シルト
16 10YR2/2 黒褐色中砂混じり粘質シルト
17 2.5Y4/2 暗灰黄色中砂混じり粘砂
18 10YR3/3 暗褐色細礫混じり粘砂
19 2.5Y3/2 黒褐色細礫混じり粘質中砂
20 10YR4/4 褐色細礫混じり粘質中砂
21 2.5Y4/4 オリーブ褐色粗砂
22 10YR3/3 暗褐色細礫混じり粘質シルト
23 10YR5/6 黄褐色細礫
24 2.5Y5/4 黄褐色細礫 φ5mm 程度
25 10YR4/3 にぶい黄褐色細礫 φ7mm 程度
26 2.5Y6/3 にぶい黄色中砂～細礫

5Y3/2 オリーブ黒色粘土ブロックを多く含む
10YR2/3 黒褐色中砂 2.5Y4/1 黄灰色粘土 2.5Y5/3 黄褐色細砂ブロック状に多く含む
2.5Y6/4 にぶい黄色粘土ブロック少量含む他 10YR3/2 黒褐色細礫混じり粘質土ブロック多く含む
10YR2/2 黒褐色細礫混じり粘質土ブロック少量含む
2.5Y6/4 にぶい黄色粘土ブロック少量含む

細礫をやや多く含む他 2.5Y5/4 黄褐色細砂 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土ブロックを多く含む
2.5Y5/2 暗灰黄色粘土ブロックを少量含む
10YR2/3 黒褐色中砂 2.5Y4/1 黄灰色粘土 2.5Y5/3 黄褐色細砂ブロック状に多く含む
細礫をやや多く含む他 2.5Y5/4 黄褐色細砂 2.5Y4/2 暗灰黄色粘土ブロックを多く含む
2.5Y5/3 黄褐色中砂、2.5Y4/3 オリーブ褐色中砂をブロック状に多く含む
粘質やや有 2.5Y4/2 暗灰黄色中砂ブロック状に含む
2.5Y5/4 黄褐色細砂を層状に挟む
SD2005 埋土
SD2005 埋土
第2生含層

第6図　2区西壁土層断面図



第７図　試掘トレンチ２断面図

柱穴

直線的に並ぶものがあり、建物を構成した可能性があるが、その規模は不明である。各遺構ともに土師質土器・瓦器、青磁など小片が少量出土するが、図化し得なかった。いずれも第２包含層あるいは第２面の遺構から巻き上がったもので、第１面形成時に関わる遺物ではないと考えられる。このことから、第１面の柱穴は、中世以降に帰属するものと考える。以下、個別に記載する。

SP1001・1002・1004・1005（第８図）

１区北半部で検出した。４基は直線状に配置しており、本来建物を構成していた可能性がある。周辺で関連する柱穴は確認できなかった。また、SP1002 と SP1005 は重複しており、SP1002 が後出する遺構である。直径 0.25 ～ 0.35 m、深さ 0.1 ～ 0.15 mを測る。

SP1003（第８図）

１区北端部で検出した。直径 0.4 m、深さ 0.2 mを測る。

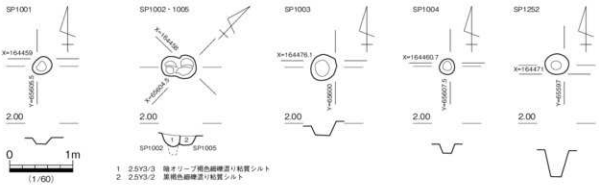
SP1252（第８図）

１区北辺中央付近で検出した。最大径 0.4 mのいびつな円形を呈し、深さ 0.4 mを測る。

土坑

SK1004（第９図）

１区南半西寄りで検出した。試掘トレンチにより東側が削平されており、長軸１m、短軸約 0.3 mが



第８図　１区１面柱穴平・断面図

残存する。断面形状は浅い皿状を呈し、残存深度は約 0.2 mである。埋土は暗褐色粘質土混じり粗砂の単層である。

出土遺物は少量で、小片が中心である。土師質土器皿（１）を図示した。

溝状遺構

製塩遺構間において小規模なものを検出したほか、２区で浅く幅広のものを検出したにとどまる。以下、個別に記載する。

SD1011（第 10 図）

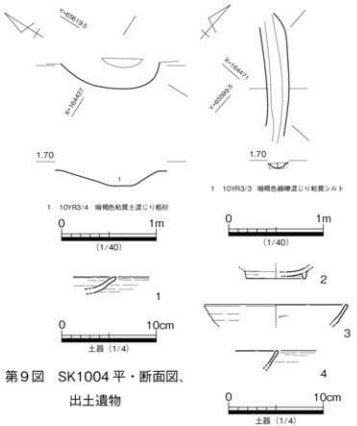
１区北端中央付近で検出した。検出長約 1.3 mで最大幅は 0.3m を測る。断面形状は浅い椀状で残存深度は 0.06 mである。主軸方位は N45° W を測る。埋土は暗褐色細礫混じり粘質シルトの単層である。両端は SX1001・SX1020 に切られて途切れる。延伸した先に溝状遺構は確認できず、もともと南へ延びなかったか、後世の削平により SX1001 以南が消滅した可能性が想定できる。

出土遺物は少量で、図化に耐えうるものはわずかながら瓦器椀や吉備系土師質土器椀、土師質土器鍋などの小片を含む。土師質土器椀（２）、坏（４）、瓦器椀（３）を図化したが、いずれも第２包含層から巻き上がった遺物であると考えられる。遺構の帰属時期は不明である。

SD1012（第 11 図）

１区北端中央付近で検出した。検出長約 1.4 mで最大幅は 0.25m を測る。断面形状は椀状で残存深度は 0.15 mである。主軸方位は N38.5° E を測る。埋土は暗褐色細礫混じり粘質シルトの単層である。両端は SX1003・SX1005 に切られて途切れるが、北端では SX1020 を切っており、SX1003 以前、SX1020 以降の開削である。なお、延伸した先に溝状遺構は確認できず、もともと両端へ延びなかったか、後世の削平により消滅した可能性が想定できる。

出土遺物は少量で、図化に耐えうるものはわずかながら瓦器椀や吉備系土師質土器椀、土師質土器鍋などの小片を含む。製塩土器（５）を図化したが、下位にある SX1022 から巻き上がった遺物であると考えられる。遺構の帰属時期は中世以降である。



第９図　SK1004 平・断面図、出土遺物

第 10 図　SD1011 平･断面図、出土遺物

第 11 図　SD1012 平･断面図、出土遺物

SD1013（第 12 図）

１区北端中央付近で検出した。検出長約 0.25 ｍで最大幅は 0.2m を測る。断面形状は浅い椀状で残存深度は 0.05 ｍである。両端は SX1001･SX1020 に切られて途切れる。延伸した先に溝状遺構は確認できず、もともと両端へ延びなかったか、後世の削平により消滅した可能性が想定できる。

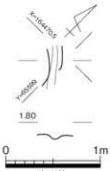
出土遺物は少量で、図化し得なかったが、瓦器椀や吉備系土師質土器椀、土師質土器鍋などの小片を含む。いずれも第２包含層及び SX1022 から巻き上がった遺物であると考えられる。遺構の帰属時期は中世以降である。

SD2001（第 13 図）

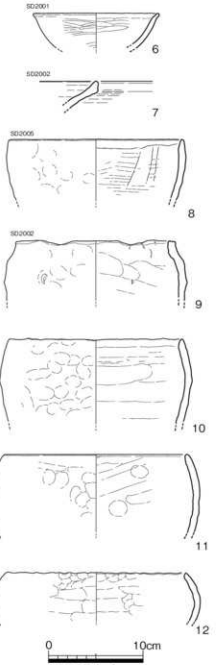
２区北半で検出した。検出長 6.5 ｍ、最大幅１ｍを測り、残存深度 0.1 ｍの浅い皿状断面を呈する。東西方向の溝であるが、東端はやや北側へ振れ、SD2002 により切られる。出土遺物はあまり多くなく、製塩土器を中心とする。土師器坏（６）を図化した。

SD2002（第 13 図）

２区北半で検出した。検出長 7.3 ｍ、最大幅 1.6 ｍを測り、残存深度 0.1 ｍの浅い皿状断面を呈する。東西方向の溝で地筆境の方向と合致する。出土遺物は多量の製塩土器片を主体とし、若干の須恵器・土師質土器類を含む。７は東播系須恵器捏鉢の口縁部片である。９～ 12 は製塩土器である。内湾する深



第12図　SD1013平・断面図

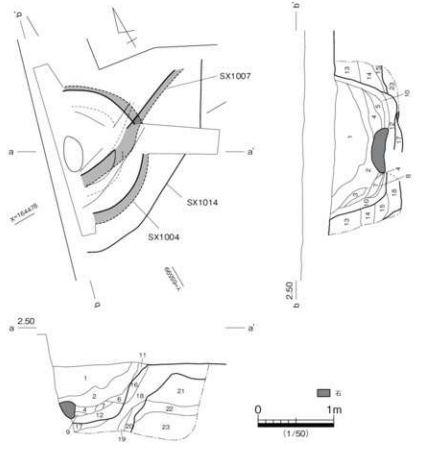


第13図　2区1面SD出土遺物

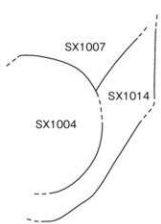
鉢状で1cmほどの器壁を持つ。外面は指頭痕が目立つほか、軽微なナデ調整が施される。内面はヨコナデが目立つが、二枚貝条痕を留めるものが認められる。備讃Ⅵ式のものと考えられる。製塩土器は原位置を保つものではなく、埋め戻し土の中に混入していたと考えられる。

製塩遺構

この面の主たる遺構である。以下概略を記す。これらは対象地の中で分布域が限られており、調査区北端部の南北20ｍ、東西８ｍの範囲に集中して確認出来る。大きく見ると西側及び東側に分布が分かれ、共に南北方向に直線的な配置をとる。個々の遺構は大半が調査区外へ延びるうえ、複数基が重複しており規模などが不明であるが、幸い正確な規模や形状がわかるものを２基確認できた。この２基の規模や形状を基に推定できる長軸方向を基準とした場合、主軸方位は、ほぼ南北方向を向くもの、西ないし東へ振れるものなど一定しない。規模は大型のものと小型のものが認められるが、構造はいずれもほぼ共通し、平面楕円形、断面逆台形を呈する大型土坑状の掘り方内面に、厚さ0.1ｍ程の粘土を貼り付けたものである。工具痕などは確認できなかったが、粘土はかなり硬く締まることから、念入りにたたき締められた可能性が高い。遺構の状況から粘土が貼り付けられた状態が機能時の形態を示すと考えられ、貼付粘土を以下「粘土床」と仮称し、掘り方とは区分して記載する。なお、粘土床内の埋土は大きく３層程度に分層でき、下から順に細砂混じりの泥質シルト、粘土ブロック混じり砂質シルト、粘土ブロック混じり粘質シルトである。いずれの層も土中に空隙を持ち、締まりが緩やかである。特に粘土床直上に堆積する泥質シルト層は、泥水の泥分を沈殿させて上澄みを除去した後に若干乾燥させたもののように見える。したがって下層は機能時堆積物で、廃絶される直前に排水が行われ、やや乾燥が進んだのちに埋め戻された結果であると考えられる。上２層以上は埋め戻し時の堆積と考えられる。以下、個別の差異について分布域の北西から南東へと順に記載する。なお、各



	1	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色粗砂混じり粘質シルト	2.5Y3/1 黒褐色粘土ブロック多く含む地山細礫を多く含む
	2	2.5Y3/1	黒褐色粘土	2.5Y6/3 にぶい黄色粘土小ブロック・5Y4/2 灰オリーブ色粘土小ブロック多く含む
	3	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色中砂混じり粘質シルト	
	4	10YR5/6	黄褐色粗砂混じり中砂	
	5	2.5Y4/1	黄灰色粗砂混じり粘土	
SX1004	6	5Y4/2	灰オリーブ色粘土	
SX1004	7	2.5Y4/3	オリーブ褐色中砂混じり粘土	しまり悪い
SX1004	8	2.5Y4/1	黄灰色中砂混じり粘質シルト	
SX1004	9	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色粗砂混じり粘質シルト	しまり悪い
SX1004	10	2.5Y4/2	暗灰黄色中砂混じり粘土	
SX1004	11	10YR4/3	にぶい黄褐色細礫混じり粘質シルト	
SX1004	12	5Y4/3	暗オリーブ色中砂混じり粘土	
SX1004	13	2.5Y4/6	オリーブ褐色細礫混じり粘質シルト	
SX1004	14	2.5Y4/3	オリーブ褐色細礫混じり中砂	
SX1004	15	2.5Y4/3	オリーブ褐色中砂混じり粘質シルト	
SX1014	16	2.5Y4/2	暗灰黄色細礫混じり粘質シルト	
SX1014	17	2.5Y5/2	暗灰黄色中砂混じり粘土	細礫を少量含む
SX1014	18	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色細礫混じり粘質シルト	
SX1014	19	2.5Y5/2	暗灰黄色中砂混じり粘質シルト	
SX1014	20	2.5Y4/2	暗灰黄色中砂混じり粘質シルト	2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂混じり粘質シルトブロック状に含む
SX1014	21	2.5Y4/3	オリーブ褐色細礫混じり粘質シルト	
SX1014	22	2.5Y4/4	オリーブ褐色中砂混じり粘質シルト	
SX1014	23	10YR5/4	にぶい黄褐色中砂混じり細礫	

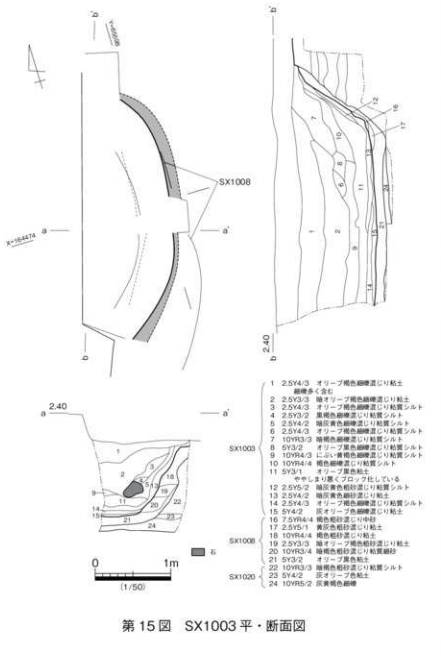


第 14 図　SX1004・SX1007・SX1014 平・断面図

平面図は破線で表現したものが掘り方上場・下場、実線で表現したものが粘土床上場（太線）・下場（細線）、検出面で確認出来る粘土床をトーンで示した。

SX1004（第 14 図）

西列北端で確認した。約 1 / 2 が調査区外へ延びると考えられ、掘り方の平面形は長径約 1.25 m 以上×短径 1.9 m の楕円形、断面形状は逆台形を呈し、深さは 0.9 m を測る。内側に 0.1 m 程度の厚さで粘土が貼り付けられ、内法は長径 1.2m 以上×短径 1.65m、深さ 0.65 m を測る。小型の部類に入る。貼り付けられた粘土は中砂を交え、暗灰黄色を呈する。断面観察では横断面の残存状況は良好であるが、縦断面側は粘土床に乱れが見られる。粘土床直上に黄褐色粗砂混じり中砂（4 層）が堆積し、その上にもう一面粘土床（2 層）があるように見えるが、西壁北半では認められず、粘土が埋土中にブロック状に混入することから、他の粘土床が廃絶した際の粘土が投棄されたと考えられる。粘土床は 10 層と 8 層に分層可能で、粘土を貼った際の単位であろう。中央付近に大型の砂岩礫が 1 点認められる。不規則な形をしており上面



第 15 図　SX1003 平・断面図

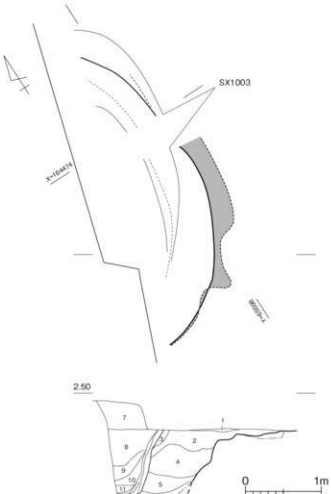
を平坦になるように設置していないものの、床から壁に立ち上がるように張られた粘土（南北断面 10 層）により裾部が埋められていることから、粘土床機能時に設置されていたものと考えられる。上部構造を支えるための礎石であったと考えられる。SX1007 と SX1014 とそれぞれ重複するが、切り合いからこれらに後出する遺構であると判断できる。

遺物は比較的多量出土するが、古墳時代後期の製塩土器片及び中世土器である。下層に当該期の遺構並びに包含層が存在し製塩遺構の掘削時に破壊されていることから、これらに含まれた遺物が巻き上げられたものと考えられる。小片が多いほか、明らかに混入であることから図化したものはない。中世以降に帰属すると考えられる。

SX1007（第 14 図）

西列北端で確認した。約 3／4 が調査区外へ延びるほか後出する SX1004 による削平が著しいことから平面形状は不明である。残存規模は掘り方が約 2.0 m以上× 1.6 m以上あったと考えられ、断面形状は逆台形を呈し、深さは約 0.9 mを測る。断面を図示し得なかったが、写真記録（図版 8 参照）を見る限り、埋没状況は他の製塩遺構と大差はない。本来、内側に 0.1 m程度の厚さで灰色系の粘土が貼り付けられていたが壁面上端部の粘土は剥落し残存しない。SX1004 と SX1014 とそれぞれ重複するが、切り合いから SX1004 に先行し、SX1014 に後出する遺構であると判断できる。

遺物は比較的多量出土するが、古墳時代後期の製塩土器片及び中世土器である。下層に当該期の遺構並びに包含層が存在し製塩遺構の掘削時に破壊されていることから、これらに含まれた遺物が巻き上げられたものと考えられる。小片が多いほか、明らかに混入であることから図化したものはない。中世以降に帰属すると考えられる。



第 16 図　SX1008 平・断面図

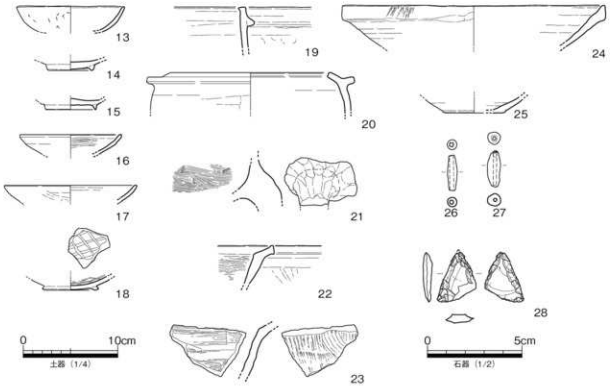
SX1014（第 14 図）

西列北端で確認した。約 3 / 5 が調査区外へ延びると考えられ、掘り方の平面形は長径約 3.2 m 以上×短径 2 m 以上の楕円形、断面形状は逆台形を呈し、深さは約 1 m を測る。本来、内側に 0.1 m 程度の厚さで灰色系の粘土が貼り付けられていたが、底部及び壁面裾部分でわずかに残存するのみであった。使用時に剥落したか解体に伴って剥がされたかは不明である。SX1004・SX1007 とそれぞれ重複するが、切り合いから両遺構に先行する遺構であると判断できる。

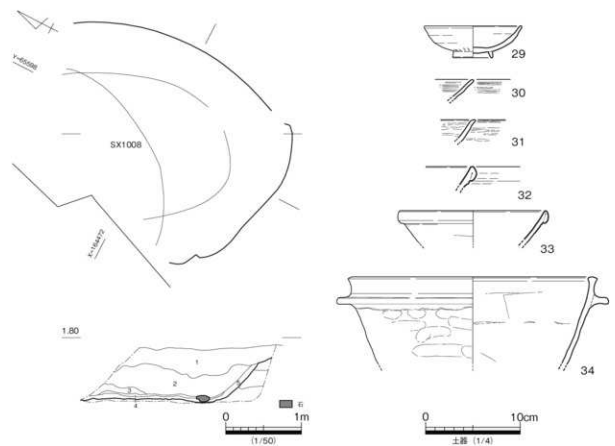
遺物は比較的多量出土するが、古墳時代後期の製塩土器片及び中世土器である。下層に当該期の遺構並びに包含層が存在し製塩遺構掘削時に破壊されていることから、これらに含まれた遺物が巻き上げられたものと考えられる。小片が多いほか、明らかに混入であることから図化したものはない。中世以降に帰属すると考えられる。

SX1003（第 15 図）

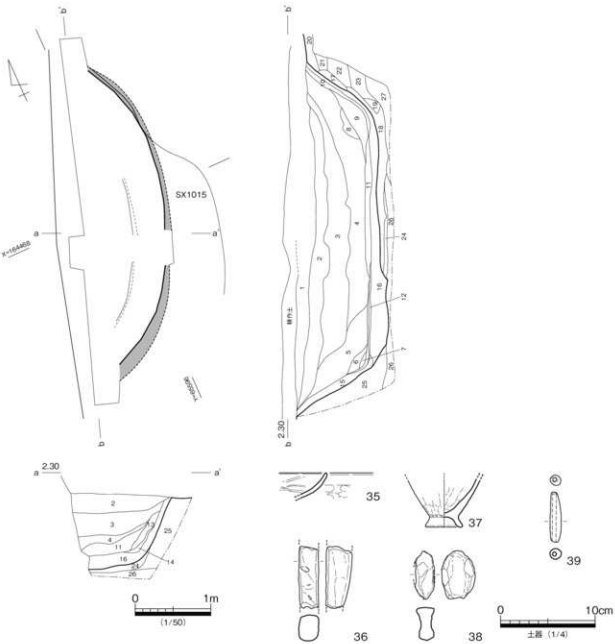
西列中央北寄りで確認した。約 2 / 3 が調査区外へ延びると考えられ、掘り方の平面形は長径約 3.5 m 以上×短径 1.2 m 以上の楕円形、断面形状は逆台形を呈し、深さは約 1 m を測る。内側に 0.1 ～ 0.15 m 程度の厚さで粘土が貼り付けられ、粘土床をなす。内法の寸法は長径約 3.3 m 以上×短径 1.1 m 以上で深さ約 0.9 m を測る。貼り付けられた粘土は暗灰黄色・オリーブ褐色・灰オリーブ色の細砂ないし細礫を交える。粘土床は下位の SX1008 の粘土床直上に設けられており、SX1008 を作り替えたものである可能性が考えられる。その際に規模を少し小型化したため、南側では粘土床が重複しないのだと考えられる。SX1008 の粘土床は床部と側面部の境界付近がやや薄くなっているかほぼ壁部が無くなっているところがあり、これが作り替えの原因になったのかもしれない。さて、SX1003 の埋土は、11 層以上が埋め戻し土で 11 層が機能時堆積層である。11 層は粘土床上部に溜まっ



第 17 図　SX1008 出土遺物



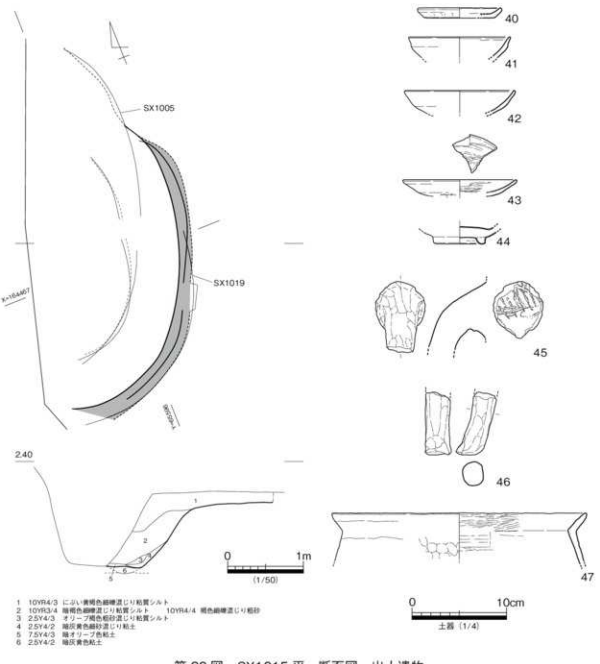
第 18 図　SX1020 平・断面図、出土遺物



SX1005

1	10YR3/2	黒褐色細礫混じり粘質シルト	
2	10YR4/3	にぶい黄褐色細礫混じり粘質シルト	
3	10YR4/2	灰黄褐色細礫混じり粘質シルト	
4	7.5YR5/4	時褐色細礫混じり粘質シルト	しまり悪し 炭化物・焼土塊多く含む
5	10YR4/3	にぶい黄褐色細礫混じりシルト	
6	5Y4/3	暗オリーブ色細礫混じり粘質シルト	10YR4/2 灰黄褐色細礫混じり粘質シルト層状に含む
7	2.5Y4/2	暗灰黄色細礫混じり粘土	
8	2.5Y4/3	オリーブ褐色中砂混じり粘質シルト	細礫を少量含む
9	2.5Y5/2	暗灰黄色中砂混じり粘質シルト	砂質やや強い
10	2.5Y4/2	暗灰黄色中砂混じり粘土	硬くしまる 2.5Y4/2 暗灰黄色中砂混じり粘土を部分的に含む
11	5Y4/2	灰オリーブ色粘土	10YR4/1 褐灰色細礫混じり粘質シルト層状に含む
12	10YR4/1	褐灰色細礫混じり粘質シルト	
13	5Y4/3	暗オリーブ色細礫混じり粘質シルト	10YR4/2 灰黄褐色細礫混じり粘質シルト層状に含む
14	2.5Y4/2	暗灰黄色細礫混じり粘土	
15	5Y4/2	灰オリーブ色細礫混じり粘土	
16	5Y3/2	オリーブ黒色中砂混じり粘土	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色中砂混じり粘土層状に含む
17	10YR3/3	暗褐色中砂混じり粘質シルト	
18	2.5Y3/3	暗オリーブ褐色中砂混じり粘土	10YR4/3 にぶい黄褐色粘質シルト、2.5Y4/2 暗灰黄色細礫混じり粘質シルトを層状に多く含む
19	2.5Y5/2	暗灰黄色シルト	
20	10YR3/3	暗褐色細礫混じり粘質シルト	
21	2.5Y4/6	オリーブ褐色細礫混じり粘質シルト	
22	2.5Y4/3	オリーブ褐色細礫混じり中砂	
23	2.5Y5/3	黄褐色中砂混じりシルト	
24	10YR4/2	灰黄褐色細礫混じり粘質シルト	
25	SX1015	埋土	
26	5Y4/2	灰オリーブ色中砂混じり粘土	
27	10YR6/4	にぶい黄橙色中砂混じり細礫	

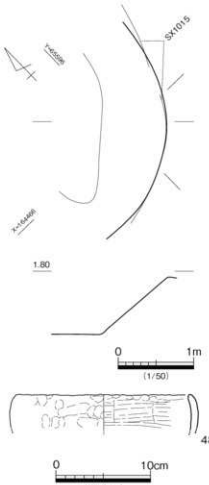
第 19 図　SX1005 平・断面図、出土遺物



第 20 図　SX1015 平・断面図、出土遺物

た泥と考えられ、ブロック状にひび割れることから、埋め戻される前に半乾燥状態にあったと考えられる。大半がSX1008と、南東1／3がSX1020とそれぞれ重複するが、切り合いからこれらに後出する遺構であると判断できる。

遺物は比較的多量出土するが、古墳時代後期の製塩土器片及び中世土器である。下層に当該期の遺構並びに包含層が存在し製塩遺構掘削時に破壊されていることから、これらに含まれた遺物が巻き上げられたものと考えられる。小片が多いほか、明らかに混入であることから図化したものはない。中世以降に帰属すると考えられる。



第21図　SX1019平・断面図、出土遺物

SX1008（第16・17図）

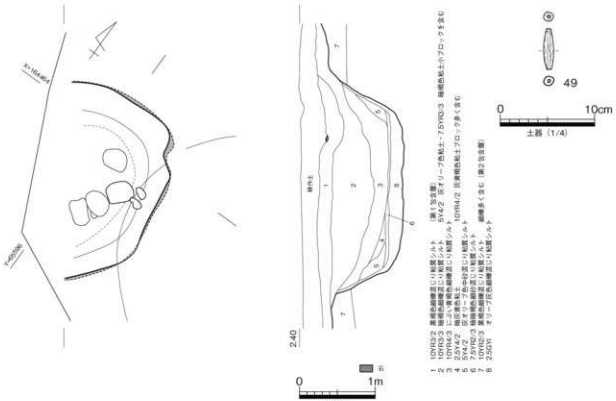
西列中央で確認した。約3／5が調査区外へ延びると考えられ全容は不明であるが、掘り方の平面形が長径約4.0m以上×短径1.5m以上の楕円形を呈すると考えられ、逆台形の断面形状を呈し、深さは約1.15mを測る。内側に0.15m程度の厚さでオリーブ黒色を呈する粘土が貼り付けられる。内法深さは約1mである。SX1003で記載したように北側の床部と壁部の境界付近の粘土が薄くなっているほか、東側の壁部で粘土床が無くなっており、粘土床が機能しなくなったと考えられる。SX1003とSX1020とそれぞれ重複するが、切り合いからSX1003に先行し、SX1020に後出する遺構であると判断できる。

遺物は比較的多量出土するが、古墳時代後期の製塩土器片及び中世土器である。下層に当該期の遺構並びに包含層が存在し製塩遺構掘削時に破壊されていることから、これらに含まれた遺物が巻き上げられたものと考えられる。比較的形状が把握できる資料を図化した。土師質土器椀（13～15）、足釜（21）、鍋（22・23）、瓦器小皿（16）椀（17・18）、瓦質土器羽釜（19・20）、須恵器鉢（24・25）、管状土錘（26・27）、石鏃（28）などが出土する。帰属時期は中世以降であると考えられる。

SX1020（第18図）

西列中央で確認した。約1／5が調査区外へ延びると考えられるほか、SX1003とSX1008に切られることから全体の規模は明確ではないが、掘り方の平面形は長径約4.0m以上×短径1.5m以上の楕円形、断面形状は逆台形を呈し、深さは約0.7mを測る。内側に0.05～0.08m程度の厚さで灰オリーブ色の粘土が貼り付けられる。内法深さは約0.6mである。最上層埋土の1層が粘土床上端を削って堆積していること、重複関係にあるSX1003・SX1008の検出レベルより約0.3m低いことから、これらに先行する遺構であると同時に、廃絶した後に整地するなどでかさ上げが行われた可能性が考えられる。かさ上げを行っている場合、第2包含層がそのかさ上げに使用された土となる可能性があり、後述するSX1027同様、第2面に帰属する遺構となる可能性が考えられる。埋土も周辺の地山を大量にブロックで含んでいると考えられる黄褐色細礫混じり粘質シルトが最初期に堆積しており、周辺の地山を削るなどして埋め立てたことが推測できる。粘土床の壁立ち上がり角度が他のものと比べて浅い。掘り方が砂地を掘削していることから、安息角を得るために角度を浅くした可能性がある。

遺物は比較的多量出土するが、古墳時代後期の製塩土器片及び中世土器である。下層に当該期の遺構並びに包含層が存在し製塩遺構掘削時に破壊されていることから、これらに含まれた遺物が巻き上げられたものと考えられる。土師質土器椀（29）、瓦器椀（30・31）、白磁椀（32・33）、瓦質土器羽釜（34）を図化した。少なくともこれらよりも後出する遺構であると考えられる。



第 22 図　SX1002 平・断面図、出土遺物

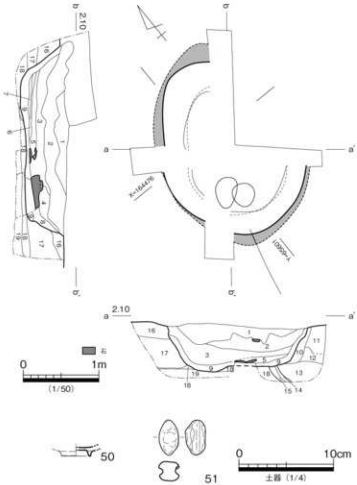
SX1005（第 19 図）

西列南半で確認した。約 3 / 5 が調査区外へ延びると考えられ、掘り方の平面形は長径約 4.5 m以上×短径 1.4 m以上の楕円形、断面形状は逆台形を呈し、深さは約 1.2 mを測る。内側に 0.1 ～ 0.2 m程度の厚さで粘土が貼り付けられ、内法は長径約 3.9m 以上×短径約 1 m 以上、深さ 0.8 ～ 0.9 mを測る。貼り付けられた粘土はオリーブ黒色・灰オリーブ色・暗灰黄色などを呈する中砂ないし細礫を含むものが用いられる。SX1015 と SX1019 とそれぞれ重複するが、切り合いからこれらに後出する遺構であると判断できる。

遺物は比較的多量出土するが、古墳時代後期の製塩土器片及び中世土器である。下層に当該期の遺構並びに包含層が存在し製塩遺構掘削時に破壊されていることから、これらに含まれた遺物が巻き上げられたものと考えられる。瓦器椀（35）、土師質土器足釜（36）、製塩土器（37）、有溝土錘（38）、管状土錘（39）を図化した。少なくともこれらよりも後出する遺構であると考えられる。

SX1015（第 20 図）

西列南半中央で確認した。約 1 / 2 が調査区外へ延びると考えられ、掘り方の平面形は長径約 4 m以上×短径 2 m以上の楕円形、断面形状は逆台形を呈し、深さは 0.95 mを測る。内面に 0.1 m程度の粘土を貼り付けて粘土床を構築していたと考えられるが、壁面の粘土がほぼ残存しておらず、底部にわずかに認められるのみである。上層埋土が掘り方外側まで広がっており、廃絶に伴って一気に埋め戻された可能性が考えられる。また、上位にある SX1005 の検出面と約 0.2 mの差があり、本来第 2 面に帰属すべき遺構である可能性が考えられる。SX1019 とそれぞれ重複するが、切り合いから SX1005 に先行し、



第 23 図　SX1006 平・断面図、出土遺物

SX1019 に後出する遺構であると判断できる。

遺物は比較的多量出土するが、古墳時代後期の製塩土器片及び中世土器である。下層に当該期の遺構並びに包含層が存在し製塩遺構掘削時に破壊されていることから、これらに含まれた遺物が巻き上げられたものと考えられる。土師質土器小皿（40）、椀（41・42）、足釜（45・46）瓦器椀（43）、青磁椀（44）、土師器甕（47）を図化した。

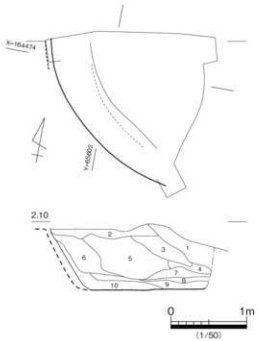
SX1019（第 21 図）

西列南半中央で確認した。後出する SX1015 とほぼ同じ位置で重なって検出しており、わずかに南東部のごく一部が残存しているのみである。内側に 0.1 m 程度の厚さで灰色粘土が貼り付けられる。掘り方の形状から SX1015 とほぼ同規模の遺構であると判断できる。

遺物は比較的多量出土するが、古墳時代後期の製塩土器片及び中世土器である。下層に当該期の遺構並びに包含層が存在し製塩遺構掘削時に破壊されていることから、これらに含まれた遺物が巻き上げられたものと考えられる。製塩土器（48）を図化した。

SX1002（第 22 図）

西列南端で確認した。約半分が調査区外へ延びると考えられ、掘り方の平面形は長径約 2 m以上×短径 3.4 m の楕円形、断面形状は逆台形を呈し、深さは約 0.9 m を測る。内側に 0.05 ～ 0.2 m 程度の厚さで粘土が貼り付けられる。底部で厚みを保つのに対し、壁面では薄くなっており、使用に伴い厚みが減じたと考えられる。廃棄される一因となったかもしれない。貼り付けられた粘土は灰色を呈する。粘土床の中心付近で、人頭大の礫が 4 点確認できた。厚みのある大型礫であること、粘土床中心から外れること、配置が不規則であること、周辺にこれらの礫が据え付けられた痕跡が認められないことから、直



1　耕作土
2　10YR3/3　暗褐色細礫混じり粘質シルト
3　10YR3/3　暗褐色粗砂混じり粘質シルト
4　10YR3/3　暗褐色と 10YR3/2　黒褐色の中間　粘質シルト
5　10YR3/4　暗褐色細礫混じり粘質シルト　2.5Y5/3　暗灰黄色粗砂混じり粘土ブロックを多く含む
6　2.5Y4/3　オリーブ褐色細砂混じり粘質シルト　上部は樹木根のカク乱著しい
7　2.5Y5/3　黄褐色細礫混じりシルト　焼土粒若干含む
8　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色粘土　平たい小礫多く含む
9　7.5YR3/4　暗褐色粘土混じり細礫
10　2.5Y4/3　オリーブ褐色粘土混じり細礫　10YR3/4　暗褐色シルトをブロック状に含む

第 24 図　SX1009 平・断面図

接 SX1002 に関連するものではなく、粘土床を埋め戻す際に投棄されたものであると判断した。東端で SX1010 と重複するが、切り合いから SX1010 に先行する遺構であると判断できる。

遺物は比較的多量出土するが、古墳時代後期の製塩土器片及び中世土器である。下層に当該期の遺構並びに包含層が存在し製塩遺構掘削時に破壊されていることから、これらに含まれた遺物が巻き上げられたものと考えられる。管状土錘（49）を図化した。帰属時期は中世以降に帰属すると考えられる。

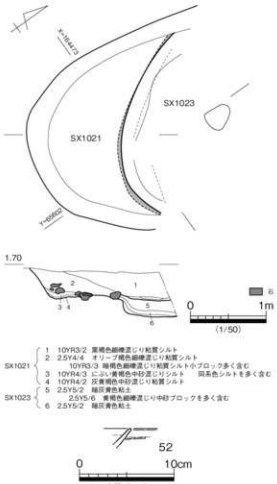
SX1006（第 23 図）

東列北端で確認した。約 1 / 4 が未掘削であるがほぼ完形に近い形状であったと考えられ、掘り方の平面形は長径約 2.5 m × 短径 1.8 m の楕円形、断面形状は逆台形を呈し、深さは約 0.5 m を測る。内側に 0.1 m程度の厚さで粘土が貼り付けられ、内法は長径 2.3m × 短径 1.65m を測る。小型の部類に入る。貼り付けられた粘土は暗灰黄色を呈する。SX1009、SX1021、SX1023 とそれぞれ重複するが、切り合いからこれらに後出する遺構であると判断できる。粘土床南壁裾で人頭大の礫 3 基を確認した。厚みのある大型礫であること、粘土床中心から外れること、配置が不規則であること、周辺にこれらの礫が据え付けられた痕跡が認められないことから、直接 SX1006 に関連するものではなく、粘土床を埋め戻す際に投棄されたものであると判断した。

遺物は比較的多量出土するが、古墳時代後期の製塩土器片及び中世土器である。下層に当該期の遺構並びに包含層が存在し製塩遺構掘削時に破壊されていることから、これらに含まれた遺物が巻き上げられたものと考えられる。磁器椀（50）及び有溝土錘（51）を図化した。51 はきめ細かい胎土で、非常に堅緻に焼締まる。焼き締め陶器である。両者ともに近世以降のものと考えられる。

SX1009（第 24 図）

東列北端で確認した。北約 1 / 2 が未掘削であるほか、SX1006 に削平されている。掘り方の平面形は長径約 2 m以上 × 短径 1.2 m以上の楕円形と推定され、断面形状は逆台形を呈し、深さは約 0.9 m を測る。内側に 0.1 m程度の厚さで暗灰黄色系の粘土が貼り付けられる。上層埋土には、周辺に存在した粘土床を持つ遺構の廃絶・解体に伴うと考えられる暗灰黄色系の粘土ブロックが多く含まれる。最上層には耕作土がかぶっており、削平された下段へと続く。これより東は削平の影響を受けていると判断できる。遺構の規模は小型の部類に入る。SX1006、SX1021、SX1023 とそれぞれ重複するが、切り合い



第 25 図　SX1021・1023 平・断面図、出土遺物

から SX1006 に先行し、SX1021・23 に後出する遺構であると判断できる。

遺物は比較的多量出土するが、古墳時代後期の製塩土器片及び中世土器である。下層に当該期の遺構並びに包含層が存在し製塩遺構掘削時に破壊されていることから、これらに含まれた遺物が巻き上げられたものと考えられる。したがって、製塩遺構は中世以降に帰属すると考えられる。

SX1021（第 25 図）

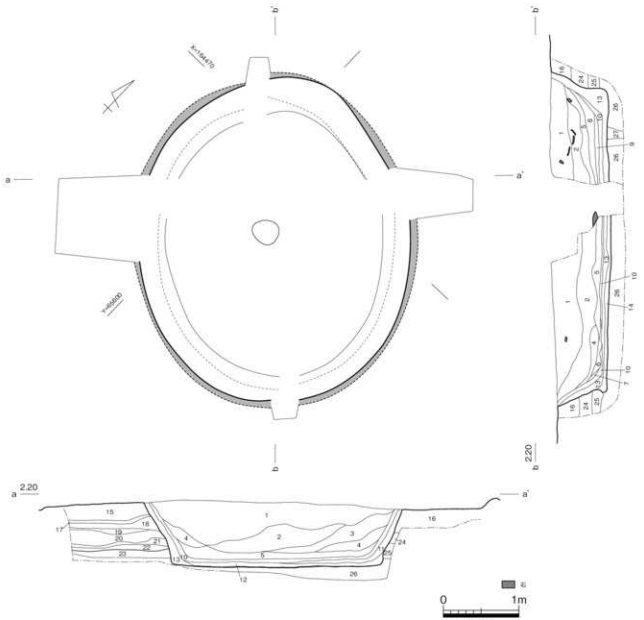
東列北端で確認した。北約 1 / 2 が SX1006・1009 により削平されているため、残存する掘り方の平面形は長径約 2.5 m 以上 × 短径 2.5 m の楕円形、断面形状は逆台形を呈し、深さは約 0.3 m を測る。粘土床が認められず、剥落したか、意図的に剥ぎ取ったと考えられる。掘り方床面は地山の細礫層が露出するが、壁面はシルト層を掘り込んでいることから容易に崩落しなかったと考えられる。SX1023 と重複するが、切り合いからこれに後出する遺構であると判断できる。

遺物は比較的多量出土するが、古墳時代後期の製塩土器片及び中世土器である。下層に当該期の遺構並びに包含層が存在し製塩遺構掘削時に破壊されていることから、これらに含まれた遺物が巻き上げられたものと考えられる。瓦器椀（52）を図化したが、他のものも含め小片化が著しい。中世以降に帰属すると考えられる。

SX1023（第 25 図）

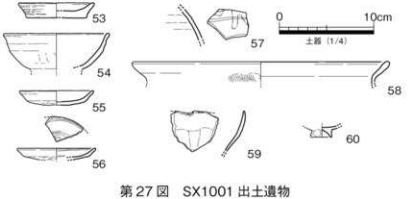
東列北端で確認した。北約 1 / 2 が調査区外へ延びることから全体の形状は不明であるが、掘り方の平面形は概ね長径約 2 m 以上 × 短径 1 m 以上の楕円形と推定され、断面形状は逆台形を呈し、深さは約 0.2 m を測る。床面に 0.2 m 程度の厚さで暗灰黄色粘土が貼り付けられる。削平のため、壁面は残存しないが、遺構面からの深さを基に約 0.4 m の深さがあったと推定する。床面中央には幅最大 0.3 m、長さ最大 0.3 m、厚さ 0.1 m 程の扁平な砂岩礫が残置される。特に掘り方など据え付けに伴う構造は確認できない。礫は自然礫で加工は認められない。上部構造の礎石として機能していた可能性がある。SX1006、SX1009、SX1021 とそれぞれ重複するが、切り合いからこれら全てに先行する遺構であると判断できる。

遺物は比較的多量出土するが、古墳時代後期の製塩土器片及び中世土器である。下層に当該期の遺構並びに包含層が存在し製塩遺構掘削時に破壊されていることから、これらに含まれた遺物が巻き上げら



SX1001	1	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粗砂混じり粘質シルト 2.5Y4/3 オリーブ褐色細砂混じり粘質シルト・10YR4/3 にぶい黄褐色細砂混じり粘質シルトブロックを若干含む	埋戻し土
	2	2.5Y4/3 オリーブ褐色粗砂混じりシルト 10YR3/3 暗褐色粗砂混じり粘質シルト・2.5Y4/2 暗灰黄色細砂混じり粘質シルトブロックを多く含む	
	3	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粗砂混じりシルト 10YR3/3 暗褐色粗砂混じり粘質シルト・2.5Y4/2 暗灰黄色細砂混じり粘質シルトブロックを多く含む	
	4	2.5Y5/4 黄褐色粗砂混じりシルト	機能時最終堆積
	5	10YR4/3 にぶい黄褐色粗砂混じり粘質土 7.5YR2/3 極暗褐色粘質土 ブロック多く含む他 北側で粗砂の比率が高くなる	
	6	2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘土 しまりやや悪し	
	7	7.5YR3/4 暗褐色細砂混じり粘質シルト	
	8	5Y4/4 暗オリーブ色細砂混じり粘土	
	9	2.5Y4/6 オリーブ褐色細砂混じり粘土	
	10	5Y4/2 灰オリーブ色細砂混じり粘質土	木屋
	11	10YR3/4 暗褐色粗砂混じり粘質土 7.5YR3/4 暗褐色粘土 小ブロックを多く含む	基礎構築土
	12	2.5Y3/2 黒褐色粗砂混じり粘質土 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土と瓦屋をなす	
	13	10YR3/4 暗褐色粗砂混じり粘質土	
	14	2.5Y4/2 暗灰黄色細砂混じり粘土	
	15	10YR3/2 黒褐色粗砂混じり粘質土	整地土?
	16	10YR3/2 黒褐色粗砂混じり粘質土	
	17	10YR3/3 暗褐色粗砂混じり粘質土	部分的に炭化物を含む
	18	10YR3/4 暗褐色粗砂混じり粘質土	
? SX1002	19	10YR3/3 暗褐色粗砂混じり粘土	
	20	2.5Y5/3 黄褐色粗砂混じり砂質シルト	
	21	10YR5/4 にぶい黄褐色細砂質シルト	土器小片を多量含む
	22	2.5Y5/4 黄褐色粗砂混じり粘質シルト	
	23	2.5Y6/4 にぶい黄色粗砂混じり細砂	地山
	24	2.5Y5/3 黄褐色粗砂混じり粘質土	
	25	2.5Y6/4 にぶい黄色粗砂混じり細砂	
	26	10YR5/4 にぶい黄褐色粗砂	
	27	10YR4/3 にぶい黄褐色細砂	

第 26 図　SX1001 平・断面図



第27図　SX1001 出土遺物

れたものと考えられる。したがって、中世以降に帰属すると考えられる。

SX1001（第26・27図）

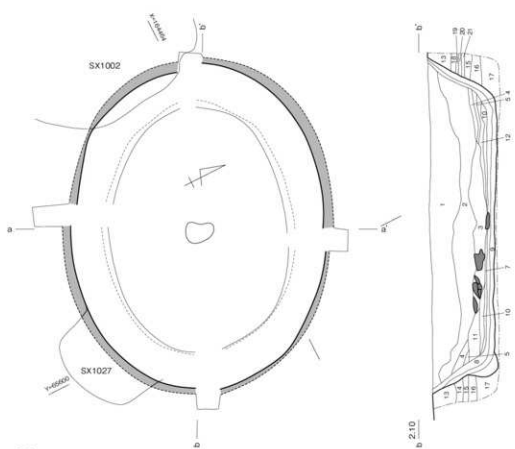
東列の中心で確認した。掘り方の平面形は長径約4.4 m×短径約3.7 mの楕円形、断面形状は逆台形を呈し、深さは0.85 mを測る。内側に0.1 m程度の厚さで粘土が貼り付けられ、内法は長径4.2m×短径3.5mを測る。貼り付けられた粘土は灰オリーブ色や暗褐色、黒褐色を呈し、細砂や粗砂を交える。暗紫色に見える箇所もあり被熱の可能性を想定したが、他の粘土に挟まれるところもあることから、被熱したものではなく本来の粘土の色調に由来するものと考える。粘土床の中央付近に長軸0.4 m、短軸0.3 m程度、厚さ0.1 m弱の砂岩の平石が1点残置される。特に掘り方などは持たず、穴の底部に置いただけである。平石は自然礫を用い、特に加工を施してはいなかったが、上面の平坦面の水平を保つためか南側の下端に2枚の薄い板石が差し込まれる。上部構造の礎石として機能していた可能性がある。

遺物は比較的多量出土するが、古墳時代後期の製塩土器片及び中世土器である。下層に当該期の遺構並びに包含層が存在し製塩遺構掘削時に破壊されていることから、これらに含まれた遺物が巻き上げられたものと考えられる。土師質土器・瓦器・施釉陶器・製塩土器等が出土しているが、小片化が著しい。土師質土器小皿（53）、土師質土器椀（54）、瓦器小皿（55・56）、土師器甕（58）、製塩土器（59・60）を図化した。54は吉備系土師質土器椀と考えられる。瓦器は共に和泉産と考えられる。製塩土器は59が備讃Ⅶ式、60は備讃Ⅳc式のものと考えられる。出土遺物の時期は複数期にわたっており、瓦器椀の存在から中世以降に帰属すると考えられる。

SX1010（第28・29図）

東列南端で確認した。掘り方の平面形は長径約4.5 m×短径3.6 mの楕円形、断面形状は逆台形を呈し、深さは約0.9 mを測る。内側に0.1～0.15 m程度の厚さで粘土が貼り付けられ、内法は長径4.3m×短径3.3mを測る。貼り付けられた粘土はオリーブ黒色や暗褐色を呈し、細礫や粗砂を含む。SX1002と重複するが、切り合いからSX1010が後出する遺構であると判断できる。粘土床中央付近で厚さ0.1m程の扁平な砂岩礫が残置される。掘り方などは伴わず、ただ置いてある状態である。埋土中層位に安山岩の板石が大量に含まれる状況が確認できた。長軸最大0.3 m、厚さ0.1 m程度のものを筆頭に、100点近い礫が主に北東部を中心にまとまっていた。受熱に伴うと考えられる赤変したものが多く認められるのが特徴である。ただし、SX1010内には火の使用をうかがわせる痕跡は認められなかった。礫の出土状況から、周辺で火の使用を伴う施設などがあり、それらが解体されたものがSX1010の埋め戻しの際に同時に投棄されたと考えられる。

遺物は比較的多量出土するが、古墳時代後期の製塩土器片及び中世土器である。下層に当該期の遺構並びに包含層が存在し製塩遺構掘削時に破壊されていることから、これらに含まれた遺物が巻き上げら

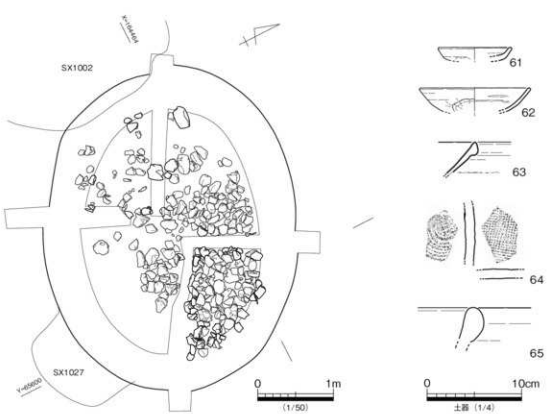


第 28 図　SX1010 平・断面図

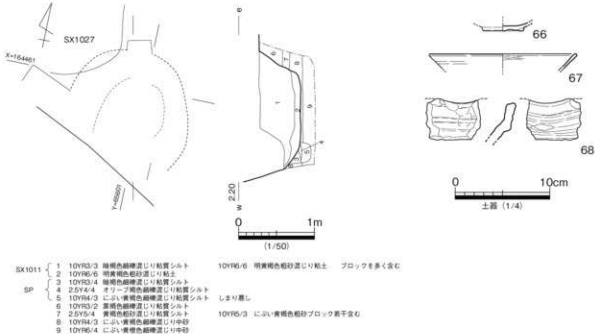
れたものと考えられる。瓦器小皿（61）、椀（62）、白磁椀（63）、須恵器甕（64）備前焼甕（65）を図化した。中世以降に帰属すると考えられる。

SX1011（第 30 図）

東列南端で確認した。約 1 / 2 が調査区外へ延びると考えられ、掘り方の平面形は長径約 1.6 m以上×短径 1.5 mの楕円形、断面形状は逆台形を呈し、深さは 0.55 mを測る。小型の部類に入る。内側に貼り付けられた粘土がほぼ残存しない事例である。底部のみに残存した可能性があるものの、あまり良好ではない。色調は明黄褐色を呈する。埋土中に同系色の粘土ブロックを多量含む。解体しながら埋め戻したと考えられる。

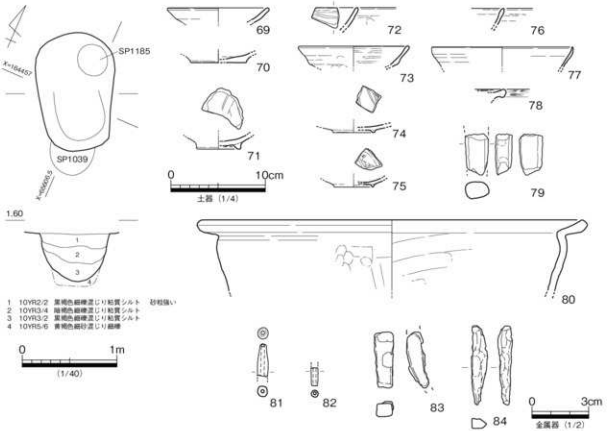


第 29 図　SX1010 遺物出土状況、出土遺物



第 30 図　SX1011 平・断面図、出土遺物

遺物は比較的多量出土するが、古墳時代後期の製塩土器片及び中世土器である。下層に当該期の遺構並びに包含層が存在し製塩遺構掘削時に破壊されていることから、これらに含まれた遺物が巻き上げられたものと考えられる。土師質土器椀（66）、瓦器椀（67）の他に、口縁部の小片のみであるが、備前焼擂鉢（68）が認められる。間壁Ⅴ期のものと考えられ、16 世紀代以降の遺構であると考えられる。



第 31 図　SK1006 平・断面図、出土遺物

第２面（弥生時代後期～鎌倉時代）

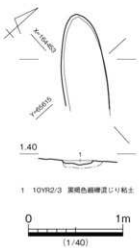
柱穴 256 基、溝状遺構８条、土坑 14 基、性格不明遺構８基、製塩遺構１基を確認した。以下、個別の遺構を記載する。

土坑

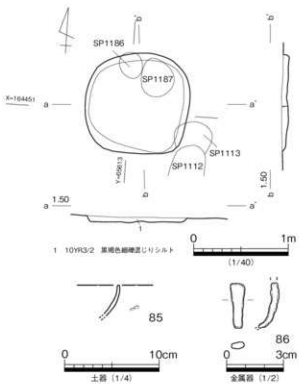
SK1006（第 31 図）

１区北半西壁寄りで検出した。長辺 1.55 m、短辺１mの隅丸方形の平面形を呈し、残存深度 0.6 mの深い椀状の断面形を呈する。埋土は黒褐色並びに暗褐色の細礫混じり粘質シルトからなる。後出する SP1185 と重複する。

出土遺物は小片がほとんどである。土師質土器小皿（69･70）、椀（71）、足釜（79）、鍋（80）、瓦器椀（72～75）、須恵器椀（76）、坏（77）、羽釜（78）の他、管状土錘（81･82）、鉄製品（83･84）を図化した。鉄製品は共に釘と考えられるが、先端及び末端が先われている。欠失部が鈍い楔状を呈しており、裁断したような外観を呈する。瓦器椀の高台断面が小さく、高台径が４㎝程度であること、内面見込にヘラミガキが残ることから、12 世紀末～ 13 世紀初頭頃のものと考えられ、遺構も概ねその頃のものと考えられる。



第32図　SK1010 平・断面図



第33図　SK1013 平・断面図、出土遺物

SK1010（第32図）

1区中央東寄りで検出した。長軸1.2 m以上、短軸0.46 mの長楕円形を呈し、残存深度0.05 mの浅い皿状断面を呈する。埋土は黒褐色細礫混じり粘土の単層である。形状から溝の断片の可能性もあるが、周辺に連続しそうな遺構が見られないことから土坑として扱った。

出土遺物は少量で、図化に耐え得るものが無い。瓦器椀が認められることから中世以降の遺構であると考える。

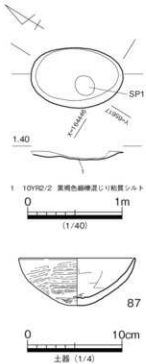
SK1013（第33図）

1区中央で検出した。東西1.1 m、南北1 mの平面形が隅丸方形を、残存深度0.05 mの断面形状が浅い箱型を呈する。上面の削平により目立たないが、直立する壁を持っていた可能性がある。埋土は黒褐色細礫混じりシルトの単層である。SP1186・1187・1113に切られる。

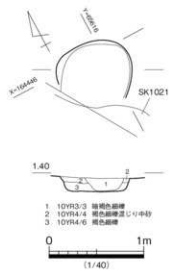
出土遺物は少量で瓦器椀・吉備系土師質土器椀の小片がほとんどである。土師質土器椀（85）の他、鉄製品（86）を図化した。鉄製品は刀子の断片と考えられるが、細身であるうえ、湾曲する。廃棄などにあたって折り曲げた可能性がある。

SK1017（第34図）

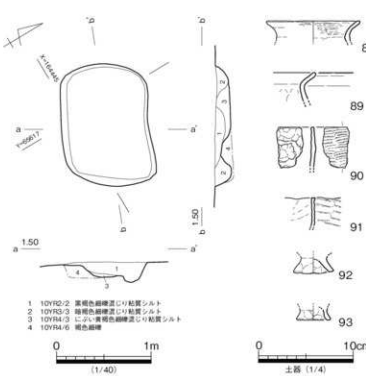
1区中央南寄りで検出した。長軸0.9 m、短軸0.65 m、断面形状浅い皿状で残存深度は0.1 mを測る。後出するSP1154と重複するが、このSP1154を掘削する際に範囲を広く掘りすぎてしまい、遺物が混じってしまっている。出土状況から、後述する87は単体で埋没していたと考えられ、遺構の時期は87の帰属時期と一致すると考える。



第 34 図　SK1017 平・
断面図、出土遺物



第 35 図　SK1019 平・
断面図



第 36 図　SK1020 平・断面図、出土遺物

図化しうる遺物が限られており、土師器鉢（87）を図示した。古墳時代前期初頭のものと考えられ、遺構の時期も同じであると考える。

SK1018

1 区中央南寄りで検出した。台風の大雨によってアゼが崩落したため、土層記録が図化できていない。写真記録を見ると西側で柱穴と重複しているように見える。また、SD1008 とは接点を有する。埋土は淡赤褐色を呈し、周辺で見られる焼土と色調が類似する。出土遺物は不明である。

SK1019（第 35 図）

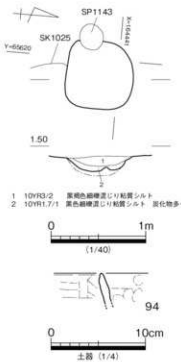
1 区中央南寄りで検出した。やや不整形な直径 0.8 m の円形を呈し、断面形状は箱形で残存深度 0.3 m を測る。埋土は概ね 3 層に分かれ、暗褐色または褐色の細礫か細礫混じり中砂からなる。出土遺物は微量で製塩土器の小片を主体とする。帰属時期は不明である。

SK1020（第 36 図）

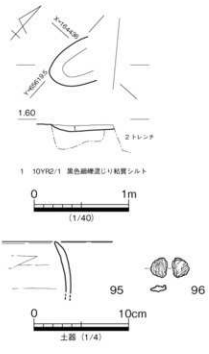
1 区中央南寄りで検出した。平面形状は長辺 1.3 m、短辺 0.9 m の隅丸方形を呈する。断面形状はやや不規則で、段を持つ箱状を呈し、最深部で 0.2 m を測る。埋土は黒褐色・暗褐色・にぶい黄褐色の細礫混じり粘質シルトからなる。

出土遺物は小片がほとんどであり、図化に耐え得るものは少ない。土師器甕（88・89）、製塩土器（90 ～ 93）を図化したほか、図示し得なかったが須恵器の小片を含む。古墳時代後期以降の所産と考える。

第 37 図　SK1021
平面図



第 38 図　SK1022 平・断面図、
出土遺物



第 39 図　SK1023 平・断面図、
出土遺物

SK1021（第 37 図）

1 区中央南寄りで検出した。試掘トレンチによって削平されているうえ細礫を主体とする地山上に掘削されており、記録を取るまでに崩落が進んだことから形状が変化し、詳細な規模は不明である。SK1019 を切ることから、これに後出する遺構であるが、本遺構からの出土遺物が無いことから、詳細は不明である。

SK1022（第 38 図）

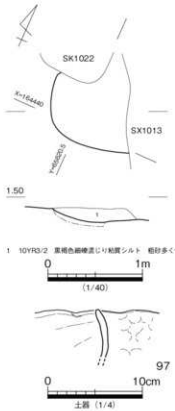
1 区南半中央付近で検出した。SX1013 に隣接しており、一辺 0.7 m の隅丸方形を呈し、残存深度 0.16m の断面が皿状を呈する遺構である。埋土は 2 層に分かれ、下層は炭化物を多量に含む。床面に被熱した痕跡は認められなかった。SP1143 に切られており、これに先行する遺構である。

出土遺物は製塩土器を主体とし、瓦器・須恵器を含む。いずれも小片のため、図化に耐え得るものがほとんどなく、製塩土器（94）を図示した。瓦器を伴うことから中世以降の遺構であると考える。

SK1023（第 39 図）

1 区南半中央西壁際で検出した。試掘トレンチにより削平されているうえ、細礫を主体とする地山上に掘削されていることから記録を取るまでに崩落が進み、形状が変化したため詳細な規模は不明である。長軸 0.6 m以上、短軸 0.45 m、残存深度 0.05 mが残存する。埋土は黒色細礫混じり粘質シルトの単層で、炭化物が灰が埋土の中に混じっていると考えられる。

出土遺物は製塩土器片を主体とし、95 を図示した。他に口縁部と体部内面は器表面が残存するが体



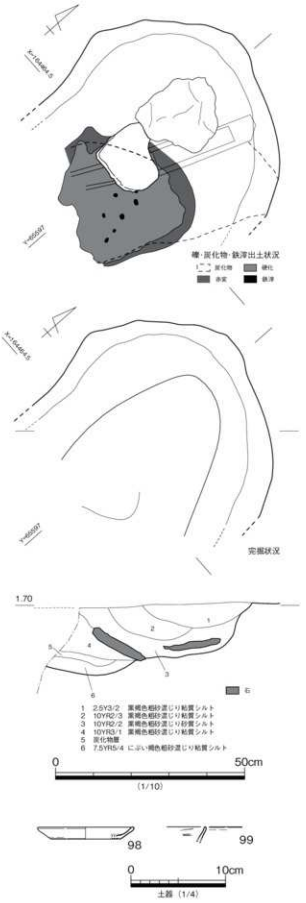
第 40 図　SK1025 平・断面図、出土遺物

部外面が著しく劣化しているものが認められ、煎熬に使用されたことがうかがえる。また、わずかではあるが、スサを交えた焼土塊小片（96）を確認しており、炉体があった可能性が想定できる。製塩土器は備讃Ⅵ式と考えられ、古填時代後期以降の所産と考える。

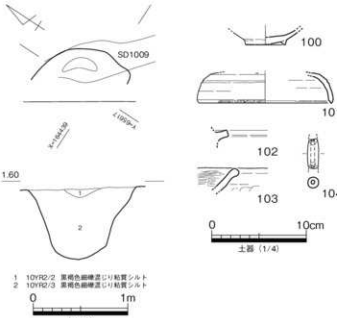
SK1025（第 40 図）

1 区南半中央付近で検出した。SX1013 と SK1022 に切られており、両者に先行する遺構であることがわかる。一辺 0.8 m以上の隅丸方形状を呈し、残存深度 0.15 mの皿状の断面を測る。埋土は黒褐色細礫混じり粘質シルトの単層である。

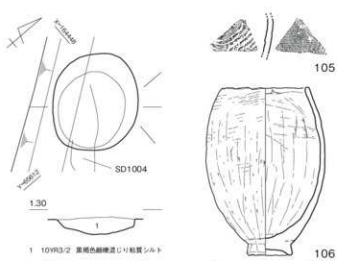
出土遺物は製塩土器のみである。97 を図示した。



第 41 図　SK1026 平・断面図、出土遺物



第 42 図　SK1027 平・断面図、出土遺物



第 43 図　SK1028 平・断面図、出土遺物

SK1026（第 41 図）

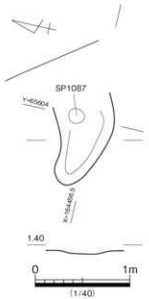
1 区北端部で検出した。南半を SX1010 により削平されているほか、上面を第 2 包含層が覆う。残存規模は南北 0.65 m以上、東西約 0.6 m、深さ約 0.2 mで正確な平面形状は不明である。浅い椀状の断面形を呈し、底部は固く焼き締まり赤変が認められる。埋土は 6 層に細分でき、黒褐色及びにぶい褐色の粗砂混じり粘質シルトからなる。うち、下から 2 層目は炭化物からなり、堆積範囲が概ね東側に偏る。断面図には部分的にかかるのみであるが、断面図作成ライン以東の 3・4 層の下位に炭化物層が広がる。なお、この層中からは多数の鉄滓が出土していることから、炭化物層はカーボンベッドとして機能していたと考えられる。炭化物層の上位に 2 枚の板状礫があるが、これは廃絶に伴い埋められる際に投棄されたものと考えられる。これらの状況から、SK1026 は小鍛冶を行った鍛冶炉跡であると考えられる。

出土遺物は瓦器・土師質土器の小片が少量出土している。瓦器小皿（98）、土師器小皿（99）を図示した。また、先述した通り、炭化物層を中心に鉄滓が多数出土している。瓦器類を伴うことから、中世以降のものと考える。

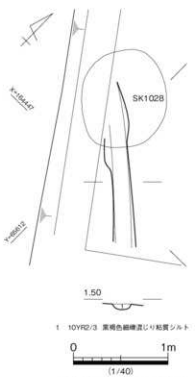
SK1027（第 42 図）

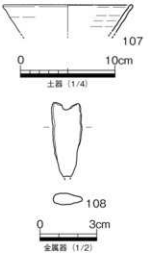
1 区南半中央西壁際で検出した。SD1009 に切られているほか、大半が調査区外へ延びることから詳細な規模は不明である。残存深度は 0.75 mを測り、埋土は黒褐色細礫混じり粘質シルトの単層である。

遺物は少量出土しており、瓦器・土師質土器等を含む。小片化が著しく、図化に耐え得るものがわずかであるが、土師質土器椀（100）、瓦器羽釜（102）、土師器甕（103）、須恵器蓋坏（101）の他、管状土錘（104）を図化した。土師質土器や瓦器を含むことから、中世のものと考えられるが、詳細な時期は不明である。



第 44 図　SD1001 平・断面図





第 45 図　SD1004 平・断面図、出土遺物

SK1028（第 43 図）

1 区西壁中央付近で検出した。長軸約 1 m、短軸 0.9 m、断面形状は浅い箱状で残存深度は 0.18 m を測る。埋土は黒褐色細礫混じり粘質シルトの単層である。

出土遺物はあまり認められないが、ほぼ完形に復元できる備讃Ⅱｃ式の範疇で考えられる製塩土器（106）が出土している。弥生時代後期の所産と考えられる。なお、105 は須恵器甕であるが、SD1004 の掘り残しである可能性が高い。他に時期を示すものはないが、遺物の出土状況から遺構は弥生時代後期の所産であると考えられる。

溝状遺構

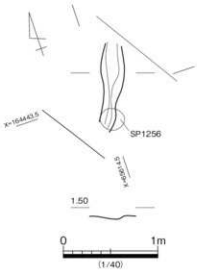
SD1001（第 44 図）

1 区東端中央付近で検出した。残存状況は不良で、検出長約 1 m、最大幅は 0.6m を測る。断面形状は浅い皿状で残存深度は 0.05 m である。東端は調査区外へ延びる。

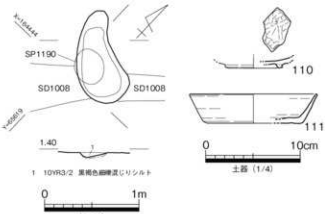
出土遺物は認められず、帰属時期不明である。

SD1004（第 45 図）

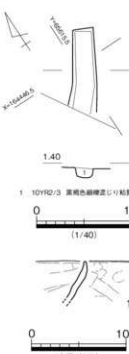
1 区西壁中央付近で検出した。検出長約 2 m で最大幅は 0.25m を測る。断面形状は浅い椀状で残存深度は 0.08 m である。主軸方位は N45° W を測る。埋土は黒褐色細礫混じり粘質シルトである。北端は調査区外へ、南端は試掘トレンチで途切れる。トレンチ南側へ延伸した先に同一方向の溝状遺構は確認できないことから、トレンチ内で断絶するか、北へ屈曲して SD1006 に、あるいは南へ屈曲して SD1005 に接続する可能性がある。



第 46 図　SD1005 平・断面図



第 48 図　SD1007 平・断面図、出土遺物



第 47 図　SD1006 平・断面図、出土遺物

出土遺物は少量で、備讃Ⅵ式の製塩土器片を中心に、土師質土器小皿・瓦器椀などを含む小片である。図化に耐えうるものがわずかで、須恵器坏（107）が図化できる程度である。形状が不明瞭であるが、鉄鏃と考えられるもの（108）を図化した。遺構は、瓦器椀などを伴い、その形状から中世前半期のものと考えられる。

SD1005（第 46 図）

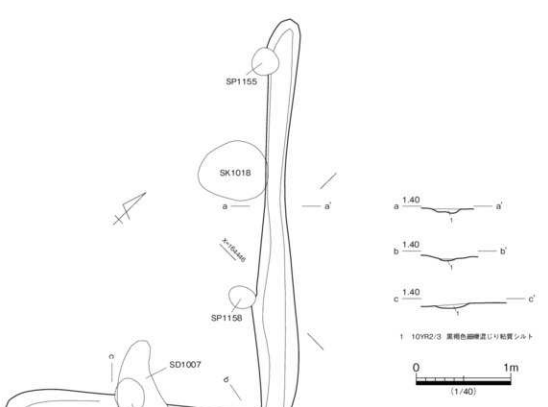
1 区西壁中央やや南寄りで検出した。検出長約 1 mで最大幅は 0.25m を測る。断面形状は浅い皿状で残存深度は 0.05 mである。主軸方位は N21.5° E を測る。北端は試掘トレンチで途切れ、南端は調査区外へ延びる。延伸した先にはややずれた位置に SD1006 が確認でき、これに接続する可能性があるほか、西へ屈曲して SD1004 に接続する、あるいはトレンチ内で断絶する可能性がある。

出土遺物は少量で、須恵器甕、土師質土器土鍋などの小片を主体とし、図化に耐えうるものが認められない。中世以降のものと考えられるが、詳細な時期は不明である。

SD1006（第 47 図）

1 区西壁中央やや南寄りで検出した。検出長約 1 mで最大幅は 0.3m を測る。断面形状は箱状で残存深度は 0.12 mである。主軸方位は N34° E を測る。埋土は黒褐色細礫混じり粘質シルトである。南北両端は試掘トレンチで途切れる。南へ延伸した先にはややずれた位置に SD1005 が確認でき、これに接続する可能性があるほか、南端が西へ屈曲して SD1004 に接続する可能性がある。

出土遺物は少量で、製塩土器の小片を中心とし、図化に耐えうるものがわずかである。製塩土器（109）を図化した。備讃Ⅵ式と考えられ、古墳時代後期以降に帰属する遺構である。



第 49 図　SD1008 平・断面図

SD1007（第 48 図）

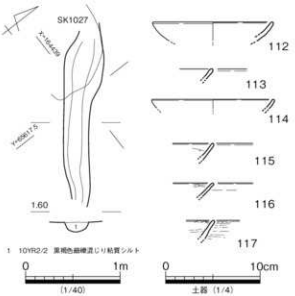
1 区南半中央付近で検出した。検出長約 1 mで最大幅は 0.48m を測る。断面形状は浅い皿状で残存深度は 0.05 mである。溝状遺構として調査したが、異なる性格を持つ可能性が残る。埋土は黒褐色細礫混じりシルトである。SP1190・SD1008 と重複関係にあり、SP1190 が後出し、SD1008 が先行する。

出土遺物は少量で、製塩土器片の他、須恵器坏（111）・土師質土器・瓦器椀（110）などが出土している。瓦器椀を伴うことから中世以降に帰属すると考えられる。

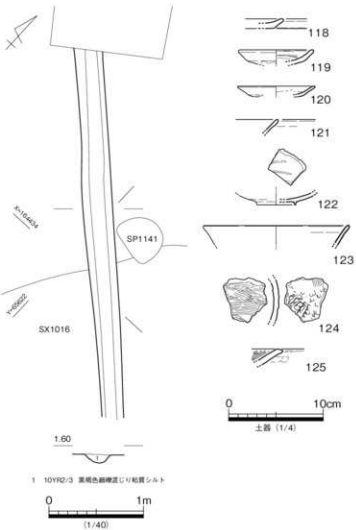
SD1008（第 49 図）

1 区中央やや南寄りで検出した。検出長は約 7 mで、北から 4 mのところで西へ屈曲する。最大幅は 0.55 mを測る。断面形状は浅い皿状で、残存深度は 0.05 mである。主軸方位は N45° W を測る。埋土は黒褐色細礫混じり粘質シルトである。北端は試掘トレンチ付近で途切れ、南端は調査区外へ延びる。あるいはトレンチ内で断絶する可能性がある。調査中に台風の影響により近接して存在した SK1018 を失ったが、内面に焼土を伴っていたことから、竪穴建物のカマドであった可能性があり、SD1008 はその建物に伴う壁溝として想定できる。

出土遺物は少量で、製塩土器のみが出土する。図示していないが、備讃Ⅵ～Ⅶ式のものであり、古墳時代後期から奈良時代にかけての遺構であると考える。



第 50 図　SD1009 平・断面図、出土遺物



第 51 図　SD1010 平・断面図、出土遺物

SD1009（第 50 図）

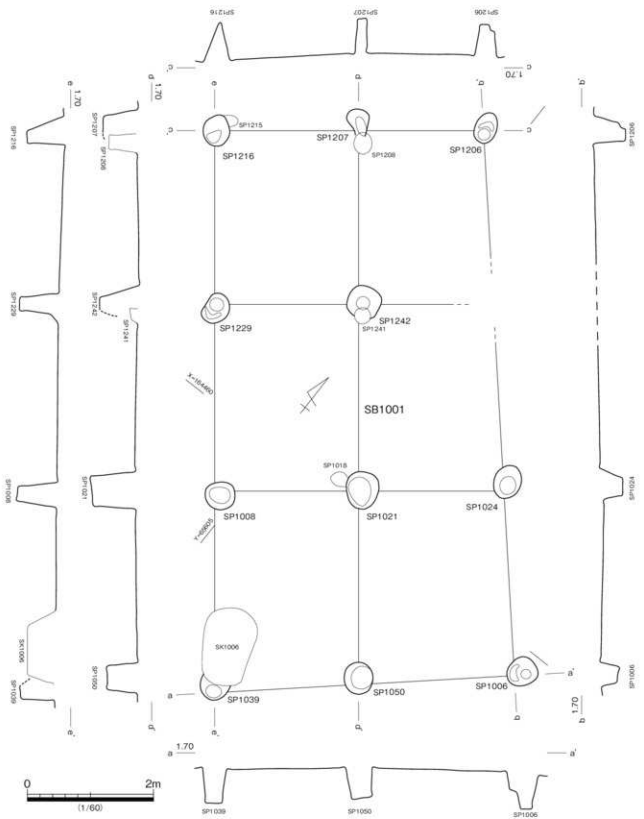
1 区西壁南半中央付近で検出した。検出長約 1.5 m で最大幅は 0.42m を測る。断面形状は浅い椀状で残存深度は 0.12 m である。主軸方位は N51° W を測る。埋土は黒褐色細礫混じり粘質シルトである。南端は試掘トレンチで途切れる。延伸した先にはややずれた位置に SD1010 が確認でき、これに接続する可能性がある。

出土遺物は少量で、図化に耐えうるものはわずかながら瓦器椀や吉備系土師質土器椀の小片を含む。土師質土器坏（112・113）、瓦器椀（114 ～ 117）などを図化した。これらから、概ね中世前半期の遺構であると判断した。

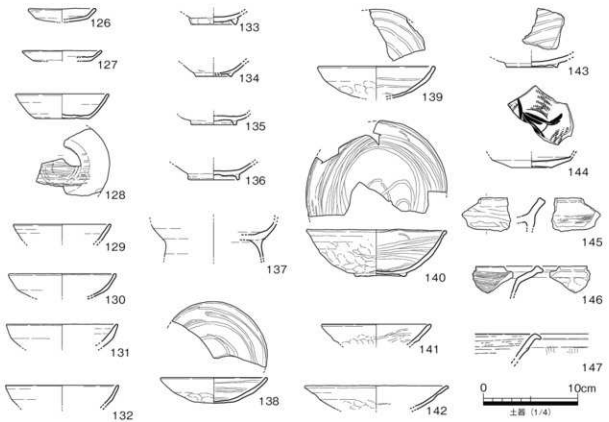
SD1010（第 51 図）

1 区南端付近で検出した。検出長約 4 m で最大幅は 0.32m を測る。断面形状は浅い椀状で残存深度は 0.1 m である。主軸方位は N45° W を測る。埋土は黒褐色細礫混じり粘質シルトである。南端は SX1016 を切った後に攪乱によって途切れる。北へ延伸した先にはややずれた位置に SD1009 が確認でき、これに接続する可能性がある。

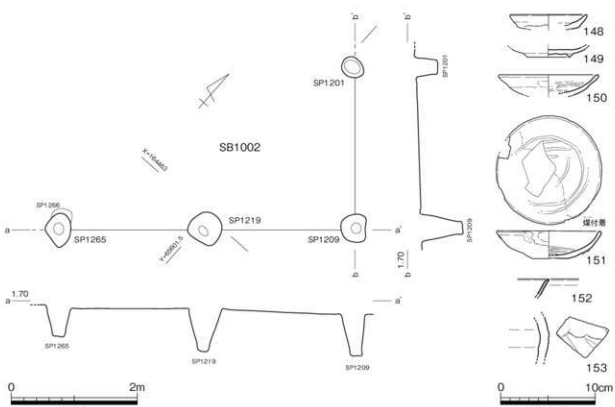
出土遺物は少量で、図化に耐えうるものはわずかながら瓦器椀や吉備系土師質土器椀の小片を含む。土師質土器小皿（118）、鍋（124）、甕（125）、瓦器小皿（119・120）、椀（121・122）、青磁椀（123）などを図化した。これらから、概ね中世前半期の遺構であると判断した。



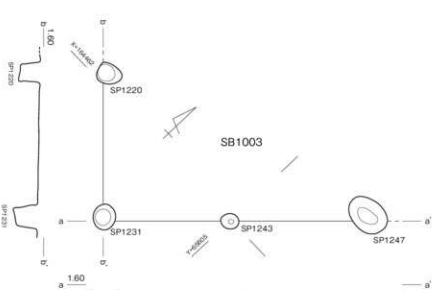
第 52 図　SB1001 平・断面図



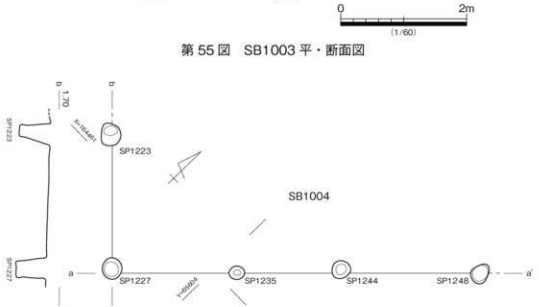
第 53 図　SB1001 出土遺物



第 54 図　SB1002 平・断面図、出土遺物



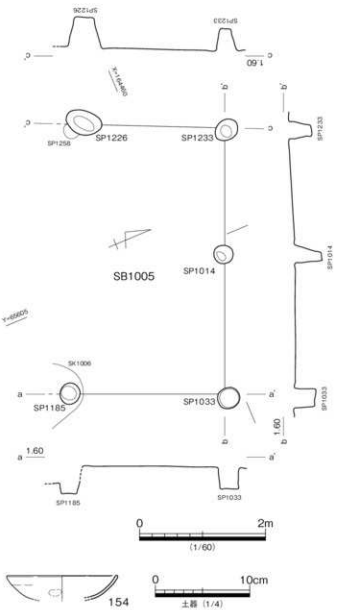
第 55 図　SB1003 平・断面図



第 56 図　SB1004 平・断面図

柱穴

柱穴の大半は中世前半期を中心とする。これらのうち、柱穴の組み合わせから 13 棟の建物を想定復元しているが、建物全体の構造把握が可能なものは認められない。柱穴自体の残存状況は良好で深さ 0.7 mほどのものが多数確認できた。全体的に見ると、規模は直径 0.1 m～ 0.7 m、深さ 0.05 ～ 0.7 mと様々である。埋土は検出面で概ね 8 グループに分かれ、A　34 基、B　66 基、C　73 基、C+F　1 基、D　14 基、E　14 基、F　9 基、F+C　2 基、黒　3 基、焼土 1 基の内訳となり、44 基について埋土の記録が取れ



第57図　SB1005平・断面図、出土遺物

ていない。大半の柱穴は地山層に達することから、埋土中に細礫を多く含む。以下、復元した建物とそれ以外の柱穴の順で記載する。

掘立柱建物

SB1001（第52・53図）

1区北半中央付近で検出した。桁行3間（8.9 m）×梁行2間（4.3 ～ 4.9 m）、床面積40.9㎡の総柱建物に復元した。主軸方位はN51.7° Eを測る。南側2列は梁間方向に2.3 mの間隔で一致するが、北側は梁間が西で狭く、東で広くなる。桁行の柱間は2.3 ～ 2.6 mとばらつくが、各梁間方向の柱筋は通る。また、北列の西から2番目の柱穴が確認できなかった。柱穴は平面形楕円あるいはいびつな円形を呈し、0.3 ～ 0.6 mの規模である。また、残存深度は0.3 ～ 0.6mを測るが、底部のレベルが概ね標高1.0 ～ 1.1 mで揃う。土層断面の記録を取っていないが、柱痕が概ね0.2 m程あり、比較的しっかりとした柱材を使っていたことがうかがえる。

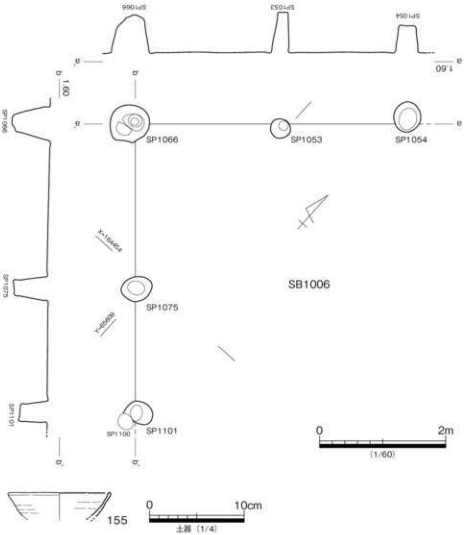
遺物は抜き取り痕埋土から出土している例が多い。各柱穴から比較的多量の遺物が出土している。土師質土器・瓦器・瓦質土器・青磁などが出土しており、土師質土器小皿（126・127）、坏（128）、椀（129 ～ 137）、鍋（146・147）、瓦器椀（138 ～ 143）、青磁皿（144）、瓦質土器羽釜（145）を図化した。瓦器椀を見ると高台を持つもの（140・143）と、高台が退化したもの（138・139）が認められることから、2時期に分かれる可能性があるが、吉備系土師質土器椀から見ると概ねⅢ－2期（13世紀後半、山本　1993）頃のものと考えられる。

なお、SP1021から鉄製釣針（175）、SP1207から鉄釘（217）がそれぞれ出土している。

SB1002（第54図）

1区北半北西寄りで検出した。南北1間（2.5 m）、東西2間（4.7 m）の柱穴群としてとらえ、建物の規模は復元できない。第1面遺構の密度が高い範囲であり、柱穴が失われたと考えられる。

柱穴群の主軸方位はN41.5° Wを測る。柱間は2.3 ～ 2.5 mとばらつきがある。残存深度は0.35 ～ 0.7 mとばらつきがあるが、南3基は0.5 ～ 0.7 mあり、ある程度深さが揃う。



第 58 図　SB1006 平・断面図、出土遺物

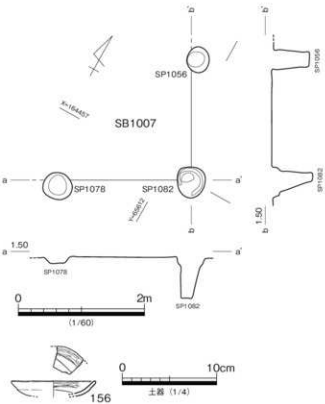
遺物は、土師質土器小皿（148）・椀（149）・瓦器椀（150・151）・白磁（152）・焼き締め陶器（153）などが各柱穴から出土している。小片化しているものが多いが、151 はほぼ完形に復元できる瓦器椀である。外面が受熱破砕しているほか、内外面に煤の付着を認める。瓦器椀の口径が小さく、高台を持たない可能性が高いことから概ねⅣ期のものと考えられ、13 世紀後半～ 14 世紀前半のものと考えられる。

なお、SP1201 からは管状土錘（215）が出土している。

SB1003（第 55 図）

1 区北半中央北寄りで検出した。南北 1 間（2.3 m）、東西 2 間（4.3 m）の柱穴群としてとらえ、建物の規模は復元できない。柱穴群の主軸方位は N43° E を測る。柱間は 2.0 ～ 2.3 m とばらつきがある。残存深度は 0.2 ～ 0.35 m を測る。

遺物は各柱穴から出土しているが、小片が大半で図化に耐え得るものが無い。



第 59 図　SB1007 平・断面図、出土遺物

SB1004（第 56 図）

1 区北半中央西寄りで検出した。南北 1 間（2.25 m）、東西 3 間（5.85 m）の柱穴群としてとらえ、建物の規模は復元できない。柱穴群の主軸方位は N44 ° E を測る。柱間は 1.65 ～ 2.25 m とばらつきがある。残存深度は 0.15 ～ 0.5 m を測り、ばらつきがある。南北の柱列が 0.5 m を測るのに対し、東西列は 0.2 m 程度を測り、柱列単位で深さが揃う。

遺物は各柱穴から出土しているが、小片が大半で図化に耐え得るものが無い。

SB1005（第 57 図）

1 区北半中央西寄りで検出した。南北 1 間（2.5 m）、東西 2 間（4.2 m）の柱穴群としてとらえた。南側は調査区外へ延びると考えられ、建物の規模は復元できない。柱穴群の主軸方位は N22.5° E を測る。柱間は 2.0 ～ 2.5 m とばらつきがある。残存深度は 0.15 ～ 0.5 m を測りばらつきがあるものの、底部の標高が 1.0 ～ 1.1 m に概ね揃う。

遺物は各柱穴から出土しているが、小片が大半で図化に耐え得るものが無い。土師質土器椀（154）を図示した。

SB1006（第 58 図）

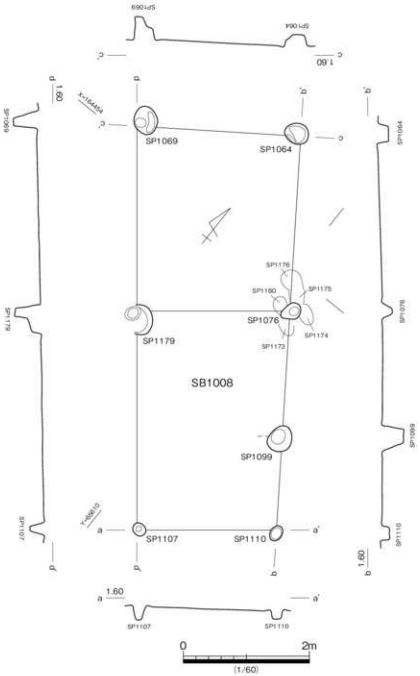
1 区中央で検出した。南北 2 間（4.6 m）、東西 2 間（4.3 m）の柱穴群としてとらえ、建物の規模は復元できない。柱穴群の主軸方位は N42° W を測る。柱間は 2.0 ～ 2.6 m とばらつきがある。残存深度は 0.4 ～ 0.6 m を測る。

遺物は各柱穴から出土しているが、小片が大半で図化に耐え得るものが無い。土師質土器椀（155）を図化した。

SB1007（第 59 図）

1 区中央で検出した。南北 1 間（1.9 m）、東西 1 間（2.1 m）の柱穴群としてとらえ、建物の規模は復元できない。建物の南東隅部と考える。柱穴群の主軸方位は N27° W を測る。残存深度は 0.1 ～ 0.65 m を測る。南北ラインは深く、SP1078 のみが浅い。

遺物は各柱穴から出土しているが、小片が大半で図化に耐え得るものが無い。隅柱となる SP1082 出土の瓦器小皿（156）を図化した。



第 60 図　SB1008 平・断面図

SB1008（第 60 図）

1 区中央で検出した。南北 3 間（6.4 m）、東西 1 間（2.5 m）の柱穴群としてとらえ、建物の規模は復元できない。柱穴群の主軸方位は N35° W を測る。柱間は 1.5 ～ 3.0 m とばらつきがある。残存深度は 0.15 ～ 0.4 m を測る。

遺物は各柱穴から出土しているが、小片が大半で図化に耐え得るものが無い。

SB1009（第 61 図）

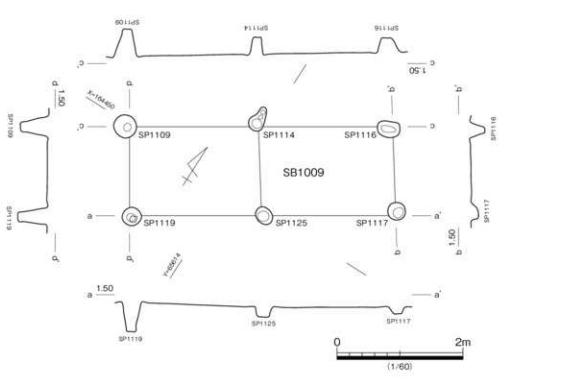
1 区中央で検出した。南北 1 間（1.4 m）、東西 2 間（4.2 m）、床面積 5.88㎡の建物に復元した。柱穴群の主軸方位は N58° E を測る。柱間は桁行 2.1 m、梁行 1.4 m を測る。残存深度は 0.1 ～ 0.5 m を測る。柱間が比較的きれいに揃うが、同じ間隔で周辺に柱穴が広がる様子は窺えない。

遺物は各柱穴から出土しているが、小片が大半で図化に耐え得るものがわずかである。土師質土器小皿（157）、足釜（159）、瓦器椀（158）を図化した。瓦器椀の形状から 12 世紀後半頃のものと考えられ、遺構の時期も概ねその頃のものと考えられる。

SB1010（第 62・63 図）

1 区南半北西寄りで検出した。南北 3 間（7.7 m）、東西 2 間（4.1 m）に 1 間の北面庇（1.1 m）が付く建物として復元した。柱穴群の主軸方位は N39° W を測る。梁行は 2.1 ～ 2.2 m、桁行は 2.0 ～ 3.1 m とばらつきがある。残存深度は 0.25 ～ 0.6 m を測る。

遺物は各柱穴から出土しているが、小片が大半で図化に耐え得るものが少ない。土師質土器小皿（160）、瓦器椀（161・162）、須恵器坏（163）、捏鉢（164）、甕（167・168）、陶器壷（165）、土師器高坏（166）、



第 61 図　SB1009 平・断面図、出土遺物

鉄釘（206）を図化した。須恵器坏・甕・土師器高坏については周辺の包含層内からの混入と考えられる。なお、須恵器甕は同一個体と考えられるものが２基の柱穴に分かれて出土している。体部を成形した後頸部を接合して作っており、接合面には体部に施したタタキ目が残存する。建物の帰属時期は瓦器椀を伴うことから中世以降のものであると考えられる。

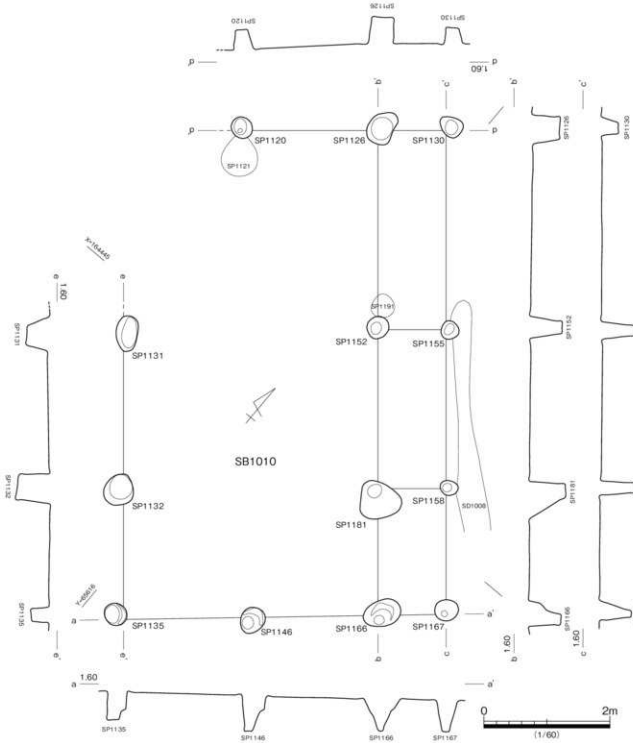
SB1011（第 64 図）

１区南半中央で検出した。南北１間（２m）、東西２間（4.1 m）の柱穴群としてとらえることができるが、建物の規模は復元できない。柱穴群の主軸方位は N43° E を測る。柱間は 2.0 ～ 2.1 m を測る。残存深度は 0.25 ～ 0.4 m を測る。

遺物は各柱穴から出土しているが、小片が大半で図化に耐え得るものが無い。管状土錘（169）を図化したほか、鉄釘（170）を図化した。

SB1012（第 65 図）

１区北半中央で検出した。南北２間（4.4 m）、東西２間（4.1 m）の柱穴群としてとらえることができるが、建物の規模は復元できない。柱穴群の主軸方位は N35° W を測る。柱間は 1.9 ～ 2.25 m とばらつきがある。残存深度は 0.15 ～ 0.4 m を測る。

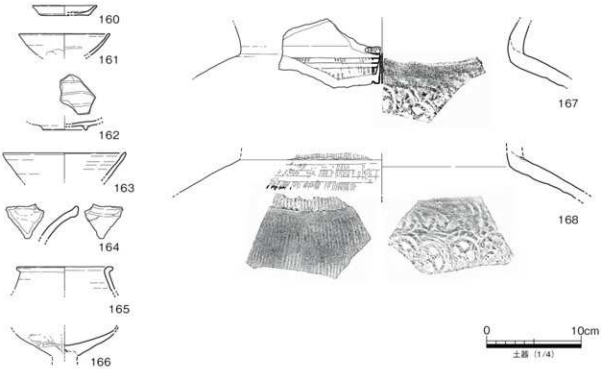


第 62 図　SB1010 平・断面図

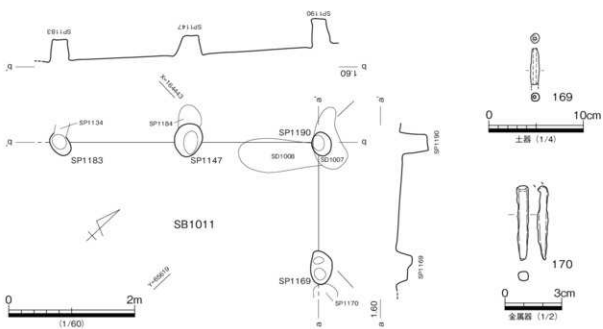
遺物は各柱穴から出土しているが、小片が大半で図化に耐え得るものが無い。

SB1013（第 66 図）

1 区北半中央で検出した。南北 1 間（2 m）、東西 2 間（3.85 m）の柱穴群としてとらえ、建物の規模は復元できない。柱穴群の主軸方位は N44° E を測る。柱間は 1.8 ～ 2.0 m とばらつきがある。残存



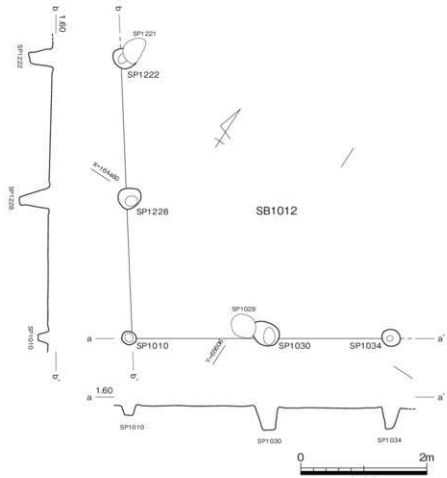
第 63 図　SB1010 出土遺物



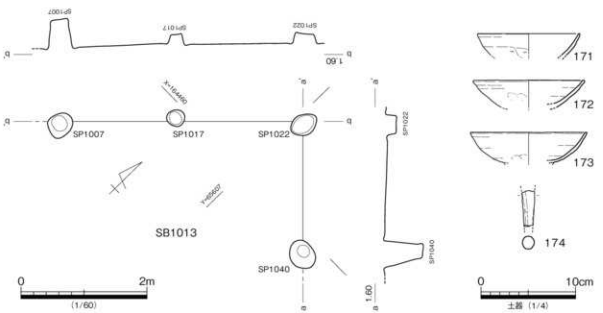
第 64 図　SB1011 平・断面図、出土遺物

深度は 0.15 ～ 0.6 m を測る。

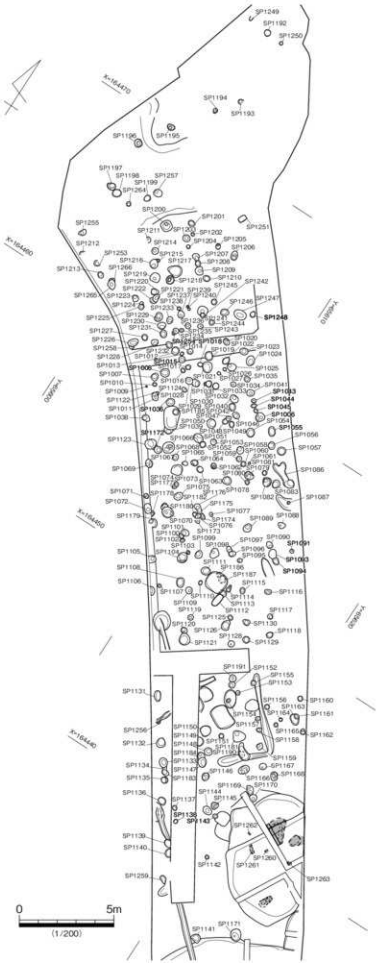
遺物は各柱穴から出土しているが、小片が大半で図化に耐え得るものが無い。土師質土器椀（171 ～ 173）・足釜（174）を図化した。足釜の脚部断面が円形になっており、13 世紀後半以降のものである可能性が高い。



第 65 図　SB1012 平・断面図



第 66 図　SB1013 平・断面図、出土遺物

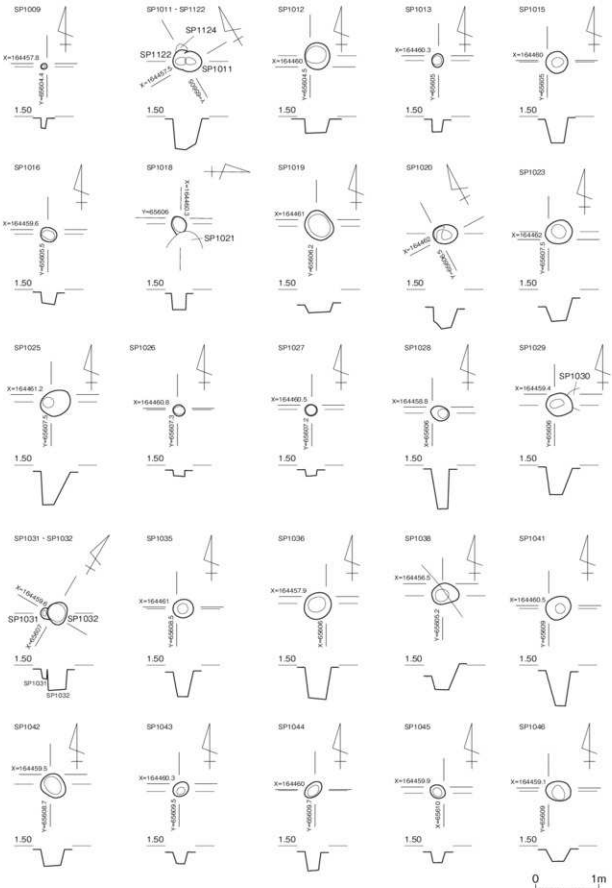


第 67 図　1 区 2 面 SP 平面図

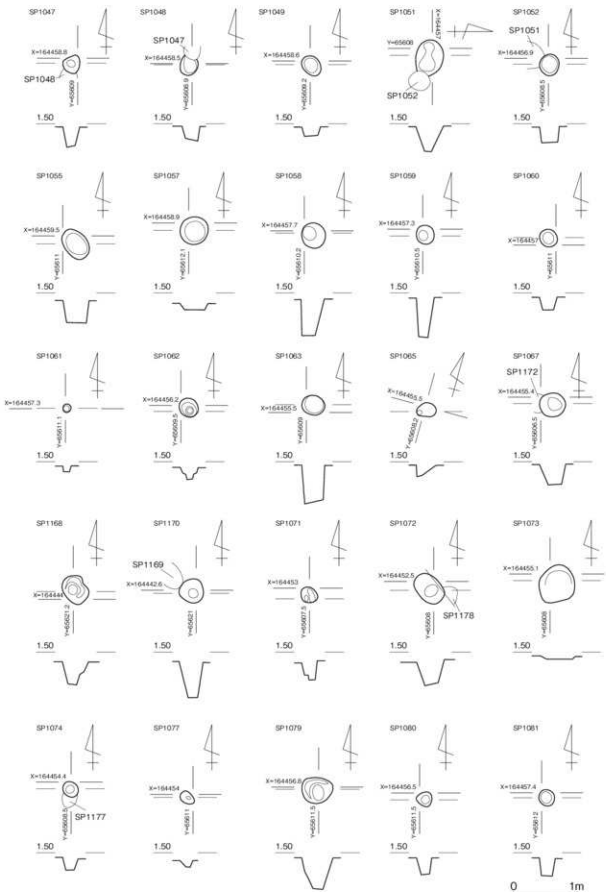
柱穴（第 67 ～ 76 図）

建物に復元できなかったものを 175 基図化した。遺構図・遺物図共に、遺構番号の若い順に掲載している。ここで扱うものにも復元した建物の柱筋に乗るものの、柱間が詰まるものなどがあり、本来は建物を構成していたと考えられるものを多数含む。

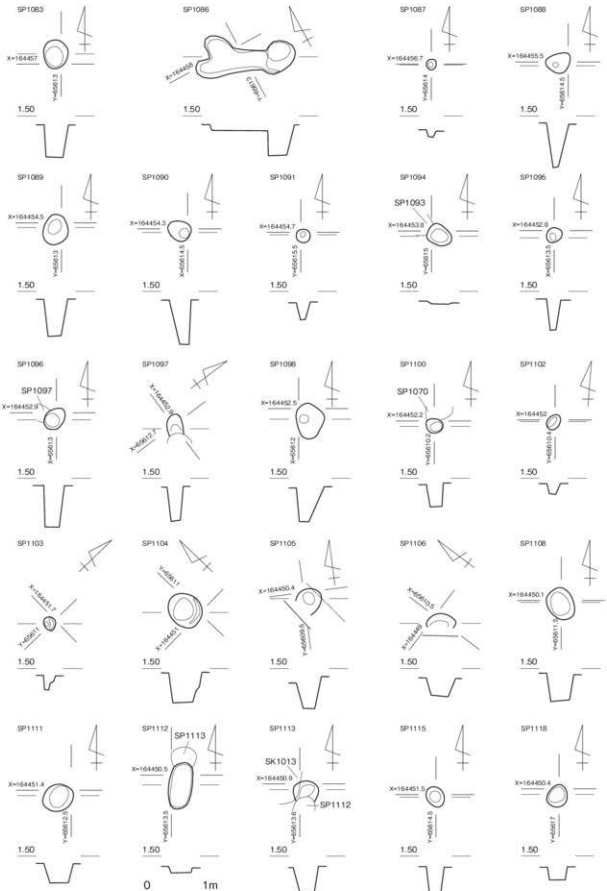
出土遺物は遺構の性格上少量で、小袋に収まる程度のものが多い。基本的に小片化した土器が主体であるが、あまり転磨を受けていないものが多い。これは、掘り方と柱痕を明確に分けて掘削し得なかったため詳細な出土状況については明らかではないが、大きく移動していないことを示していると考えられる。なお、瓦器・土師質土器など、搬入品と考えられるものが主体を占める。土師質土器小皿（180・196・224・228）、椀（181・184・190・195・199・209・211・232）、坏（186・189・213）、足釜（178）、鍋（205・216・219）、瓦器小皿（179・185・197）、瓦器椀（177・192・207・212・220・229）、須恵器蓋坏（200・222）、捏鉢（182）、甕（194・208・214）、青磁椀（193・218・226）、施釉陶器壺（227）の他、製塩土器（201・204・223）、管状土錘（183・188・191・198・202・225）、棒状土錘（230）や各種鉄製品（176・210）、須恵器転用円盤（221）などを図化した。また、炉壁と考えられる焼土塊（203）や、垂飾と考えられる骨角器（231）が確認できた。さらに、SP1040 からは、図示していないが鞴の羽口片



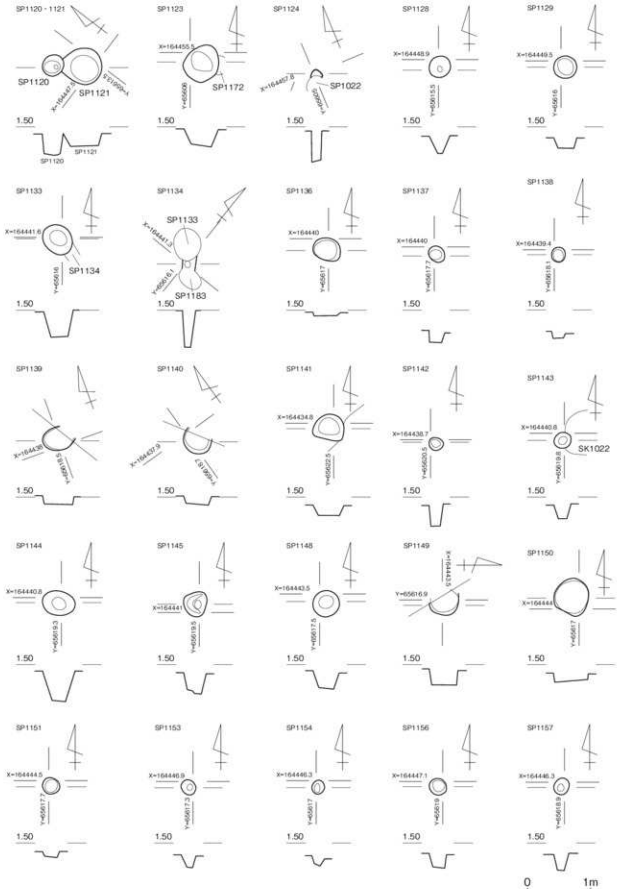
第 68 図　1 区 2 面 SP（1）平・断面図



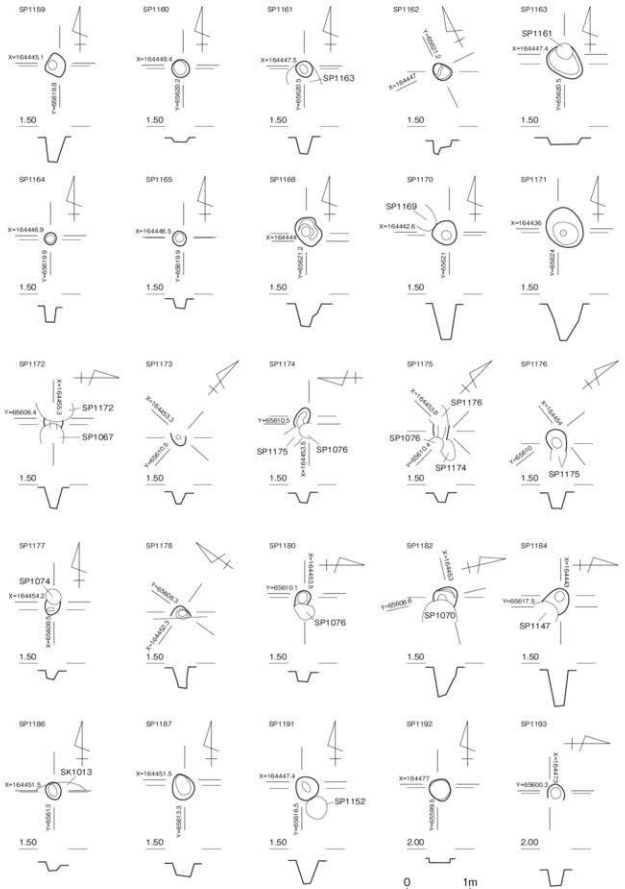
第69図　1区2面SP（2）平・断面図



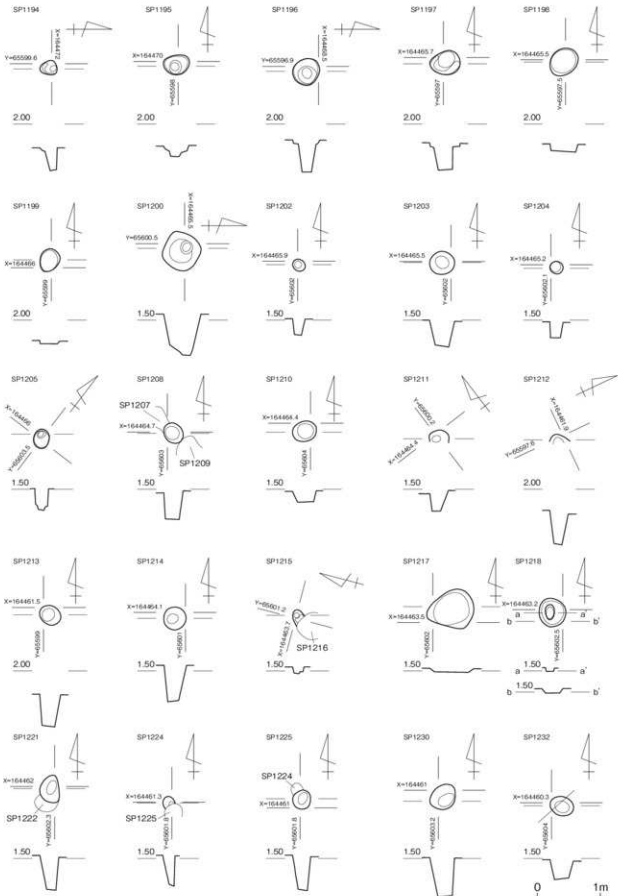
第 70 図　1 区 2 面 SP（3）平・断面図



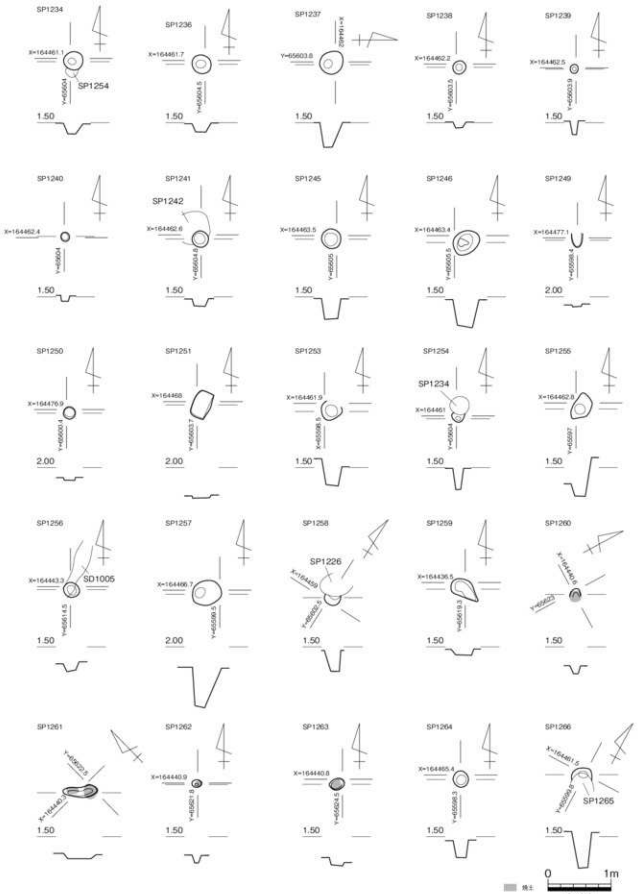
第 71 図　1区2面 SP（4）平・断面図



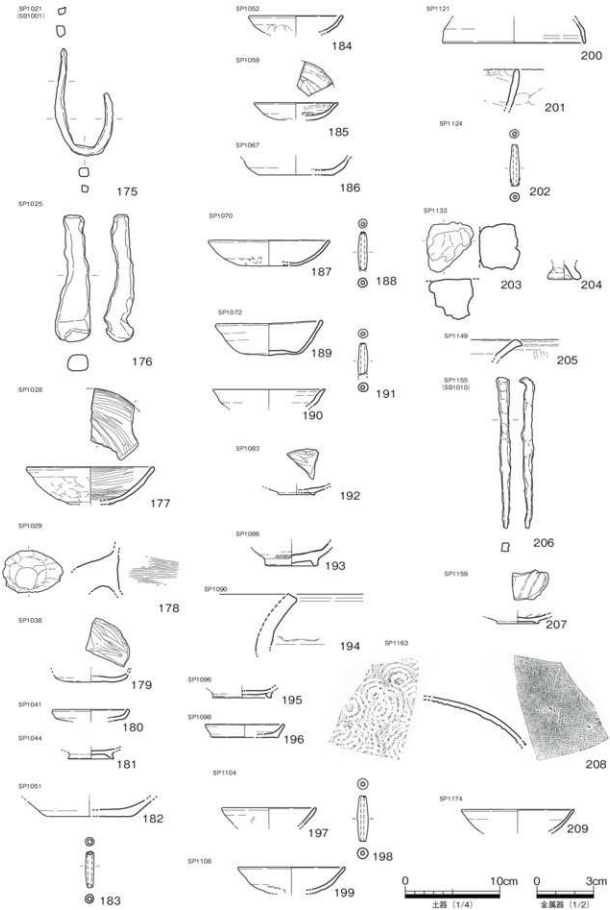
第72図　1区2面SP（5）平・断面図



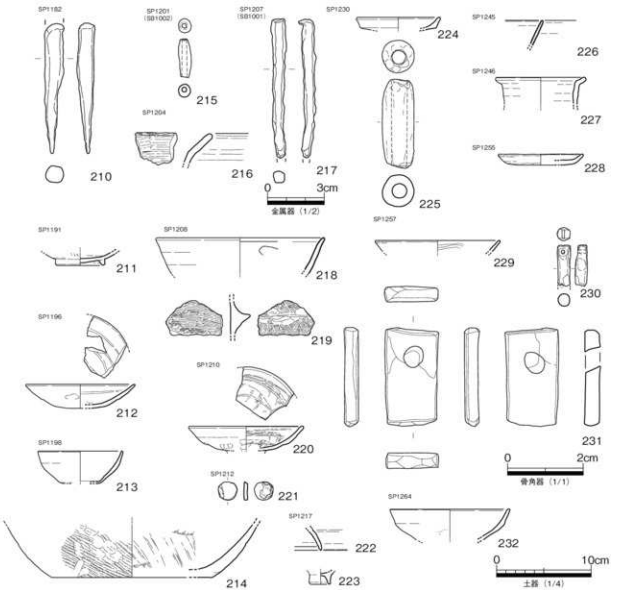
第 73 図　1 区 2 面 SP（6）平・断面図



第 74 図　1 区 2 面 SP（7）平・断面図

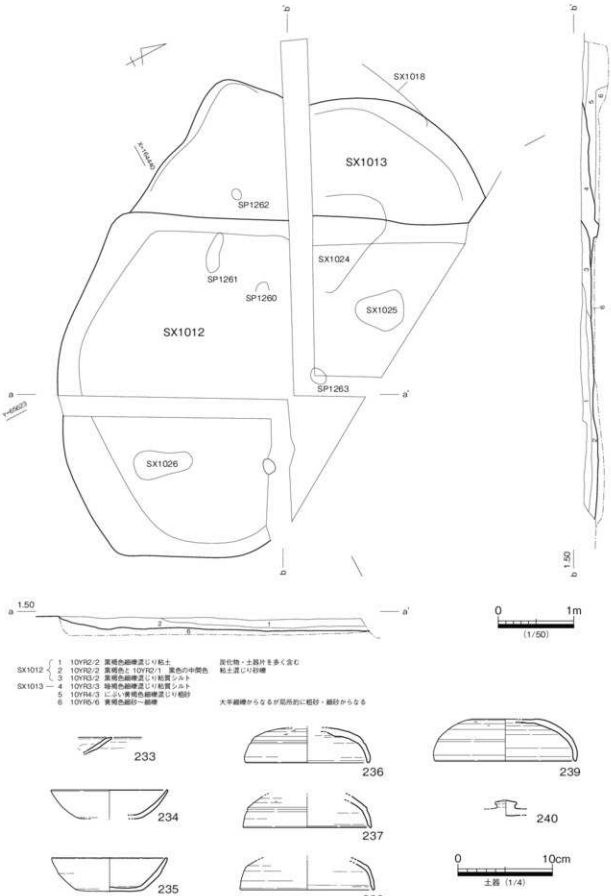


第75図　1区2面 SP 出土遺物（1）

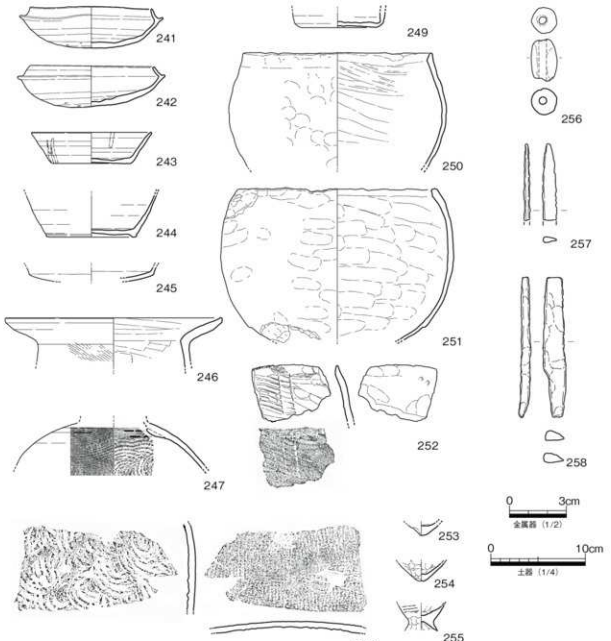


第 76 図　1 区 2 面 SP 出土遺物（2）

が出土している。瓦器椀は SB1001 同様、高台が残存し深めのものと、高台が取り付かず浅いものとが認められ、その形状から 12 世紀後半頃の遺構と 13 世紀以降の遺構が存在すると考えられる。土師質土器椀については 12 世紀代にさかのぼるものはなく、13 ～ 14 世紀初頭頃のものが主体となると考えられる。土師質土器坏も椀と概ね同様の時期観で把えられる。鉄製品は著しく錆が進んでおり、保存処理のためにある程度錆は除去したものの本来の形状を逸している。釣針は概ね完形を保つが、チモトの部分がやや不明瞭で先端も潰れているように見受けられるほか、カエシの存在が確認できない。釘は完形に近いと考えられるが、176 は用途などについては不明である。SK1026 が鍛冶炉であり、周辺遺構から鉄滓が出土しているため、遺構出土の鉄製品は再加工のため集積されたものであると考えられる。203 は SK1026 とは異なる鍛冶遺構に伴うものの可能性がある。231 の骨角器は 6 面全てに加工に伴う面取が観察される。出土遺物の傾向から、概ね 13・14 世紀に帰属するものが多く、12 世紀後半頃のものが含まれるほか、古墳時代のものが少量存在すると考えられる。



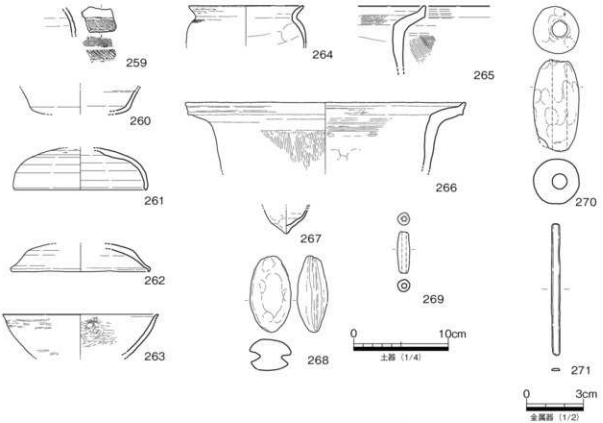
第 77 図　SX1012・1013 平・断面図、出土遺物



第 78 図　SX1012 出土遺物

性格不明遺構

SX1012・1013 は浅い皿状の断面を持ち、堆積状況から２基に分けて調査を行ったが、本来１基の遺構であった可能性がある。SX1013 の底部中央付近には焼土面が認められたが、その機能については不明である。古墳時代後期後半期の遺物を多く含むが、埋土の最上層で８～ 10 世紀代の遺物を含むことから、概ね古代に廃絶した遺構であると考える。SX1016 も概ね同様の遺構であると考えるが、中心に現代の施設が構築されて攪乱されており、詳細な規模については不明である。

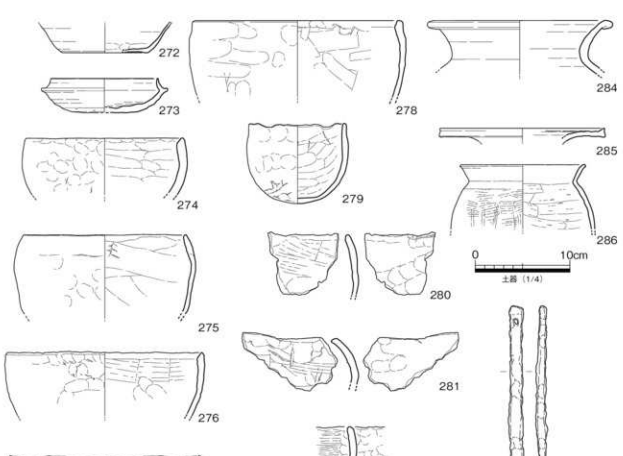


第79図　SX1012（包含層3）出土遺物

SX1012・1013（第77～80図）

1区南半中央付近で検出した。両者は重複しており、SX1012が新しく、SX1013が古い。SX1012は平面形が長軸4.5m以上、短軸4.5mの隅丸方形状を呈し、残存深度は0.15mを測る。SX1013は最大幅3.8m、最大奥行1.8mの隅丸方形状を呈し、残存深度は約0.24mを測る。調査開始時にはSX1012・1013ともに構成する辺が直線状を呈することから、重複する2棟の竪穴建物の可能性を考慮したが、壁溝や主柱穴に相当する付随施設を確認することが出来ず、共に浅い皿状の断面を呈することから性格不明遺構とした。堆積状況や最終的な平面形状から、両者は本来同一遺構である可能性も想定できるが、重複部分に認められるSX1012北辺が直線をなすことと、重複部でSX1013の底部がやや窪んでいることなどから別遺構として報告する。SX1025・1026、SP1260・1261・1263をSX1012下位で、SX1024・SP1262をSX1013下位でそれぞれ検出しており、先行するかSX1012・SX1013に関連する遺構であったと考えられる。

遺物は比較的多量出土している。備讃Ⅵ式・Ⅶ式の製塩土器片を主体として含むほか、古墳時代後期の須恵器蓋坏などが確認出来る。須恵器坏蓋（236～239）、蓋摘み（240）、坏身（241・242）、坏（243・244）、甕（247・248）、壷（249）、土師器高坏（245）、甕（246）、土師質土器皿（233）、坏（234・235）、製塩土器（250～255）、管状土錘（256）のほか、鉄製刀子（257・258）を図化した。また、259～271は遺構検出時に原位置を遊離したもので、遺構上位の包含層3に含まれる遺物と認識して取り上げたが、SX1012との接合関係が認められる例が多いことから、本来SX1012に含まれていたものであると判断した。272～287はSX1013出土の遺物で、土師器坏（272）、須恵器坏身（273）、壷（284）、

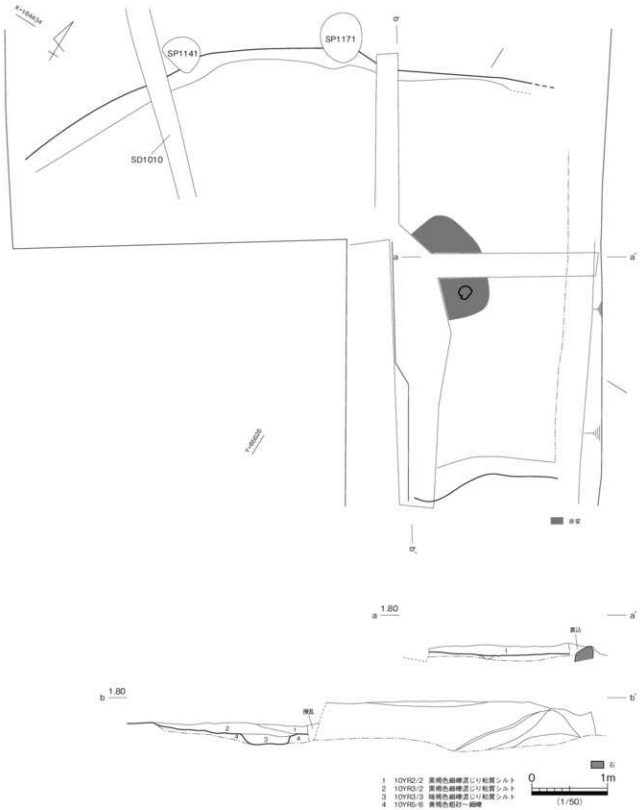


第 80 図　SX1013 出土遺物

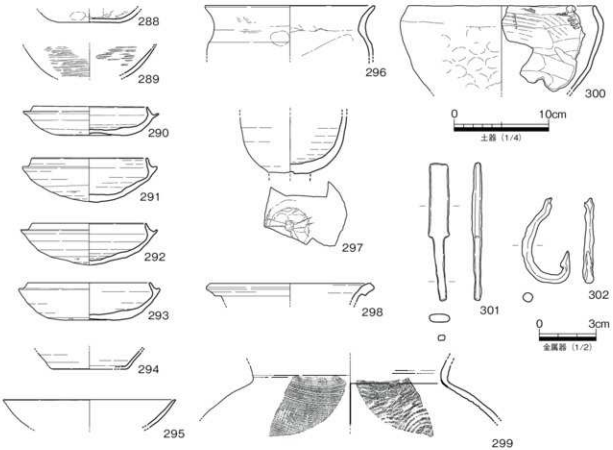
弥生土器壷（285）、甕（286）、製塩土器（274 ～ 283）の他、用途不明の有孔鉄片（287）を図化した。両遺構共に主たる遺物は古墳時代後期のもので、須恵器の形状から 6 世紀前半～中頃のものと考えられる。製塩土器は厚手でボウル型を呈するものを主体とし、備讃Ⅶ式と考えられる薄手尖底のものが混じる。古代末から中世にかけての遺物が認められるため、やや新しい時期のものはその埋没過程でくぼみに溜まったものと考えられ、上層の帰属時期がその頃と考えられるが、下位にある SX1013 から 272 が出土しており、少なくとも古代の遺構である可能性が高い。なお、南側に隣接する SX1016 との間に接合関係を認めることから、両者の埋没時期が同一である可能性が高い。

SX1016（第 81・82 図）

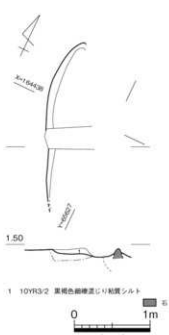
1 区南端で検出した。東西 7.1 m、南北 6 m の範囲で層厚が 0.25 m 残存する形状不明の遺構である。南西部が施設の造成により著しく攪乱を受けるほか、東側を切り土に伴い施工された護岸により削平される。西側は調査区外へ延びる。竪穴建物の可能性を考慮していたが、壁溝・主柱穴などの付随施設が確認できないことから、性格不明遺構として報告する。埋土は黒褐色～暗褐色の細礫混じり粘質シルト



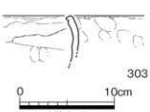
第 81 図　SX1016 平・断面図



第 82 図　SX1016 出土遺物



第 83 図　SX1017 平・断面図



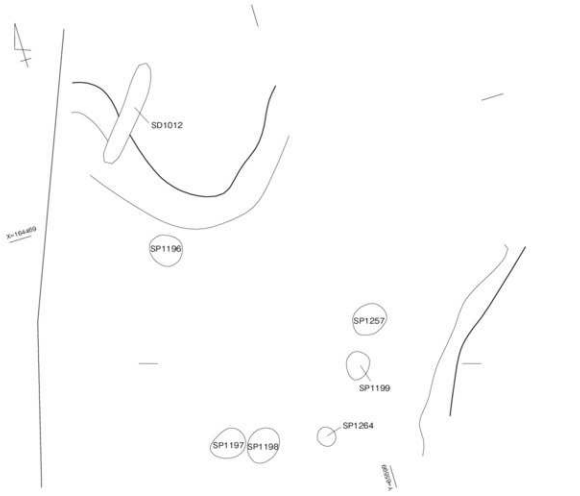
第 84 図　SX1018 出土遺物

からなる 3 層に分かれる。検出した部分の中央付近の底部が赤変しており、受熱した可能性が考えられる。周辺埋土中には炭化物などは認められなかった。

遺物は複数時期のものが混在しており、製塩土器（300）を主体として土師器甕（296）・須恵器蓋坏（290 ～ 293）・脚付壺（297）・甕（298・299）など古墳時代後期のものが多く認められるが、畿内系土師器坏（288･289）･須恵器坏（294）･黒色土器坏（295）など古代のものと考えられるものを交える。このことから、最終埋没時期は古代であると考えられ、黒色土器の年代から、これを概ね 9 世紀後半代頃と考える。なお、鉄製刀子（301）、釣針（302）が出土しており、図化した。

SX1017（第 83 図）

1 区南東隅で検出した。SX1012 と SX1016 の間に挟まれており、SX1016 に切られることから、これに先行する遺構であるとわかる。東



第 85 図　SX1022 平・断面図

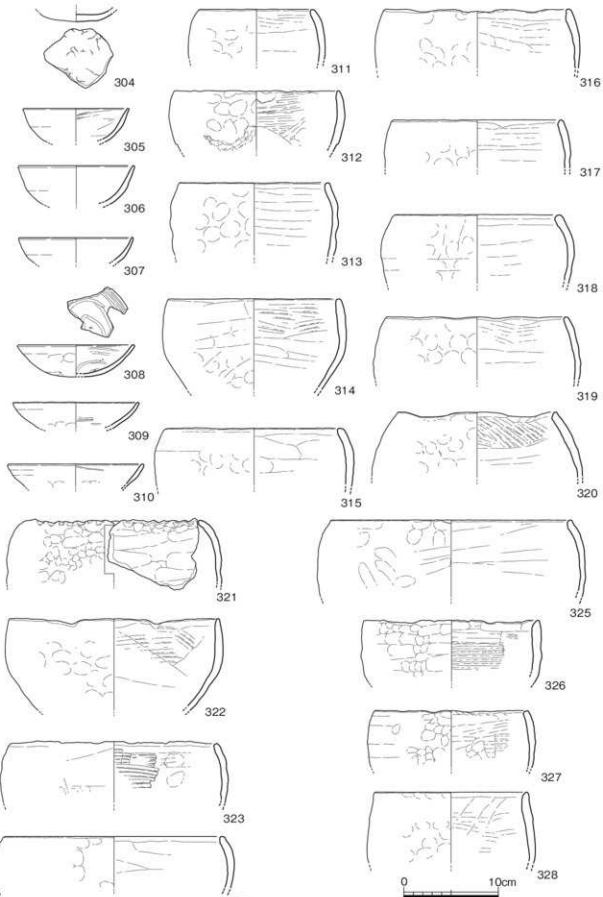
側が切り土により削平されており、全体の形状は不明である。

SX1018（第 84 図）

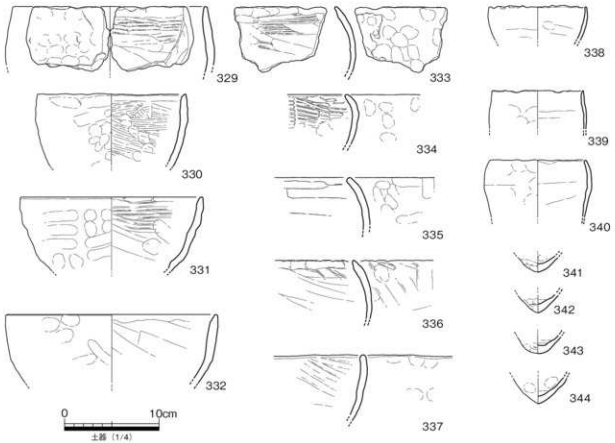
1 区南東部で検出した。SX1013 の下位で検出したが、浅いくぼみ状の遺構で詳細な規模は不明である。製塩土器が少量出土しており、303 を図化した。

SX1022（第 85 ～ 87 図）

1 区北端部で検出した。第 1 面の SX 群の分布域と重なるため著しく削平を受けることと、西側が調査区外へ延びる可能性があることから、全体の形状は不明である。北側の一部で地山が大きく張り出し



第 86 図　SX1022 出土遺物（1）



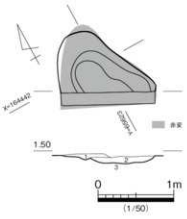
第 87 図　SX1022 出土遺物（2）

ているところがあることから、平面形状は不整形であった可能性が高い。残存規模は東西約 7 m以上、南北約 6 m以上を呈し、残存深度は最深部で 0.3 mを測る。断面形状は残存している部分で見る限り、浅い皿状を呈する。埋土は大きく上下 2 層に分層可能であったが、出土遺物は両者にまたがって分布しており、有意な分層ではないと考えられる。

出土遺物は 304 ～ 344 を図化した。製塩土器（311 ～ 344）がほとんどで、少量の須恵器、土師器坏（304）、土師質土器椀（305 ～ 307）、瓦器椀（308 ～ 310）を交える。土師質土器椀・瓦器椀は上面遺構の掘り残し等、後世の遺物が混入していると考えられるが、須恵器は製塩土器と同時期のものと考えられる。製塩土器は備讃Ⅵ式（311 ～ 337）と備讃Ⅶ式（338 ～ 344）が認められ、前者が主体を占めると考えられる。なお、304 は土師器坏としたが、厚手で胎土が製塩土器に類似すること、型押しにより生じたと考えられる小さなひび割れを底部外面に留めることなどから、製塩土器の底部である可能性も想定できる。以上から、遺構は 6 世紀代に形成されたと考える。

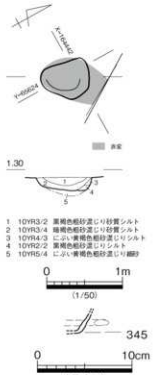
SX1024（第 88 図）

1 区南東部で検出した。SX1012・1013 の重複部と重複する。検出面は SX1013 底面で、SX1013 に先行するか、この一部をなすものと考えられる。長軸約 1.4 m、短軸約 0.9 mの不整形な平面形で、残存深度約 0.1 mの浅い皿状の断面を呈する。埋土は、上層が炭化物に由来する黒色細礫混じり細砂質シルトで、下層が褐色細礫混じり粘質シルトである。下層並びに遺構底面は赤変しており、埋土中の炭化物



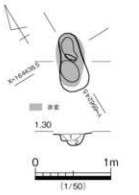
1　10YR1.7/1　黒色細礫混じり粘質シルト
2　7.5YR4/6　褐色細礫混じり細砂質シルト
3　10YR4/6　褐色細礫混じり細砂質シルト（地山）

第 88 図　SX1024 平・断面図



1　10YR3/2　黒褐色粗砂混じり砂質シルト
2　10YR3/4　暗褐色粗砂混じり砂質シルト
3　10YR4/3　にぶい黄褐色粗砂混じりシルト
4　10YR2/2　黒褐色粗砂混じりシルト
5　10YR5/4　にぶい黄褐色粗砂混じり細砂

第 89 図　SX1025 平・断面図、出土遺物



1　10YR2/1　黒色細礫混じり粘質シルト　炭化物多く含む
2　10YR4/4　褐色細礫混じり粗砂

第 90 図　SX1026 平・断面図

と合わせ、火の使用をうかがわせる状況である。下層は埋土ではなく、遺構底部の赤変した範囲の可能性がある。なお、出土遺物は図示し得なかった。

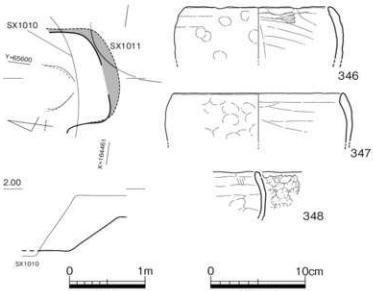
SX1025（第 89 図）

1 区南東部で検出した。SX1012 と重複する。検出面は SX1012 底面で、SX1012 に先行するか、この一部をなすものと考えられる。長軸 0.65 m、短軸 0.55 m の不整形な平面形を呈し、残存深度約 0.2 m のいびつな椀状の断面を呈する。埋土は大きく 2 層に分層でき、炭化物を伴う黒色系の土色を呈する。

遺物は微量出土しており、土師器皿（345）を図化した。小片であることから詳細は不明であるが、内面に横位の密なヘラミガキの痕跡が認められ、古代のものであると考えられる。遺構もその時期のものと考えられる。

SX1026（第 90 図）

1 区南東部で検出した。SX1012 と重複する。検出面は SX1012 底面で、SX1012 に先行するか、この一部をなすものと考えられる。長軸 0.8 m、短軸 0.4 m の不整形な長楕円形を呈し、残存深度 0.15 m のいびつな椀状の断面を呈する。埋土は大きく 2 層に分層でき、炭化物を伴う黒色系の土色を呈する。なお、遺物は図化し得なかった。



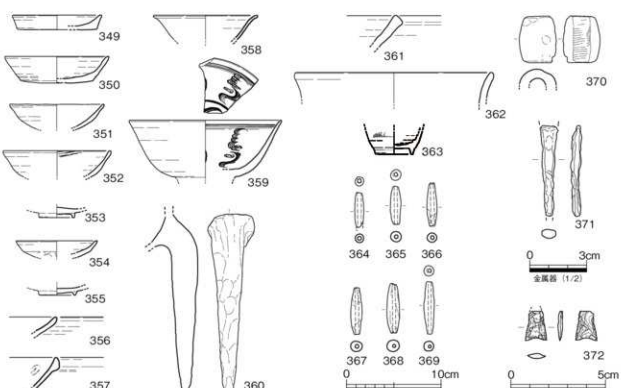
第91図　SX1027平・断面図、出土遺物

製塩遺構

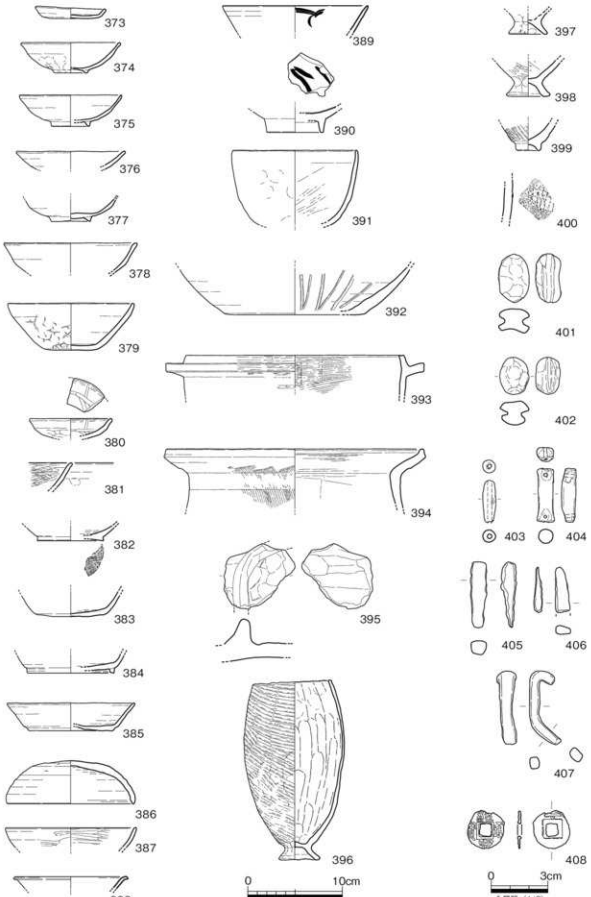
SX1027（第91図）

1区北西部で検出した。約1/2がSX1010により削平されており、掘り方の平面形は長径約0.8m以上×短径1.3mの楕円形、断面形状は逆台形を呈し、深さは約0.45mを測る。小型の部類に入る。第2面で検出したことから、第1面の粘土床を持つ製塩遺構よりも古いものであると考えられるが、構造は類似する。粘土床は南側肩部でほとんど残存せず、主に中位以下で残存する。東西壁面では概ね残存する。使用された粘土も第1面のものと同様のものである。

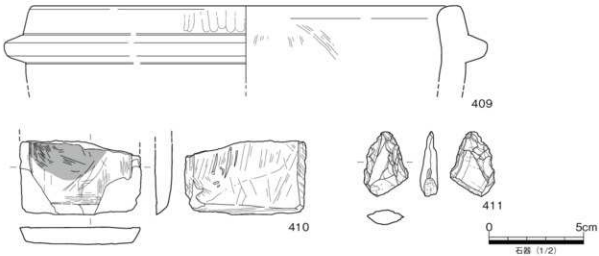
遺物は若干量出土するが、古墳時代後期の製塩土器片である。下層にSX1022が位置し、これに含まれた遺物が巻き上げられたものと考えられる。したがって、製塩遺構は中世以降に帰属すると考えられる。製塩土器（346～348）を図化した。



第92図　1区第1包含層出土遺物



第 93 図　1 区第 2 包含層出土遺物（1）



第 94 図　1 区第 2 包含層出土遺物（2）

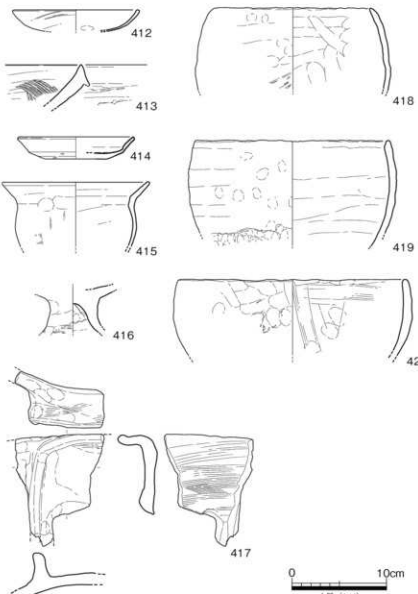
包含層（第 92 ～ 95 図）

各層位は基本土層序の項で述べたとおりである。349 ～ 372 は第 1 面に至る過程及び第 1 面精査で出土したものを挙げている。精査の段階で第 1 包含層が残存している可能性を含めてここにまとめたが、第 1 面に帰属する遺物は機械掘削時出土の 360 の土師質土器足釜と調査区東側の低地部分との境に構築された石垣の裏込めから出土した 363・370 が該当する程度である。土師質土器小皿（349）、坏（350）、椀（351 ～ 353）、瓦器小皿（354）、椀（355）、陶器皿（356）、白磁椀（357）、皿（358）、青磁椀（359）、須恵器捏鉢（361）、土師器甕（362）を図化したほか、管状土錘（364 ～ 369）、鉄製釘（371）、サヌカイト製石鏃（372）を図化した。

373 ～ 411 は第 2 面調査にかかる作業で出土したものを挙げた。主に第 2 包含層の機械掘削・精査の他、西壁の精査時に第 2 包含層相当層から出土したものが対象となる。土師質土器小皿（373）、椀（374 ～ 379）、羽釜（393）、瓦器小皿（380）、椀（381）、須恵器坏（382 ～ 385）、坏蓋（386）、擂鉢（392）、土師器鉢（391）、甕（394）、移動式カマド（395）、黒色土器椀（387）、白磁皿（388）、椀（390）、青磁椀（389）、製塩土器（396 ～ 400）を図化したほか、有溝土錘（401・402）、管状土錘（403）、棒状土錘（404）、鉄製刀子（405・406）、不明鉄製品（407）、銅銭（紹定通寶）（408）、滑石製石鍋（409）、粘板岩製硯（410）、サヌカイト製石鏃未成品（411）を図化した。

412 ～ 420 は 2 区から出土したものを挙げた。土師質土器皿（412）、備前焼擂鉢（413）、白磁皿（414）、土師器甕（415）、弥生土器高坏（416）、土師器移動式カマド（417）、製塩土器（418 ～ 420）を図化した。

第 1 面に関連するものは 363・370 であるが、小片であることから詳細な時期は不明であるが、近世のものと考えられる。調査時にはより新しい段階での構築と考えていたため、断面観察を行う部分のみ全掘したのでどれくらい当該期の遺物が入っていたのか、より新しい近現代の遺物が入っていたのか十分な検証の材料が得られていない。各層から管状土錘が出土しているが、形状、寸法、調整などがほぼ同一である。但し、耕作土の中から網に着装された状態で出てきた現代のものと考えられる土錘ともほぼ同様であることから、時期比定の資料とはしがたい。遺物の主な出土層順となる第 2 包含層の形成時期は足釜や羽釜、408 の紹定通寶（初鋳 1228 年）の存在から 13 世紀以降となる可能性が高い。土師質



第 95 図　2区包含層出土遺物

土器椀が概ね吉備系のもので占められており、その形状から 13 世紀後半～ 14 世紀初頭のものと考えられるため、それを裏付けるといえる。

第４章　自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

第１節　蒲生遺跡出土鉄滓の分析調査

１－１　はじめに

蒲生遺跡は香川県小豆郡小豆島町に所在する。発掘調査地区からは、近世と推定される製塩に関する遺構などが検出されている。また遺跡内からは、中世前期の鉄滓が複数出土したため、遺跡内での鉄器生産の様相を検討する目的から、調査を行う運びとなった。

１－２　資料

第２表に示す。出土鍛冶関連遺物４点の調査を行った。

１－３　調査方法

（１）肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。

（２）マクロ組織

本稿では顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は顕微鏡組織よりも、広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

（３）顕微鏡組織

鉱滓の鉱物組成や金属部の組織観察、非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の #150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の３μｍと１μｍで鏡面研磨した。また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。

（４）ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester ）を用いて硬さの測定を行い、文献硬度値に照らして、鉱滓中の晶出物の判定を行った。

試験は鏡面研磨した試料に 136° の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は 50gf で測定した。

第２表　蒲生遺跡出土鍛冶関連遺物資料一覧および分析項目

符号	出土位置	遺物名称	推定年代	計測値		メタル度	調査項目				
				大きさ(mm)	重量(g)		マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	EPMA	化学分析
5	１区２面 SP1115	椀形鍛冶滓	中世前半	68.5×67.2×29.3	145.1	なし	○	○	○	○	○
8	１区２面 SK1026	鍛冶滓	中世前半	27.3×24.3×19.8	6.9	なし	○	○	○	○	○
9	１区２面 SK1026	鍛冶滓（ガラス質滓）	中世前半	23.9×20.6×14.1	3.2	なし	○	○	○	○	○
10	１区２面 SK1026	鍛冶滓	中世前半	31.5×27.0×19.3	22.0	なし	○	○	○	○	○

（5）EPMA（Electron Probe Micro Analyzer）調査

日本電子㈱製 JXA-8800RL（波長分散型5チャンネル）にて含有元素の定性・定量分析を実施した。定量分析は試料電流 2.0×10^{-8} アンペア、ビーム径3 μ m、補正法はZAFに従った。

反射電子像（COMP）は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される個所ほど明るく、軽い元素で構成される個所ほど暗い色調で示される。これを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施している。

また元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性X線像の撮影も適宜行った。

（6）化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分（Total Fe）、金属鉄（Metallic Fe）、酸化第一鉄（FeO）：容量法。

炭素（C）、硫黄（S）：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化珪素（SiO_2）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）、酸化カリウム（K_2O）、酸化ナトリウム（Na_2O）、酸化マンガン（MnO）、二酸化チタン（TiO_2）、酸化クロム（Cr_2O_3）、五酸化燐（P_2O_5）、バナジウム（V）、銅（Cu）、二酸化ジルコニウム（ZrO_2）：ICP（Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer）法：誘導結合プラズマ発光分光分析。

1－4　調査結果

No. 5：椀形鍛冶滓

（1）肉眼観察：やや小形で偏平な椀形鍛冶滓（145.1g）である。表面は比較的平坦で、部分的に薄くガラス質滓が付着する。羽口先端溶融物と推定される。側面1面は直線状の破面である。細かい気孔が若干点在するが、緻密で重量感のある滓である。

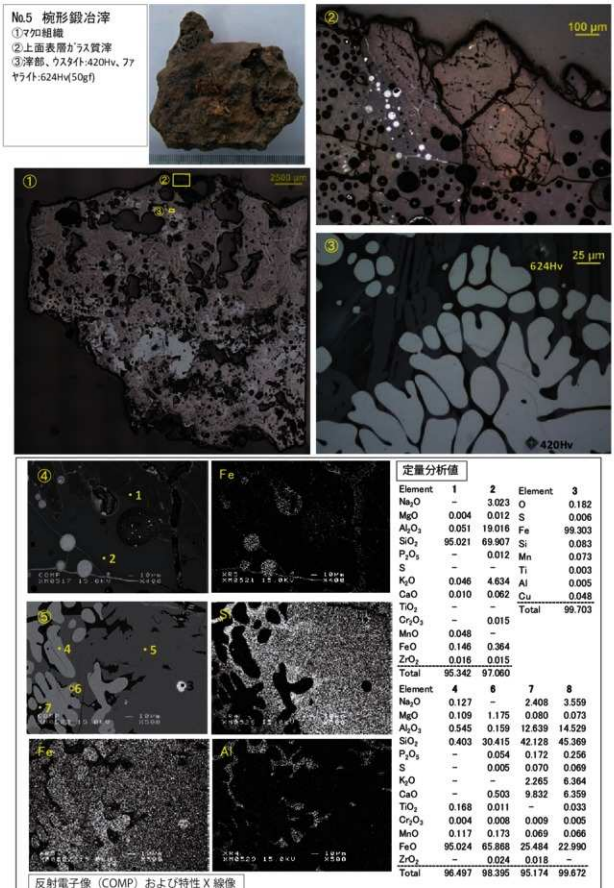
また下面中央には茶褐色の錆化鉄部が観察される。この部分は着磁性も強く、内部に金属鉄またはその錆化物が含まれると考えられる。

（2）マクロ組織：第96図－①に示す。上面の暗灰色部は羽口先端の溶融物、鍛冶炉床土と推定され

第3表　鍛冶関連遺物資料の化学組成

資料番号	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分（Total Fe）	金属鉄（Metallic Fe）	酸化第1鉄（FeO）	酸化第2鉄（Fe_2O_3）	二酸化珪素（SiO_2）*	酸化アルミニウム（Al_2O_3）*	酸化カルシウム（CaO）*	酸化マグネシウム（MgO）*	酸化カリウム（K_2O）*	酸化ナトリウム（Na_2O）*	酸化マンガン（MnO）*	二酸化チタン（TiO_2）
5	1区2面 SP1115	椀形鍛冶滓	中世前半	46.38	0.10	44.76	16.41	25.94	3.70	1.42	0.60	1.39	0.68	0.07	0.09
8	1区2面 SK1026	鍛冶滓	中世前半	55.20	0.28	61.67	9.98	17.49	4.19	1.54	0.80	0.91	0.71	0.02	0.17
9	1区2面 SK1026	鍛冶滓（ガラス質滓）	中世前半	55.4	0.37	2.16	5.00	56.88	18.11	5.48	3.06	2.36	2.67	0.14	0.74
10	1区2面 SK1026	鍛冶滓	中世前半	47.94	0.16	55.90	6.19	23.76	4.53	3.89	0.46	1.34	0.90	0.03	0.17

資料番号	出土位置	遺物名称	推定年代	酸化クロム（Cr_2O_3）	硫黄（S）	五酸化燐（P_2O_5）	炭素（C）	バナジウム（V）	銅（Cu）	二酸化ジルコニウム（ZrO_2）	砒素（As）	造滓成分 Σ *	造滓成分 Total Fe	TiO_2 Total Fe
5	1区2面 SP1115	椀形鍛冶滓	中世前半	0.03	0.039	0.16	0.15	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	33.73	0.727	0.002
8	1区2面 SK1026	鍛冶滓	中世前半	0.05	0.026	0.14	0.18	0.01	<0.01	0.01	<0.01	25.64	0.464	0.003
9	1区2面 SK1026	鍛冶滓（ガラス質滓）	中世前半	0.15	0.013	0.18	0.15	0.02	<0.01	0.01	<0.01	88.56	1.598	0.134
10	1区2面 SK1026	鍛冶滓	中世前半	0.02	0.016	0.22	0.09	<0.01	<0.01	<0.01	<0.01	34.88	0.728	0.004



Element	1	2	Element	3
Na_2O	–	3.023	O	0.182
MgO	0.004	0.012	S	0.006
Al_2O_3	0.051	19.016	Fe	99.303
SiO_2	95.021	69.907	Si	0.083
P_2O_5	–	0.012	Mn	0.073
S	–	–	Ti	0.003
K_2O	0.046	4.634	Al	0.005
CaO	0.010	0.062	Cu	0.048
TiO_2	–	–	Total	99.703
Cr_2O_3	–	0.015		
MnO	0.048	–		
FeO	0.146	0.364		
ZrO_2	0.016	0.015		
Total	95.342	97.060		

Element	4	6	7	8
Na_2O	0.127	–	2.408	3.559
MgO	0.109	1.175	0.080	0.073
Al_2O_3	0.545	0.159	12.639	14.529
SiO_2	0.403	30.415	42.128	45.369
P_2O_5	–	0.054	0.172	0.256
S	–	0.005	0.070	0.069
K_2O	–	–	2.265	6.364
CaO	–	0.503	9.832	6.359
TiO_2	0.168	0.011	–	0.033
Cr_2O_3	0.004	0.008	0.009	0.005
MnO	0.117	0.173	0.069	0.066
FeO	95.024	65.868	25.484	22.990
ZrO_2	–	0.024	0.018	–
Total	96.497	98.395	95.174	99.672

第 96 図　椀形鍛冶滓（No. 5）の顕微鏡組織・EPMA 調査結果

る。また滓中の微細な青灰色部は錆化鉄である。

（3）顕微鏡組織：第96図－②③に示す。②は上面表層のガラス質滓の拡大である。内部には熱影響を受けた石英（Quartz：SiO_2）が点在する。これは羽口粘土に混和された真砂（花こう岩の風化砂）と推測される。一方、③は鍛冶滓部分の拡大である。滓中には白色粒状結晶ウスタイト（Wustite：FeO）、淡灰色柱状結晶ファヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）が晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

（4）ビッカース断面硬度：第96図－③の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は420Hvであった。風化の影響等のためか、ウスタイトの文献硬度値450～500Hv（注1）よりも軟質である。しかし結晶の色調と形状、後述するEPMAでの定性・定量分析の結果から、ウスタイト（$Fe_{1-y}O$）と推定される。

（5）EPMA調査：第96図－④に上面表層のガラス質滓の反射電子像（COMP）を示す。滓中の暗色粒の定量分析値は95.0%SiO_2（分析点1）であった。石英（Quartz：SiO_2）に同定される。素地部分の定量分析値は69.9%SiO_2－19.0%Al_2O_3－4.6%K_2O－3.0%Na_2O（分析点2）であった。非晶質硅酸塩である。

第96図－⑤に鍛冶滓部分の反射電子像（COMP）を示す。滓中の微細な明白色粒は、特性X線像では鉄（Fe）にのみ強い反応がある。定量分析値は99.3%Fe（分析点3）であった。金属鉄（Metallic Fe）である。また白色粒状結晶は特性X線像では、鉄（Fe）、酸素（O）に強い反応がある。定量分析値は95.0%FeO（分析点4）で、ウスタイト（Wustite：FeO）と推定される。淡灰色盤状結晶は特性X線像では鉄（Fe）、珪素（Si）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は65.9%FeO－1.2%MgO－30.4%SiO_2（分析点6）であった。ファヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）で、マグネシア（MgO）を少量固溶する。白色樹枝状結晶内の微細な黒色粒の定量分析値は42.1%SiO_2－12.6%Al_2O_3－9.8%CaO－2.3%K_2O－2.4%Na_2O－25.5%FeO（分析点7）。素地の暗黒色部の定量分析値は45.4%SiO_2－14.5%Al_2O_3－6.4%CaO－6.4%K_2O－3.6%Na_2O－23.0%FeO（分析点8）と近似する組成であった。ともに非晶質硅酸塩と推定される。

（6）化学組成分析：第3表に示す。全鉄分（Total Fe）46.38%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.10%、酸化第1鉄（FeO）44.76%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）16.41%の割合であった。造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO＋MgO＋K_2O＋Na_2O）は33.73%であるが、塩基性成分（CaO＋MgO）の割合は2.02%と低い。主に製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.09%、バナジウム（V）が＜0.01%と低値であった。また酸化マンガン（MnO）は0.07%、銅（Cu）も＜0.01%と低値である。

当鉄滓は酸化鉄（FeO）と、羽口などの炉材粘土（SiO_2主成分）溶融物主体の滓であった。製鉄原料起源の脈石成分は低減傾向が著しく、鍛錬鍛冶滓に分類される。

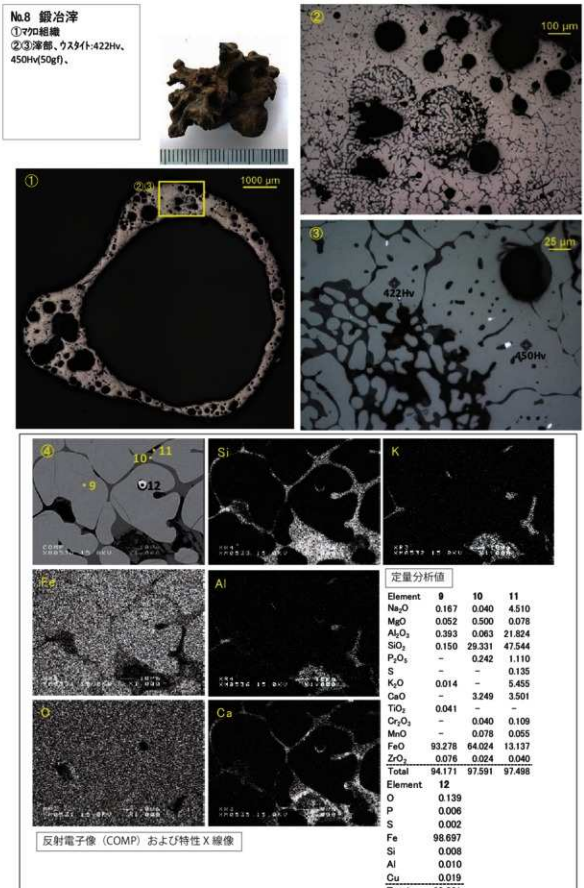
No. 8：鍛冶滓

（1）肉眼観察：ごく小形でほぼ完形の鍛冶滓（6.9g）である。滓の色調は暗灰色で、着磁性がある。表面は細かい木炭痕による凹凸が著しい。茶褐色の鉄錆化物が部分的に薄く付着するが、まとまった鉄部はみられない。

（2）マクロ組織：第97図－①に示す。観察面では、ほぼ全面白色粒状結晶ウスタイトが晶出する。

（3）顕微鏡組織：第97図－②③に示す。白色粒状結晶ウスタイトが凝集して晶出する。さらにその粒間に淡灰色のファヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

（4）ビッカース断面硬度：第97図－③の白色粒状結晶の硬度を測定した。硬度値は422Hv、450Hv



Element	9	10	11
Na_2O	0.167	0.040	4.510
MgO	0.052	0.500	0.078
Al_2O_3	0.393	0.063	21.824
SiO_2	0.150	29.331	47.544
P_2O_5	–	0.242	1.110
S	–	–	0.135
K_2O	0.014	–	5.455
CaO	–	3.249	3.501
TiO_2	0.041	–	–
Cr_2O_3	–	0.040	0.109
MnO	–	0.078	0.055
FeO	93.278	64.024	13.137
ZrO_2	0.076	0.024	0.040
Total	94.171	97.591	97.498

Element	12
O	0.139
P	0.006
S	0.002
Fe	98.697
Si	0.008
Al	0.010
Cu	0.019
Total	98.881

第 97 図　鍛冶滓（No. 8）の顕微鏡組織・EPMA 調査結果

であった。風化の影響等のためか、ウスタイトの文献硬度値 450 ～ 500Hv と比較すると若干軟質である。しかし結晶の色調と形状、後述する EPMA での定性・定量分析の結果から、ウスタイト（$Fe_{1-y}O$）と推定される。

（5）EPMA 調査：第 97 図－④に滓部の反射電子像（COMP）を示す。白色粒状結晶は特性 X 線像では鉄（Fe）、酸素（O）に強い反応がある。定量分析値は 93.3%FeO（分析点 9）で、ウスタイト（Wustite：FeO）と推定される。淡灰色結晶は特性 X 線像では鉄（Fe）、珪素（Si）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は 64.0%FeO － 3.2%CaO － 29.3%SiO_2（分析点 10）であった。ファヤライト（Fayalite：$2FeO{\cdot}SiO_2$）で、ライム（CaO）を少量固溶する。素地の暗黒色部の定量分析値は 47.5%SiO_2 － 21.8%Al_2O_3 － 3.5%CaO － 5.5%K_2O － 4.5%Na_2O － 13.1%FeO（分析点 11）であった。非晶質硅酸塩と推定である。また滓中の微細な明白色粒は、特性 X 線像では鉄（Fe）にのみ強い反応がある。定量分析値は 98.7%Fe（分析点 12）であった。金属鉄（Metallic Fe）である。

（6）化学組成分析：第 3 表に示す。全鉄分（Total Fe）55.20% に対して、金属鉄（Metallic Fe）は 0.28%、酸化第 1 鉄（FeO）61.67%、酸化第 2 鉄（Fe_2O_3）9.98% の割合であった。造滓成分（SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O）は 25.64% で、このうち塩基性成分（CaO + MgO）の割合は 2.34% と低い。主に製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は 0.17%、バナジウム（V）が 0.01% と低値であった。また酸化マンガン（MnO）は 0.02%、銅（Cu）も＜ 0.01% と低値である。

当鉄滓も製鉄原料起源の脈石成分の低減傾向が著しく、鍛錬鍛冶滓に分類される。また鉄酸化物（FeO）の割合が高く、主に鉄素材を熱間で鍛打加工した時の吹き減り（酸化に伴う損失）に伴う反応副生物と判断される。

No. 9：鍛冶滓（ガラス質滓）

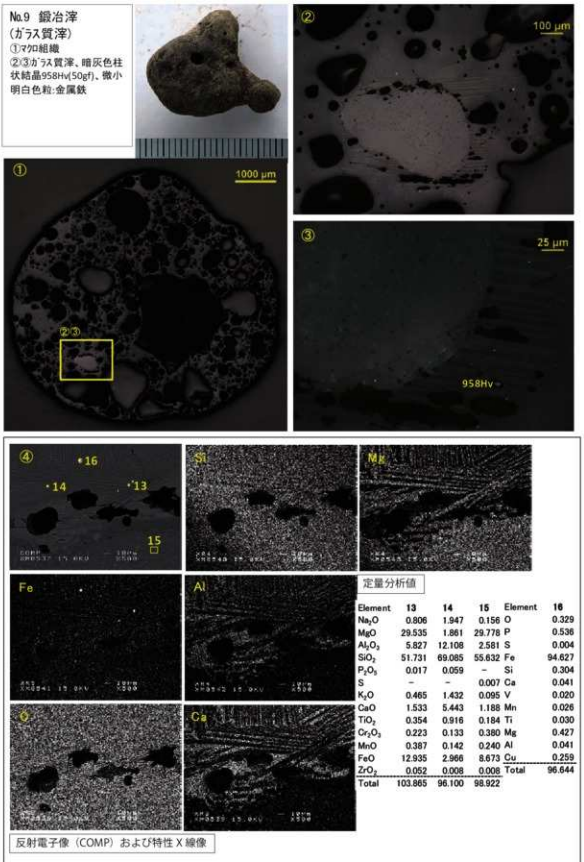
（1）肉眼観察：ごく小形で完形の鍛冶滓（3.2g）である。色調は黒色で、表面は比較的きれいな流動状を呈する。着磁性はほとんどなく、羽口先端などの炉材粘土溶融物と推定される。

（2）マクロ組織：第 98 図－①に示す。内部に微細な砂粒が少量点在するが、ほぼガラス質（非晶質硅酸塩）の鍛冶滓である。

（3）顕微鏡組織：第 98 図－②③に示す。ガラス質滓中の微細な砂粒とその周囲に晶出する淡灰色柱状結晶の拡大である。また周囲に点在する非常に微細な明白色粒は金属鉄である。これらの組成に関しては、EPMA 調査の項で詳述する。

（4）ビッカース断面硬度：第 98 図－③の淡灰色柱状結晶の硬度を測定した。硬度値は 958Hv と非常に硬質であった。後述の EPMA 調査結果から、この結晶は頑火輝石〔Enstatite：$(Mg,Fe)_2Si_2O_6$〕と推定される。

（5）EPMA 調査：第 98 図－④に滓部の反射電子像（COMP）を示す。淡灰色柱状結晶および微細な粒状の造岩鉱物（砂粒）は、特性 X 線像をみると珪素（Si）、マグネシウム（Mg）、酸素（O）に強い反応がある。定量分析値は 29.5%MgO － 12.9%FeO － 51.7%SiO_2（分析点 13）、29.8%MgO － 8.7%FeO － 55.6%SiO_2（分析点 15）であった。ともに頑火輝石〔Enstatite：$(Mg,Fe)_2Si_2O_6$〕と推定される。一方、滓の素地部分の定量分析値は 69.1%SiO_2 － 12.1%Al_2O_3 － 5.4%CaO － 1.9%MgO － 1.4%K_2O － 1.9%Na_2O － 3.0%FeO（分析点 14）であった。非晶質硅酸塩である。さらに微細な明白色粒は、特性 X 線像では鉄（Fe）にのみ強い反応がある。定量分析値は 94.6%Fe（分析点 16）であった。金属鉄（Metallic Fe）である。



定量分析値

Element	13	14	15	Element	16
Na_2O	0.806	1.947	0.156	O	0.329
MgO	29.535	1.861	29.778	P	0.536
Al_2O_3	5.827	12.108	2.581	S	0.004
SiO_2	51.731	69.085	55.632	Fe	94.627
P_2O_5	0.017	0.059	–	Si	0.304
S	–	–	0.007	Ca	0.041
K_2O	0.465	1.432	0.095	V	0.020
CaO	1.533	5.443	1.188	Mn	0.026
TiO_2	0.354	0.916	0.184	Ti	0.030
Cr_2O_3	0.223	0.133	0.380	Mg	0.427
MnO	0.387	0.142	0.240	Al	0.041
FeO	12.935	2.966	8.673	Cu	0.259
ZrO_2	0.052	0.008	0.008	Total	96.644
Total	103.865	96.100	98.922		

第 98 図　鍛冶滓（ガラス質滓）（No. 9）の顕微鏡組織・EPMA 調査結果

（6）化学組成分析：第3表に示す。全鉄分（Total Fe）の割合は5.54%と非常に低い。このうち金属鉄（Metallic Fe）は0.37%、酸化第1鉄（FeO）が2.16%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）5.00%の割合であった。造滓成分（SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O）の割合は88.56%と高く、塩基性成分（CaO + MgO）も8.54%と高値傾向を示す。砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.74%、バナジウム（V）0.02%と低値であった。また酸化マンガン（MnO）は0.14%、銅（Cu）も＜0.01%と低値である。

当鉄滓は内部に微細な金属鉄を含むことから、熱間での鍛打加工に伴う炉材粘土の溶融物（鍛錬鍛冶滓）と推定される。また塩基性成分（CaO + MgO）も高め傾向を示すが、これは滓中の微細な砂粒と木炭灰の影響と考えられる。

No.10：鍛冶滓

（1）肉眼観察：やや小形の鍛冶滓（22.0g）で、側面は全面破面である。滓の色調は黒灰色で、弱い着磁性がある。表面には中小の気孔が散在する。また下面表層には真砂（花こう岩の風化砂）が点々と固着しており、鍛冶炉床土の影響の可能性が考えられる。

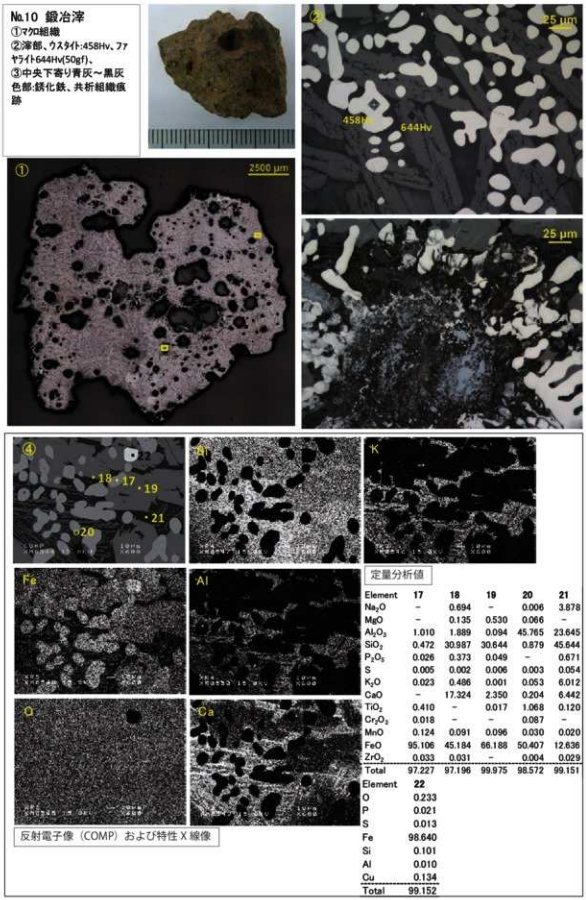
（2）マクロ組織：第99図－①に示す。ごく微細な錆化鉄が若干点在するが、内部にまとまった鉄部はみられない。

（3）顕微鏡組織：第99図－②③に示す。②は滓部の拡大である。白色粒状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶滓の晶癖である。また③の下寄りの青灰～黒灰色粒は錆化鉄である。内部には層状の組織痕跡が残存しており、共析鋼（C:0.77%）であった可能性が考えられる。

（4）ビッカース断面硬度：第99図－②の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は458Hvであった。ウスタイトの文献硬度値の範囲内であり、ウスタイトと推定される。また淡灰色柱状結晶の硬度値は644Hvであった。ファヤライトの文献硬度値の範囲内で、ファヤライトと推定される。

（5）EPMA 調査：第99図－④に滓部の反射電子像（COMP）を示す。白色粒状結晶は特性X線像では鉄（Fe）、酸素（O）に強い反応がある。定量分析値は95.1%FeO（分析点17）であった。ウスタイト（Wustite：FeO）と推定される。淡灰色柱状結晶は全体に鉄（Fe）、珪素（Si）、酸素（O）に反応がみられるが、外周部ではカルシウム（Ca）に強い反応がある。定量分析値は外周部が45.2%FeO － 17.3%CaO － 31.0%SiO_2（分析点18）、内側は66.2%FeO － 2.4%CaO － 30.6%SiO_2（分析点19）であった。内側はファヤライト（Fayalite：$2FeO \cdot SiO_2$）組成であり、その外周部にライム（CaO）の割合の高い相が存在する。暗灰色微結晶は定量分析値をみると、鉄（Fe）、アルミニウム（Al）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は50.4%FeO － 45.8%Al_2O_3 － 1.1%TiO_2（分析点20）であった。ヘルシナイト（Hercynite：$FeO \cdot Al_2O_3$）で微量チタニア（TiO_2）を固溶する。素地部分の定量分析値は45.6%SiO_2 － 23.6%Al_2O_3 － 6.4%CaO － 6.0%K_2O － 3.9%Na_2O － 12.6%FeO（分析点21）であった。非晶質硅酸塩である。また微細な明白色粒は、特性X線像では鉄（Fe）にのみ強い反応がある。定量分析値は98.6%Fe（分析点22）であった。金属鉄（Metallic Fe）である。

（6）化学組成分析：第3表に示す。全鉄分（Total Fe）47.94%に対して、金属鉄（Metallic Fe）は0.16%、酸化第1鉄（FeO）が55.90%、酸化第2鉄（Fe_2O_3）6.19%の割合であった。造滓成分（SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O）34.88%で、このうち塩基性成分（CaO + MgO）は4.35%とやや高めである。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO_2）は0.17%、バナジウム（V）が



定量分析値

Element	17	18	19	20	21
Na_2O	–	0.694	–	0.006	3.878
MgO	–	0.135	0.530	0.066	–
Al_2O_3	1.010	1.889	0.094	45.765	23.645
SiO_2	0.472	30.987	30.644	0.879	45.644
P_2O_5	0.026	0.373	0.049	–	0.671
S	0.005	0.002	0.006	0.003	0.054
K_2O	0.023	0.486	0.001	0.053	6.012
CaO	–	17.324	2.350	0.204	6.442
TiO_2	0.410	–	0.017	1.068	0.120
Cr_2O_3	0.018	–	–	0.087	–
MnO	0.124	0.091	0.096	0.030	0.020
FeO	95.106	45.184	66.188	50.407	12.636
ZrO_2	0.033	0.031	–	0.004	0.029
Total	97.227	97.196	99.975	98.572	99.151

Element	22
O	0.233
P	0.021
S	0.013
Fe	98.640
Si	0.101
Al	0.010
Cu	0.134
Total	99.152

第 99 図　鍛冶滓（No.10）の顕微鏡組織・EPMA 調査結果

第４表　出土鍛冶関連遺物の調査結果のまとめ

符号	出土位置	遺物名称	推定年代	顕微鏡組織	化学組成（%）								所見
					Total Fe	Fe_2O_3	塩基性成分	TiO_2	V	MnO	造滓成分	Cu	
5	1区2面 SP1115	椀形鍛冶滓	中世前半	上下面表層ガラス質滓（石英混在）、滓部W+F、微小金属鉄粒、鉄化鉄	46.38	16.41	2.02	0.09	<0.01	0.07	33.73	<0.01	鍛錬鍛冶滓
8	1区2面 SK1026	鍛冶滓	中世前半	滓部W+F、微小金属鉄粒	55.20	9.98	2.34	0.17	0.01	0.02	25.64	<0.01	鍛錬鍛冶滓
9	1区2面 SK1026	鍛冶滓（ガラス質滓）	中世前半	滓部ガラス質滓、（砂粒頑火輝石混在）、微小金属鉄粒	5.54	5.00	8.54	0.74	0.02	0.14	88.56	<0.01	鍛錬鍛冶滓（炉材粘土溶融物）
10	1区2面 SK1026	鍛冶滓	中世前半	滓部W+微細H+F、微小鉄化鉄粒（共析組織痕跡）	47.94	6.19	4.35	0.17	<0.01	0.03	34.88	<0.01	鍛錬鍛冶滓

W:Wustite（FeO）、H:Hercynite（$FeO \cdot Al_2O_3$）、F:Fayalite（$2FeO \cdot SiO_2$）

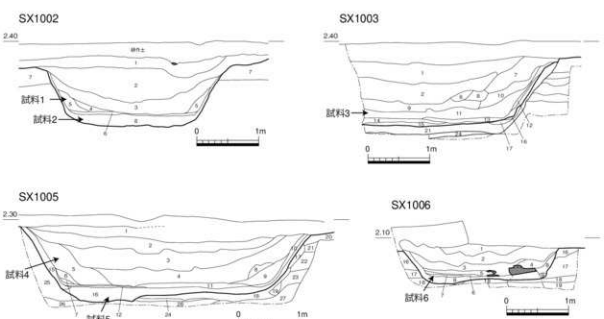
＜0.01%と低値であった。また酸化マンガン（MnO）は0.03%、銅（Cu）も＜0.01%と低値である。

当鉄滓も酸化鉄（FeO）と、羽口などの炉材粘土（SiO_2主成分）溶融物主体の滓であった。またライム（CaO）がやや高めであるが、カリウム（K）も伴うことから、木炭灰の影響の可能性が考えられる。砂鉄起源の脈石成分（TiO_2、V）の低減傾向は著しく、鍛錬鍛冶滓と推定される。

１－５　まとめ

今回調査をした蒲生遺跡出土鉄滓４点（No. 5、８～10）は、いずれも熱間で鉄器を鍛打加工した際の反応副生物（鍛錬鍛冶滓）と推定される。砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の脈石成分（TiO_2、V）の割合は非常に低く、製鉄原料起源の不純物（砂鉄製錬滓）は十分除去された鉄素材（新鉄）、または廃鉄器を利用して、鍛造鉄器を製作していたものと推測される。

（注１）日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968：ウスタイトは450～500Hv、マグネタイトは500～600Hv、ファヤライトは600～700Hvの範囲が提示されている。



第100図　珪藻分析試料採取位置

第２節　製塩遺構堆積物の珪藻分析

蒲生遺跡の発掘調査では、中世～近世の検出面において製塩に関連する鹹水槽とみられる遺構が確認されている。今回の分析調査では、本遺構を構成する堆積物について珪藻分析を実施し、鹹水槽の可能性に関する傍証を得る。

２－１　試料

分析を行った試料は、蒲生遺跡のSX1002・SX1003・SX1005・SX1006の４つの鹹水槽とみられる遺構から採取された堆積物試料６点（試料１～６）について実施する。試料採取位置を第100図、各試料の層相を以下に示す。

SX1002　試料１：極粗粒砂、細礫、貝片、炭片が不規則に混じる極細粒砂質シルトからなる。人為的撹拌されている。

SX1002　試料２：粗粒砂～細礫、貝片、炭片が不規則に混じる極細粒砂質シルトからなる。人為的撹拌されている。

第５表　蒲生遺跡の珪藻分析結果

種類	生態性			環境指標種	1段目：遺構名　2段目：層位　3段目：試料番号					
					SX1002		SX1003	SX1005		SX1006
	塩分	pH	流水		5層	8層	11層	5層	16層	7層
					1	2	3	4	5	6
Cocconeis scutellum Ehrenberg	Euh-Meh			C1	–	–	–	4	–	–
Navicula marina Ralfs	Euh-Meh			B	–	–	–	–	–	6
Navicula spp.	Euh-Meh				–	–	–	–	–	2
Achnanthes delicatula (Kuetz.) Grunow	Meh			D1	–	–	–	12	–	–
Amphora coffeaeformis (Ag.) Kuetzing	Meh			E1,E2	–	–	–	6	–	–
Caloneis formosa (Greg.) Cleve	Meh			E1,E2	–	–	–	–	–	5
Caloneis spp.	Meh				–	–	–	–	–	3
Mastogloia spp.	Meh			E1,E2	–	–	–	2	–	–
Nitzschia coconeiformis Grunow	Meh			E1	–	–	1	–	–	–
Nitzschia constricta (Kuetz.) Ralfs	Meh			E1	–	–	–	103	–	6
Nitzschia granulata Grunow	Meh			E1	35	23	2	4	–	22
Nitzschia hungarica Grunow	Meh			E1	–	–	–	11	–	1
Nitzschia spp.	Meh				–	–	–	4	–	4
Rhopalodia musculus (Kuetz.) Mueller	Meh			D1,E1	–	–	–	2	–	–
Amphora spp.	Ogh-unk	unk	unk		–	–	–	7	–	–
Diploneis parma Cleve	Ogh-ind	ind	ind	O	–	–	–	2	–	–
Gyrosigma spp.	Ogh-unk	unk	unk		4	–	–	–	–	–
Hantzschia amphioxys (Ehr.) Grunow	Ogh-ind	al-fi	ind	RA,U	–	–	–	2	–	–
Luticola mutica (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	al-fi	ind	RA,S	–	–	–	2	–	–
Navicula cryptocephala Kuetzing	Ogh-ind	al-fi	ind	U	–	–	–	1	–	–
Navicula tenelloides Hustedt	Ogh-unk	unk	r-ph	LU	–	–	–	2	–	–
Nitzschia amphibia Grunow	Ogh-ind	al-bi	ind	S	–	–	–	4	–	–
海水生種					0	0	0	0	0	0
海水～汽水生種					0	0	0	4	0	8
汽水生種					35	24	2	144	0	41
淡水～汽水生種					0	0	0	0	0	0
淡水生種					4	0	0	20	0	0
珪藻化石総数					39	24	2	168	0	49

凡例

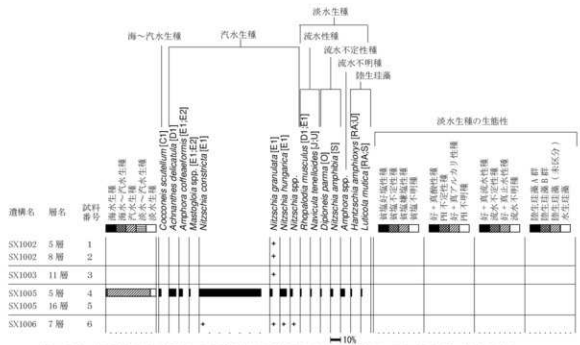
塩分・pH・流水に対する適応性

E.R.：塩分濃度に対する適応性
- Euh　：海水生種
- Euh-Meh：海水生種-汽水生種
- Meh　：汽水生種
- Ogh-hil：貧塩好塩性種
- Ogh-ind：貧塩不定性種
- Ogh-hob：貧塩嫌塩性種
- Ogh-unk：貧塩不明種

pH：水素イオン濃度に対する適応性
- al-bi：真アルカリ性種
- al-fi：好アルカリ性種
- ind　：pH不定性種
- ac-fi：好酸性種
- ac-bi：真酸性種
- unk　：pH不明種

C.R.：流水に対する適応性
- l-bi：真止水性種
- l-ph：好止水性種
- ind　：流水不定性種
- r-ph：好流水性種
- r-bi：真流水性種
- unk　：流水不明種

環境指標種
- A：外洋指標種　B：内湾指標種　C1：海水藻場指標種　C2：汽水藻場指標種
- D1：海水砂質干潟指標種　D2：汽水砂質干潟指標種
- E1：海水泥質干潟指標種　E2：汽水泥質干潟指標種　F：淡水底生種群（以上は小杉、1988）
- G：淡水浮遊生種群　H：河口浮遊性種群　J：上流性河川指標種　K：中～下流性河川指標種
- L：最下流性河川指標種群　M：湖沼浮遊性種　N：湖沼沼沢湿地指標種　O：沼沢湿地付着生種
- P：高層湿原指標種群　Q：陸域指標種群　（以上は安藤、1990）
- S：好汚濁性種　T：好清水性種　U：広適応性種（以上はAsai, K. & Watanabe, T. 1995）
- RI：陸生珪藻（RA：A群, RB：B群、伊藤・堀内、1991）



海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数，淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。
環境指標種
C1:海洋藻場指標種 D1:海水砂質干潟指標種 E1:海水泥質干潟指標種 E2:汽水泥質干潟指標種（以上は小杉,1988）
上:流性河川指標種 O:沼沢湿地付着生種（以上は安藤,1990）
S:好汚濁性種 T:好清水性種 U:広適応性種（以上はAsai & Watanabe,1995）RB:塩生珪藻（RA-A群,RB-B群;伊藤・堀内,1991）

第 101 図　蒲生遺跡の主要珪藻化石群集

SX1003　試料３：極粗粒砂、細礫、貝片、炭片が不規則に混じる極細粒砂。人為的撹拌されている。

SX1005　試料４：極細粒砂質シルト。比較的均質な堆積物からなるが、堆積構造は確認されない。人為的撹拌されている。

SX1005　試料５：極粗粒砂、細礫混じり極細粒砂質シルト。著しく撹拌されている。人為的撹拌されている。

SX1006　試料６：粗粒砂の薄層を挟在する極細粒砂質シルト。人為的撹拌されている。

２－２　分析方法

湿重約 5g をビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を４～５回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリュウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸 600 倍または 1000 倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が 200 個体以上になるまで同定・計数する。原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについて行う。200 個体が検出できた後は、示準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努める。珪藻の同定と種の生態性については、Hustedt（1930-1966）、Krammer & Lange-Bertalot（1985 ～ 1991）、Horst Lange-Bertalot（2000）、Desikachiary（1987）などを参考にする。

個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、ｐＨ、水の流動性の３適応性についても生態分類し、結果表に示す。堆積環境の変遷を考察するために珪藻化石が 100 個体以上検出された試料について珪藻化石群集変遷図を作成する。また、図中には、海水生・汽水生・淡水生種の相対頻度と淡水生種を基数とした塩分・ｐＨ・流水の相対頻度について示す。

２－３　結果

結果は、第５表、第 101 図に示す。珪藻分析を行った６試料のうち、５試料からは珪藻化石を認めたが、試料５については皆無であった。産出をみた試料も SX1005 の試料４は 100 個体以上検出されたが、他は低率にしか検出されない。検出された珪藻化石は、汽水、海水～汽水生種を含むものの大半は淡水生種で構成される。結果としては、85％と汽水性種が優占する。特徴的に産出した種は、汽水生種の ***Achnanthes delicatula***、***Nitzschia constricta***、***Nitzschia granulata***、等である。

２－４　考察

各遺構の底部堆積物は、層相から人為的営力が及んだ、あるいは人為的に貼り付けられた堆積物と推定される。したがって堆積物中に残存する珪藻化石は、使用されている堆積物中にもともと存在したもの、あるいは鹹水槽として利用されていた際にとりこまれたものの双方の可能性がある。

各遺構底部堆積物の珪藻化石の産状は全般に悪く、SX1005 の試料５は珪藻殻が産出されなかった。このように保存状態が悪いものの、僅かに産出する種類をみると、汽水生種の ***Achnanthes delicatula***、***Nitzschia constricta***、***Nitzschia granulata*** 等が特徴的に認められる。

汽水生種の Achnanthes delicatula は海水砂質干潟の指標種群とされる（小杉、1988）。海水砂質干潟とは、塩分濃度が 26 パーミル以上の水域の砂底（砂の表面や砂粒間）であり、このような場所にはウミニナ類、キサゴ類、アサリ、ハマグリ類などの貝類が生活するとされる。

汽水生種の ***Achnanthes delicatula*** は海岸・汽水湖の湖岸などに生息しており、沖積層や湖成堆積物のボーリングコア試料からもよく見られ、海岸汽水環境の指標種として用いられる（鹿島 ,2002）。

汽水生種の ***Nitzschia constricta*** は、閉塞性の高い塩性湿地や泥質の干潟域などの泥底に付着生活する種であり、小杉（1988）は海水泥質干潟の指標種としている。

調査遺構では、どの層も保存状態は不良で溶けかかった様子であり、基本的に好気的な環境であったと推定される。100 個体以上産出した SX1005 試料４では汽水生種が 90％近く産出し、特に優先した汽水生種の ***Nitzschia granulata*** は海岸汽水環境に生息するとされている為、極沿岸で汲み上げられた海水に生息していた珪藻種群が取り込まれている、あるいは沿岸部の堆積物が遺構壁の貼粘土として利用されている可能性が考えられる。SX1005 以外の遺構でも化石の保存が悪いものの、汽水生種が産出している。下記する珪藻化石の分解消失を踏まえると、SX1005 以外の遺構も同様な用途として利用されていた可能性がある。

また、SX1005 の試料４以外では珪藻が産出しないか、または珪藻殻が低率でしか産出しない。珪藻殻を構成する生物源シリカ鉱物は、温度増加および時間経過にしたがって、オパール Ａ →オパール CT →石英に変化することが知られている（Mizutani,1977;Mitsui and Taguchi,1977;Kano,1979;Iijima and Tada,1981）。経験的には、堆積後に好気的環境下で大気に曝されると、短期間に分解消失するこ

とがわかっている。また、珪藻化石を構成するシリカ鉱物は、温度が高いほど、流速が早いほど、水素イオン濃度が高いほど溶解度が大きくなり溶けやすいことが実験により推定されているほか（千木良,1995）、亜熱帯湿潤気候下では、堆積物中で珪酸分を含む無機成分の溶脱作用が起こることも知られている（松井,1988）。鹹水槽の機能を踏まえると、上記のような作用が及んでいる可能性があり、そのため珪藻化石が分解消失した可能性が充分考えられる。

＜引用文献＞

安藤一男，1990. 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用. 東北地理，42, 73～88p.

Asai, K. & Watanabe, T., 1995. Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. Diatom,10,35 － 47p.

Bronk Ramsey, C., & Lee, S. ,2013. Recent and Planned Developments of the Program OxCal. Radiocarbon, 55, 720-730p.

Desikachiary, T. V., 1987. Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean. Madras science foundation, Madras, Printed at TT. Maps & Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. 1-13, Plates：401-621p.

Erdtman G.,1952.Pollen morphology and plant taxonomy：Angiosperms（An introduction to palynology. I）.Almqvist&Wiksells,539p.

Erdtman G.,1957. Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy：Gymnospermae, Pteriodophyta, Bryophyta（Illustrations）（An Introduction to Palynology. II）,147p.

Feagri K. and Iversen Johs.,1989.Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.

Horst Lange-Bertalot., 2000. ICONOGRAPHIA DIATOMOLOGICA：Annotated diatom micrographs. Witkowski,A.,Horst Lange-Bertalot, Dittmer Metzeltin：Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1. 219 plts. 4504 figs, 925 p.

Hustedt, F., 1930. Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 1, 920p.

Hustedt, F., 1937-1938, Systematische unt okologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. Ⅰ～Ⅲ. Arch. Hydrobiol. Suppl., 15, 131-809p, 1-155p, 274-349p.

Hustedt, F., 1938, Systematische und okologische untersuchungen uber der diatomeen flora von Java, Bali und Sumatra nach dem material der Deutschen limnologischen Sunda Expedition. Arch. Hydrobiol. suppl.

Hustedt, F., 1959, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Berucksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz, 7, Leipzig, Part 2, 845p.

Hustedt, F., 1961-1966, Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. under Beruck-

sichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs unt der Schweiz. 7, Leipzig, Part 3, 816p.

Iijima, A. and Tada, R., 1981, Silica diagenesis of Neogne diatomaceous and volcaniclastic sediments in northern Japan. Sedimentology, 28, 185-200p.

伊藤良永・堀内誠示, 1989, 古環境解析からみた陸生珪藻の検討　－－陸生珪藻の細分－－, 日本珪藻学会第10回大会講演要旨集, 17p.

伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用. 日本珪藻学誌,6, 23-44p.

鹿島薫, 2002, トルコの強塩性内陸湖沼から産出する「汽水性」珪藻種. 汽水域研究, 9, 47-53

小杉正人, 1986, 陸生珪藻による古環境の解析とその意義－わが国への導入とその展望－. 植生史研究, 1, 9-44p.

小杉正人, 1988, 珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用. 第四紀研究, 27,（1）, 1-20p.

Kano, K., 1979, Depisition and diagenesis of siliceous sediments of the Onnagawa Formation. Sci. Rep.,Tohoku Univ., 14, 135-189p.

近藤錬三 ,2010, プラント・オパール図譜. 北海道大学出版会 ,387p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1985, Naviculaceae. Bibliothyca Diatomologica, vol. 9, p. 250.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1986, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa, 2（1）: 876p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1988, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2（2）: 596p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1990, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2（3）: 576p.

Krammer, K. and H. Lange-Bertalot, 1991a, Bacillariophyceae, Susswasser flora von Mitteleuropa 2（4）: 437p.

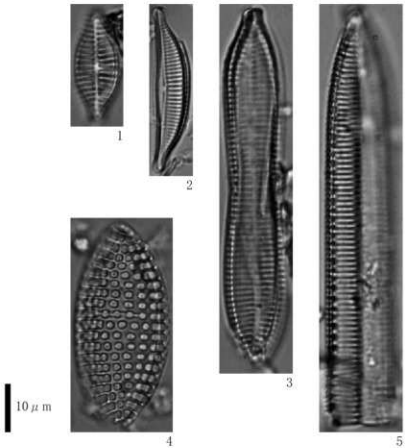
松井　健 ,1988, 土壌地理学序説, 築地書館株式会社 ,316p.

Mitsui, K and Taguchi, K., 1977, Silica minerals diagenesis in Neogene Tertiary shales in the Tempoku district, Hokkaido, Japan. Jour. Sedim. Petrol., 47, 158-167p.

Mizutani, S., 1977, Progressiv ordering of cristobalitic silica in early stage of diagenesis.Contri. Miner.Petrol.,61,129-140p.

南雲　保・安藤一男, 1984, 埼玉県 荒川低地沖積層のケイソウ（2）, 日本歯科大学紀要, 13, 123-134.

千木良　雅弘, 1995, 風化と崩壊, 近未来社, 204p.



1 . *Achnanthes delicatula* (Kuetz.) Grunow (SX1005 5層 試料4)
2 . *Amphora coffeaeformis* (Ag.) Kuetzing (SX1005 5層 試料4)
3 . *Nitzschia constricta* (Kuetz.) Ralfs (SX1005 5層 試料4)
4 . *Nitzschia granulata* Grunow (SX1005 5層 試料4)
5 . *Nitzschia hungarica* Grunow (SX1005 5層 試料4)

第102図 蒲生遺跡の珪藻化石

第5章　まとめ

1．第1面の製塩遺構について

第1面では17基の製塩遺構を検出した。これらについて若干の検討を加えたい。

A．遺構の属性

①　平面形

楕円形を呈し、長軸4m以上・短軸3m以上の大型と長軸2m以内・短軸1.5m以内の小型の2形態に大別出来る。

②　断面形

逆台形を呈し、残存深度1m以内である。

③　埋土

底部粘土面直上に細砂を含む泥状堆積物の痕跡が確認出来ることから、滞水環境にあったと考えられる。これより上の埋土は締まりの弱い土・粘土塊からなる。人頭大の礫が数点伴うものや大量の板状礫を伴うもの、焼土や灰状の土を含むものなど若干のバリエーションがある。

④　粘土床

掘り方内面全体に粘土を貼る。現状で最大0.15m程度残存する。底部が厚く、壁面がやや薄い傾向がある。色調は灰黄色系と褐色系が認められ、同一遺構内でも色調の差がある。粘土単体ではなく、砂粒を含む。内側と外側、あるいは部位によって色調が異なるものがあるが、土質に差はない。粘土床を持つものと持たないものの差は、その施設の廃絶時状況を表していると考えられる。粘土がほとんど残存しないものについては、施設解体に伴い剥ぎ取られた、あるいは転用のために剥ぎ取ったとも考えられる。

⑤　1点の大型扁平礫

底部中央に平坦な礫を据え置くものが3例ある。上部構造が残存しないため詳細は不明であるが、礎石として機能していたと考えられる。礫が認められないものは施設解体に伴い撤去されたと考えられる。

⑥　開削単位

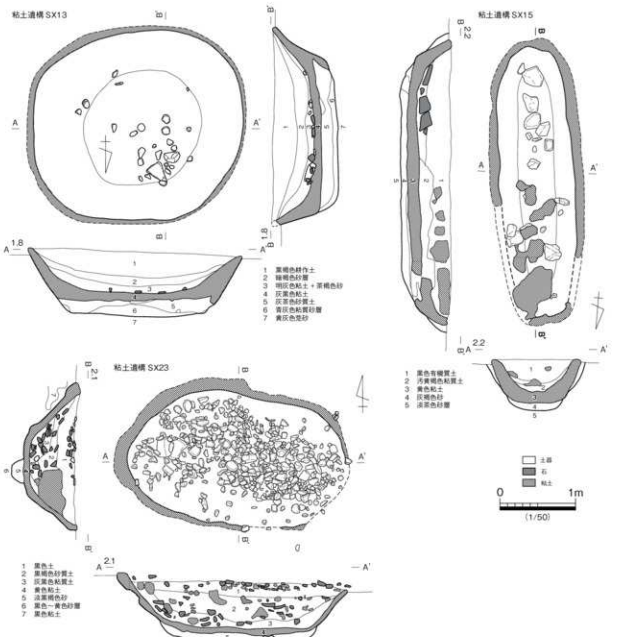
各遺構の重複関係から、その場を選地する意識があったと考えられる。共時性は不明であるが、視覚的に6単位あり、大きく南北に2列並び、4カ所において最多で4基重複することから、最低4期に分かれる可能性がある。

⑦　開削時期

裏付けるための遺物に欠けるため、不明である。15～16世紀代の遺物を含むことから、それ以降のものと考えられる。

B．類例

県内で類似する遺構は、坂出市櫃石島所在の大浦浜遺跡で穴の壁に粘土を貼ったもの（粘土遺構）が29基確認されている（香川県教育委員会ほか　1988）。遺構の帰属時期は出土遺物から平安時代後半～鎌倉時代に位置付けられる。遺構の平面形状は円形・隅丸方形・長楕円形など比較的多岐にわたる（第103図）が、約半数の11基が長楕円形を呈する。これらは大浦浜遺跡の中では大型の部類に入り、長



第 103 図　大浦浜遺跡粘土遺構

軸が４～５ｍ程ある。ただし、短軸は１～２ｍ程と短く、蒲生遺跡事例に比べるとやや細く見える。円形あるいは隅丸方形のものは、直径あるいは一辺が２ｍ前後からそれ以下となる。貼り付けられた粘土は 10 ～ 20㎝を測り、蒲生遺跡事例よりも厚みがある。また、埋土中に被熱礫を多数含む事例が多い。これらのうち、内部が被熱していないものについて製塩に伴う鹹水の貯蔵施設の機能が想定されている。

構造上の共通点から蒲生遺跡例についても鹹水槽であると考え、両遺跡間の形態の差異については時期差によるものと考えておきたい。県内では近世以降の調査事例が無く、比較材料に乏しい。しかし、文献上にわずかながら対比資料として用いられそうなものが認められる。蒲生遺跡の所在する小豆島町が所有する古文書に、『塩浜稼方書上帳』（延享３（1746）年）がある。小豆島における塩生産過程につ

いて図解を加えて記述したもので、成立した延享3年段階の小豆島での塩生産に関する実態を窺うことが出来る。この文書で注目できるのは、鹹水槽に関する記載が認められる点にある。「汐壷」と呼ばれる施設がそれに該当し、図入り（第104図）で紹介されており、当時の塩田に伴う鹹水槽の様子が分かる。以下、図に付された説明を抜粋する。

但壷はねつち二而練堅汐満申候

尤出来宜ハ数拾年相用出来方ニより七八年ニ而損

（中略）

長三間横弐間屋根柱壱本ニ而四方梁ニ而笘萱葺、竹代共此入用五拾匁以上

ここから分かるのは、以下の通りである。

・粘土を練り固め、貼り付ける。

・良く出来たものは数十年使用でき、出来が良くないものは7、8年で壊れる。

・3間×2間の規模である。（5.4 m × 3.6 m）

・屋根柱は1本で四方に梁をわたし、笘茅葺である。

・梁は竹を用いる。

第104図 「汐壷（鹹水槽）」模式図
（『塩浜稼方書上帳』
「日本塩業大系 史料編 近世（一）」より抜粋）

ここに見られる下部構造は、蒲生遺跡で検出した製塩遺構ときわめて類似する。「汐壷」が蒲生遺跡例と同一のものであれば文献の成立した18世紀中頃の年代を与えることが出来る。ただし、鹹水槽がこの形態を取る時期の上限と下限が現時点では不明である。なお、嘉永年間（1848～1853）に記された『小豆島名所図会』には蒲生にも塩田が存在したことが記載されており、これが蒲生遺跡内の塩田も含むものであれば、記載された鹹水槽の構造が類似する『塩浜稼方書上帳』の成立した延享3（1746）年前後から後、約100年の間に構築されたものと考えられるだろう。

一方、同様の鹹水槽は近代の塩田においても認められ、穴の壁は粘土で施工している。1948年に刊行された『塩技術研究』第2巻3号掲載の近藤泰夫・松尾新一郎両氏による「塩田用粘土の研究、鹹水溜の研究」には、明治29年から大正4年にかけて刊行された『大日本塩業全書』第1編～第4編に記載された鹹水槽に関する記録を基に近代の鹹水槽の在り方についてまとめられている。これによると瀬戸内では大型のものが多く、長さ6～10間、幅3～5間、深さ4～6尺を測り、天日濃縮装置（流下式塩田の枝条架か？）を付随するものについてはさらに大型化する傾向にあるという。また、平面形状は矩形が多く、楕円形は稀なようである。上部構造については触れられていないので先述の「汐壷」との対比が出来ないが、兵庫県赤穂市周辺で営まれた塩田における鹹水槽は方形の掘り方の肩部に木材を渡し、その上に柱を置いて屋根をかける例があることから、概ね方形を呈するものの上部構造はそれに類するものであろう。蒲生遺跡で確認されたものは、近代においては平面形状が稀な部類に入ることから、明治29年以降のものとは考えにくい。また、規模の面でも蒲生遺跡例は合致しない。旧池田町域においては幕末から明治初年には塩田は廃田となり、耕地化したようなので、現状では先述したように17世紀中頃～18世紀中頃に構築されたものと考えておきたい。

C．理科学的分析の成果

さて、この遺構が鹹水槽であるならば、その中に堆積する土壌には海水起源の成分などが含まれると考えられる。特に機能時に堆積した土壌中には海水性の珪藻化石が含まれている可能性が高いと考えられることから、粘土床直上に堆積した泥層並びに粘土床を対象に４遺構６点の試料を分析した（第４章参照）。その結果、残存状況が不良であるものの、SX1005から汽水性の珪藻化石が確認できた。他の遺構については芳しい結果が得られなかったが、いずれの遺構もSX1005の堆積状況や堆積物の内容が酷似することから、概ね同一の堆積環境にあったと考えられる。すなわち、汽水域を含む沿岸部の海水を用いて鹹水を作り、構築された施設内に保存していた可能性が考えられる。ただし、抽出された珪藻化石を構成するシリカ鉱物が「堆積後に好気的環境下で大気に曝されると、短期間に分解消失」したり、「温度が高いほど、（中略）溶解度が大きくなり溶けやすい」性質をもつことから残存状況が不良であったと考えられる。

D．遺跡の構造

この遺構を鹹水槽であると判断した場合、遺跡の中に塩田の一部が含まれていると考えられる。しかし、そこで検出されるべき他の施設（採鹹場・釜場など）は未検出である。貯蔵施設と釜場については比較的近接した場所に構築されると考えられ、本遺跡における釜場は地形的にやや標高の高い対象地北方に構築されていたと想定できる。しかし、大量に発生すると考えられる炭・灰などの副産物が、鹹水槽埋め戻し土の中にほとんど混じらない。SX1006でその痕跡が認められるほか、SX1010内に埋積した受熱した安山岩の板状石材が挙げられる程度である。安山岩については石釜などの施設を構築したものの残骸であろう。一方、採鹹場については採鹹の方法により想定される必要な空間が変わることから、場所について想定は困難である。揚浜式を採用していれば遺跡西側に展開する砂州を利用していたと考えられるし、入浜式を採用していればそれなりの施設が近隣に存在する必要がある。

ところで、土庄町立中央図書館蔵の井上文八郎文庫にある「愛媛県讃岐国小豆郡塩田図面」（徳島文理大学　1998）は明治９年から明治21年の間に作成されたもので、その頃小豆島に所在した塩田のうち13箇所が描かれる。スケールが入っていないことから詳細な縮尺率は不明であり、どこまで写実的な表現がなされているか不明であるが、採鹹場と水路、鹹水槽、竈屋（＝釜屋）の関係がわかり、当時の塩田の構造を伺ううえで貴重な資料である。ここに描かれる鹹水槽（図では「壷」と表記）に注目すると、竈屋１に対し鹹水槽は１～16基表現される。大型の隅丸方形に描かれるものが若干みられるものの、大半が楕円形を呈しており、前掲の『大日本塩業全書』の記載とは少し異なる。前近代的な状況が残存するものの、生産量の増加に伴う鹹水槽の大型化が進みつつあるのかもしれない。さて、絵図の中では鹹水槽と竈屋は近接して構築されているものが多く、竈屋の周囲を囲むように鹹水槽が配置されている。蒲生遺跡で検出した鹹水槽は、少なくとも同時に６基構築されていた可能性があり、絵図に描かれている状態と類似している。絵図を参考にすれば、近接地に竈屋が存在した可能性は十分にあると考えられる。

文献から見た蒲生

○文安２年（1445）段階で小豆島産の塩が兵庫北関を通関（兵庫北関入船納帳）

○明応６年（1497）内海町安田に塩浜

○明応９年（1500）大新開・方城（片城）・午き（馬木）各塩浜
（「小豆島利貞名外五名公田・余田・畠・塩浜・山日記」赤松家文書）
○慶長18年（1613）の年貢塩の皆済状により塩田の存在がうかがえる。
○慶安年間（1648 ～ 1651）『慶安年間小豆島地図』に「蒲生」の記載が見える。
○延宝５～７年（1677 ～ 1679）足守藩検地『小豆島全図』の蒲生に塩田記載あり。
○延享年間（1744 ～ 46）池田村蒲生に塩田あり。（「塩浜稼方書上帳」の成立時期）
○『文化年間地図』（1804 ～ 1818）に「蒲生」の記載が見える。
○『天保国絵図』（1835 ～ 1838）「蒲生村」の記載あり。

２．SX1012・1013・1016・1022出土の製塩土器

これらの遺構から出土する製塩土器は、概ね２種類に分けられる。

A種　口縁約15cm前後、深さ不明。器形はラグビーボールを半分に切ったような形状を呈し、口縁は直立するものが基本。底部は尖底である。器壁は約0.2 ～ 0.3cm。量的に少ない。

B種　口径約20cm前後、深さ約20cmで、器形はやや縦に延びた半球状を呈し、口縁は直立するものが基本。ついで内湾するもの・外反するものが認められる。底部は残存しないが丸底に近い形状であると考えられる。器壁は約0.5 ～ 0.7cm。出土量のほぼ主体を占める。

B種の成形

①鉢型の内型に布状の剥離材を当て、粘土を貼り付ける。
（布目の痕跡を持つものと持たないものがある。）
②外面は指などで押さえて整形したまま、型から外す。
③内面を粗くなでる。ナデは板・二枚貝・指などを用いる。口縁端部は顕著なナデは施さない。
④内湾気味のものは口縁を伏せて置いた際の歪みによると考えられる。

内面に布目を留める製塩土器は香川においては主流ではない。高松市檀紙町正箱所在の正箱遺跡SK06において、厚手粗製の尖底深鉢形を呈する製塩土器が出土しており、そのうち１割ほどが内面に布目を留めることが確認できる程度である。その他のものは底部から口縁へ向けて指ナデが施されたもので、布目を留めていたかどうかは不明である。

周辺に目を向けると、福岡市海の中道遺跡において、８～９世紀代に山口県や福岡県周辺に見られる玄界灘式製塩土器と対になると考えられる布目痕を持つ六連島式製塩土器が認められる。海の中道遺跡では玄界灘式製塩土器をⅠ類、焼塩用と推定されるこの土器はⅡ類に分類され、丸底の円筒形を呈し、復元口縁の直径が10 ～ 12cm、器高は30cm程度を測る。北部九州の焼塩土器については先述のものをⅠ類とするほか、円錐形で内面に布目を持つⅡ類ａ、円錐形で内面調整を施し布目が確認できないⅡ類ｂ、丸底の鉢形を呈し内面に布目を持つⅢ類があるとされる（森田　1983）。森田の分類によれば正箱遺跡例はⅡ類であると考えられる。蒲生遺跡SX1012・1013、1016がどの時期に帰属するか定かではないが、古代の遺物を少量含むことから、製塩土器も奈良・平安時代のものであると考えれば概ねつじつまがあう。尖底のA種が７世紀代以降のものと考えられ、丸底のB種は６～７世紀代のものと考えられる。

3．遺構の変遷

弥生時代後期

わずかに製塩土器から当該期の痕跡がうかがえる。Ⅰ区南半中央で検出したSK1028から、ほぼ完形に復元できる備讃Ⅱc式の範疇で考えられる製塩土器が出土しており、製塩関連集落などが周辺に存在した可能性が想定できる。

古墳時代前期

明確にこの時期に帰属する遺構はSK1017のみである。また、西壁内ではほぼ完形に復元できる備讃Ⅳa式の範疇で考えられる製塩土器が出土しており、前代同様、製塩関連集落が周辺に存在した可能性が想定できる。

古墳時代後期

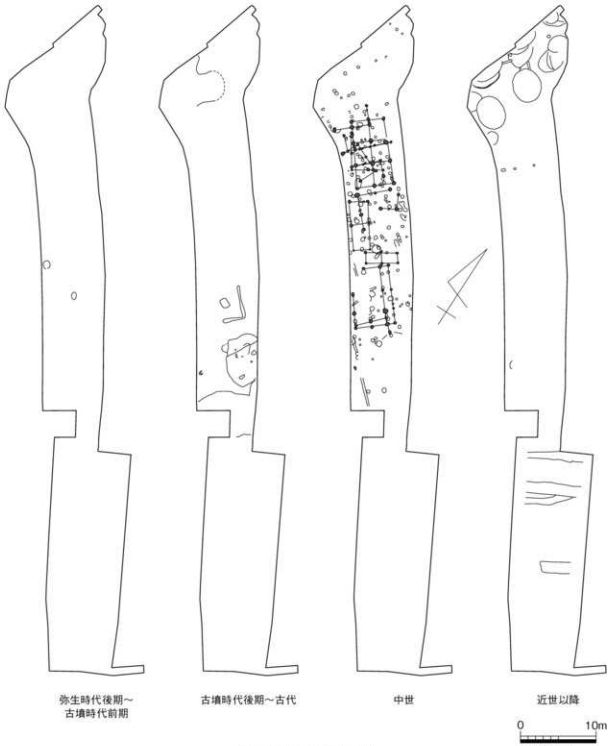
当該期の遺物は比較的目立つ存在で、周辺に集落などが存在した可能性が想定できる。SD1008が当該期の竪穴建物の壁溝であった可能性が考えられるほか、SX1012・1013・1016・1022などで備讃Ⅵ式の製塩土器が多く認められるうえ、6世紀代中頃以降の須恵器が伴う。製塩土器は、小片化が進んだものが多いが、須恵器蓋坏などは比較的大型の破片で残存するほか、小片化は進むものの、接合によりある程度復元可能なものが認められる。遺構の分布はⅠ区北半と南半に大きく分かれ、中央付近では顕著ではない。SX1012・1013と重複する小規模な遺構群の底面が焼土化していることや、埋土に炭化物を多量含むことなどから火を伴う活動を行っていたと考えられるが、積極的に製塩に関する遺構と評価できるものが無く、出土遺物も多量ではないことから、中心域を外れているか活発な活動がなされていなかった可能性が考えられる。

古代

この時期単体での遺構は認められないが、SX1012・1013及び中世以降の遺構や包含層中に当該期の遺物を若干量含む。時期幅は概ね8～10世紀とみられる。また、この頃の初期のものと考えられる備讃Ⅶ式の製塩土器も若干量出土している。なお、遺物の中に畿内系土師器と考えられるものや黒色土器が少量含まれており、想像をたくましくすれば公的施設や有力者の存在を窺い得る資料となる可能性がある。

中世前半

掘立柱建物を含む柱穴群の多くが当該期に帰属すると考えられ、Ⅰ区南端以南を除くほぼ全面で確認できた。各遺構は空隙が大きく重複も顕著ではないことから、中心的な集落ではなかった可能性が高いものの、遺構密度から、当遺跡が主に機能していた画期の一つと考えられる。遺物の出土状況から12世紀代～14世紀代の期間で形成されたものと考えられ、主体は13世紀後半から14世紀頃と考えられる。島内における当該期の集落像が不明瞭であることから明確にはしがたいが、池田湾に面した浜提上に営まれた小集落で、土錘や鉄製釣針が散見されることから漁労が生業の一つであったと考えられる。また、鍛冶炉が1基存在することと、素材として搬入されたと考えられる破損した鉄製品類が認められ



第 105 図　遺構変遷図

ること、鉄滓が周辺の遺構内や包含層から出土することなどから、小規模ながら鍛冶作業がなされていたことがわかる。出土した鉄滓を全て分析することは叶わなかったが、SP1115 出土の椀型滓 1 点と鍛冶炉 SK1026 から出土した鉄滓 3 点についてはいずれも「製鉄原料起源の不純物（砂鉄精錬滓）は十分除去された鉄素材（新鉄）、または廃鉄器を利用して、鍛造鉄器を製作」（本書第 4 章参照）したことを窺わせる。このことは、先述した破損した鉄製品類が、そのほとんどについて本来の形状を窺うのが困

離である状況から見て、当遺跡内で生産された鉄製品の素材として搬入されたとみてよかろう。

また、出土遺物に和泉産と考えられる瓦器椀・小皿や、吉備系土師質土器椀が目立つことから、海浜部に立地するという遺跡の性格上、物流拠点的な性格を併せ持っていた可能性がある。吉備系土師質土器椀を主体とする組成についても、前代には備前国に、後代においては津山藩に帰属した小豆島という立地上、一般的な在り方であったと考えられる。もっとも、今後、蒲生遺跡周辺を含む小豆島における中世期の遺跡の在り方が明確になれば、再評価が必要になる可能性がある。

中世後半

遺構は明確ではないものの、出土遺物に備前焼擂鉢や青磁椀が認められ、その形状から、15世紀～16世紀初頭頃のものがわずかに含まれていることがわかる。この状況から、当該期の遺構も展開していたものと考えられる。

近世

北端部に遺構が集中する。17基の製塩遺構が掘削される。これらは鹹水槽であると考える。遺構の分布から6群に分けられるほか、重複関係から最低4期に区分することができると考えられる。しかし、共伴する遺物からは前後関係を把握することが困難で、重複関係のみが手掛かりとなる。したがって、重複関係にないそれぞれの群の共時性を証明することは困難である。

さて、この鹹水槽の存在から、蒲生遺跡は近世塩田の一角をなしていたと評価できる。但し、採鹹場や釜屋といった主要な施設が確認できておらず、どのような形態の塩田であったか評価できない。小豆島においては延享3（1746）年段階では入浜式塩田が導入されていることが文献からわかるが、蒲生遺跡においてはその痕跡については不明である。候補としては①南側で浜提上を利用した揚浜式塩田、②北側の現状で後背湿地化した低地部分を利用した入浜式塩田が考えられる。②の場合、後背湿地内の排水と海水の引き込みをどのように工夫していたか、現地の状況だけでは判断できない。同じく延享3年成立の『小豆島塩浜之儀二付書上』には①の揚浜を「汲塩浜」として記載され、これが検地帳などに塩田を示す「塩浜」と区別して扱われる。

<引用・参考文献>

中世土器研究会編　1995『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社
香川県塩業組合連合会・愛媛県塩業組合連合会編　1956『香川県愛媛県塩業組合（会社）沿革史資料』
近藤泰夫・松尾新一郎　1948.3「塩田用粘土の研究、鹹水濃の研究」『塩技術研究』2巻3号　日本専売公社
専売局・大蔵省主税局　1906～1915『大日本塩業全書』第1編～第4編
日本専売公社編　1980『日本塩業大系』原始・古代・中世〈稿〉　日本専売公社
徳島文理大学文学部コミュニケーション学科　1998『徳島文理大学文学部共同研究　小豆島』
福岡市教育委員会編　1982『福岡市　海の中道遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第87集　福岡市教育委員会
森田　勉　1983「焼塩壺考」『九州歴史資料館開館10周年記念大宰府古文化論叢』下巻　九州歴史資料館編
横山浩一　1984.3「玄界灘式製塩土器（上）」『九州文化史研究所紀要』第29号〈海ノ中道遺跡をめぐる諸問題〉　九州大学九州文化史研究施設
横山浩一　1985.3「玄界灘式製塩土器（中）」『九州文化史研究所紀要』第30号　九州大学九州文化史研究施設
香川県教育委員会編　1988.3『大浦浜遺跡』瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告V　香川県教育委員会・本州四国連絡橋公団
香川県教育委員会編　1994.3『正箱遺跡・薬王寺遺跡』県道山崎御厩線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　香川県教育委員会
岡畑恵彦　1991『考古学ライブラリー60　備前焼』ニュー・サイエンス社
神戸市立中央図書館　貴重資料デジタルアーカイブス　（http://www.city.kobe.lg.jp/information/institution/institution/library/arc/viewers/025_3.html）
橋詰　茂　1988「中世小豆島における塩の生産」『駒澤史学』39・40号　戦国大名論集III　杉山博先生古希記念号
大山真充　2007「『高松城下図屏風』に描かれた製塩」『香川県歴史博物館　調査研究報告』第3号
山本悦世　1993「吉備系土師器椀の成立と展開」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告第6冊　鹿田遺跡3』岡山大学埋蔵文化財調査センター

第６表　土器観察表

報文番号	図版番号	調査区名	遺構面	遺構名	層位	種類	器種	調整（外）	調整（内）	色調（外）・釉	色調（内）・胎土	石英長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	備考
1		1	1	SK1004		土師質土器	皿	回転ナデ	回転ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	中・並	－	－	－	－	－	－	－	1/8 未満	
2		1	1	SD1011		土師質土器	椀	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y8/3 淡黄	細・並	－	－	－	－	－	－	(6.2)	1/8	古備系土師質土器
3		1	1	SD1011		瓦器	椀	回転ナデ	回転ナデ、ヘラミガキ	N3/ 暗灰	N3/ 暗灰	－	－	－	－	細・少	(15.0)	－	－	1/8	
4		1	1	SD1011		土師質土器	坏	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	－	－	－	－	細・少	－	－	－	1/8 未満	
5		1	1	SD1012		土師器	製塩土器	ナデ、指オサエ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	中・多	細・少	－	細・少	－	(18.6)	－	－	1/8	
6		2	1	SD2001		土師器	坏	回転ナデ後ヘラミガキ	回転ナデ後ヘラミガキ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・並	細・少	－	－	－	(13.2)	－	－	1/8	
7		2	1	SD2002		須恵器	捏鉢	ナデ	ナデ	N7/ 灰白	N7/ 灰白	－	－	－	－	中・少	－	－	－	1/8 未満	
8		2	1	SD2005		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	条痕後ナデ	10YR5/3 にぶい黄褐	7.5YR6/4 にぶい橙	中・並	－	－	細・少	－	(18.0)	－	－	1/8	
9		2	1	SD2002		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	中・並	－	－	細・少	－	(15.4)	－	－	1/8	
10		2	1	SD2002		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	条痕後ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	中・並	－	－	－	－	(18.2)	－	－	1/8	
11		2	1	SD2002		土師器	製塩土器	ハケメ後指オサエ	ナデ、指オサエ	2.5YR5/6 明赤褐	10YR5/1 褐灰	中・多	細・少	細・少	細・多	－	(10.0)	－	－	1/8	
12		2	1	SD2002		土師器	製塩土器	ヨコナデ、指オサエ	ヨコナデ、指オサエ	2.5YR6/8 橙	5YR7/8 橙	粗・多	中・少	細・少	中・多	－	(19.0)	－	－	1/8	
13		1	1	SX1008		土師質土器	椀	ナデ	精緻なナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	7.5YR7/6 橙	中・少	－	－	－	－	(10.4)	－	－	2/8	古備系土師質土器
14		1	1	SX1008	上層 10cm	土師質土器	椀	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/2 灰黄	細・並	－	－	－	－	－	－	(4.5)	底部2/8	
15		1	1	SX1008	上層 10cm	土師質土器	椀	ナデ	精緻なナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	細・少	細・少	－	細・少	－	－	－	(5.2)	5/8	
16		1	1	SX1008		瓦器	小皿	ナデ	ナデ、ヘラミガキ	5Y7/1 灰白	N7/ 灰白	細・多	－	－	－	細・少	(10.8)	－	－	1/8	
17		1	1	SX1008		瓦器	椀	ナデ、指オサエ	ヨコナデ後ヘラミガキ	N4/ 灰	2.5Y6/1 黄灰	－	－	－	－	中・多	(14.0)	－	－	1/8 未満	
18		1	1	SX1008	上層 10cm	瓦器	椀	回転ナデ	ヘラミガキ	5Y7/2 灰白	5Y6/1 灰	細・少	－	－	－	－	－	－	(5.2)	1/8	
19		1	1	SX1008	上層 10cm	瓦質土器	羽釜	ヨコナデ、指オサエ後ナデ	ヨコナデ	5Y5/1 灰	5Y8/2 灰白	細・少	－	－	－	－	－	－	－	1/8 未満	
20		1	1	SX1008	上層 10cm	瓦質土器	羽釜	ナデ、板ナデ	ナデ	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y7/1 灰白	細・多	－	－	－	－	(17.0)	－	－	1/8 未満	
21		1	1	SX1008		土師質土器	足釜	ナデ	ハケメ	7.5YR3/4 暗褐	N3/ 暗灰	粗・多	中・少	－	細・少	－	長 5.1	幅 7.7	厚 4.6	1/8 未満	
22		1	1	SX1008		土師質土器	鍋	ヨコナデ	ヨコナデ、ハケメ	5YR6/6 橙	5YR7/6 橙	中・並	－	－	－	－	－	－	－	1/8 未満	
23		1	1	SX1008	上層 10cm	土師質土器	鍋	ハケメ	板ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	粗・多	－	－	細・少	－	－	－	－	1/8 未満	
24		1	1	SX1008		須恵器	鉢	ヨコナデ	不定方向ナデ後ヨコナデ	2.5Y8/2 灰白	5Y7/1 灰白	－	－	－	－	細・少	(27.6)	－	－	1/8	
25		1	1	SX1008	上層 10cm	須恵器	鉢	回転ナデ、ヘラキリ	回転ナデ	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	－	－	－	－	中・少	－	－	(6.6)	1/8	
26		1	1	SX1008	上層 10cm	土製品	管状土錘	ナデ	－	2.5Y7/2 灰黄	－	細・少	－	－	－	－	長 3.8	幅 1.0	厚 1.0	8/8	
27		1	1	SX1008	21 層	土製品	管状土錘	ナデ	－	10R5/4 赤褐	－	中・並	－	－	－	－	長 3.8	幅 1.35	厚 1.3	8/8	
29	21	1	1	SX1020		土師質土器	椀	指オサエ後ナデ	不定方向の精緻なナデ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	－	－	－	－	細・少	(10.4)	－	4.1	3/8	古備系土師質土器
30		1	1	SX1020		瓦器	椀	ナデ、ヘラミガキ	ナデ、ヘラミガキ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	－	－	－	－	細・少	－	－	－	1/8 未満	
31		1	1	SX1020		瓦器	椀	ヨコナデ後ミガキ	ヨコナデ後ミガキ	10YR8/2 灰白	7.5YR8/2 灰白	－	－	－	－	中・少	－	－	－	1/8 未満	
32		1	1	SX1020		白磁	椀	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉	7.5Y7/1 灰白	7.5Y8/1 灰白	－	－	－	－	細・少	－	－	－	1/8 未満	Ⅳ１－ａ
33		1	1	SX1020		白磁	椀	回転ナデ	回転ナデ	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	－	－	－	－	－	(18.4)	－	－	1/8	Ⅳ１－ａ

挿図番号	図版番号	調査区名	遺構面	遺構名	層位	種類	器種	調整（外）	調整（内）	色調（外）・釉	色調（内）・胎土	石英長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	備考
34	21	1	1	SX1020		瓦質土器	羽釜	ナデ、指オサエ	板ナデ	10YR5/1 褐灰	N4/ 灰	−	−	−	−	細・少	(36.0)	−	−	2/8	
35		1	1	SX1005		瓦器	椀	ナデ、指オサエ	ナデ、ヘラミガキ	N4/ 灰	N6/ 灰	−	−	−	−	細・少	−	−	−	1/8 未満	
36		1	1	SX1005	埋戻し土	土師質土器	足釜	ナデ	−	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y7/2 灰黄	中・並	−	−	−	−	長 6.6	幅 2.1	厚 2.7	1/8 未満	
37		1	1	SX1005	粘土層	土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ、ナデ	指オサエ後ナデ、ナデ	2.5Y6/2 灰黄	10YR5/2 灰黄褐	中・少	−	細・少	細・少	−	−	−	(3.8)	1/8	SX1022 含む
38	27	1	1	SX1005	埋戻し土	土製品	有溝土錘	ナデ	−	5YR7/6 橙	−	中・多	中・多	−	−	−	長 4.1	幅 3.5	厚 3.5	7/8	
39	27	1	1	SX1005	埋戻し土	土製品	管状土錘	ナデ	−	N5/ 灰	−	細・少	−	−	細・少	−	長 5.3	幅 1.2	厚 1.1	8/8	
40		1	1	SX1015		土師質土器	小皿	回転ナデ、回転ヘラキリ後ナデ	回転ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	中・少	−	−	−	−	(8.7)	1.1	(7.6)	1/8	
41		1	1	SX1015	上層 10cm	土師質土器	椀	ナデ	精緻なナデ	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	細・少	−	−	−	−	(10.8)	−	−	1/8	吉備系土師質土器
42		1	1	SX1015		土師質土器	椀	ナデ	精緻なナデ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	細・少	−	−	−	−	(11.6)	−	−	1/8	
43		1	1	SX1015	上層 10cm	瓦器	椀	ヨコナデ、底部指オサエ	ヨコナデ後ヘラミガキ	N5/ 灰	N6/ 灰	−	−	−	−	中・少	(12.0)	−	−	1/8 未満	
44		1	1	SX1015		青磁	椀	回転ナデ	回転ナデ	2.5GY6/1 オリーブ灰	10YR6/1 褐灰	−	−	−	−	細・少	−	−	4.6	8/8	
45		1	1	SX1015	上層 10cm	土師質土器	足釜	ナデ	−	5YR5/3 にぶい赤褐	5Y4/1 灰	中・多	中・多	−	細・少	−	長 7.5	幅 5.2	厚 4.1	1/8 未満	
46		1	1	SX1015		土師質土器	足釜	ナデ	−	10YR6/3 にぶい黄橙	2.5Y6/2 灰黄	中・並	−	−	−	−	長 6.6	幅 2.8	厚 2.5	1/8 未満	
47		1	1	SX1015		土師器	甕	ヨコナデ、指オサエ	板ナデ	10R5/6 赤	7.5YR5/2 灰褐	中・並	細・少	細・少	細・少	−	(36.8)	−	−	1/8	
48		1	1	SX1019		土師器	製塩土器	指オサエ	二枚貝条痕、指オサエ	7.5YR5/2 灰褐	10YR7/4 にぶい黄橙	中・多	中・少	中・少	細・多	−	(18.4)	−	−	1/8	
49	27	1	1	SX1002	上層 10cm	土製品	管状土錘	ナデ、指オサエ	−	2.5Y8/6 灰赤	−	細・少	−	−	−	−	長 4.4	幅 1.1	厚 1.0	8/8	
50		1	1	SX1006		緑釉	椀	回転ナデ	回転ナデ	N8/ 灰白	5Y8/1 灰白	−	−	−	−	細・少	−	−	(3.0)	2/8	
51	27	1	1	SX1006		土製品	有溝土錘	指オサエ、溝部 2mm 程の棒状工具によるナデ	−	7.5YR7/4 にぶい橙	−	細・並	粗・少	−	−	−	長 3.7	幅 2.1	厚 2.0	7/8	
52		1	1	SX1021	粘土直上	瓦器	椀	ヨコナデ、ヘラミガキ	ヨコナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR8/4 浅黄橙	−	−	−	−	細・少	−	−	−	1/8 未満	
53	21	1	1	SX1001	埋戻し土	土師質土器	小皿	回転ナデ、回転ヘラキリ後ナデ	回転ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	細・並	−	−	細・少	−	(7.8)	1.5	(6.4)	3/8	
54		1	1	SX1001	埋戻し土	土師質土器	椀	ヨコナデ、指オサエ後ナデ	精緻なナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR8/4 浅黄橙	細・少	−	−	−	−	(8.7)	−	−	1/8	吉備系土師質土器
55		1	1	SX1001	粘土層	瓦器	小皿	口縁回転ナデ、底部指オサエ	ナデ後ヘラミガキ（マメツ）	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	細・少	細・少	−	−	−	(7.5)	1.5	(6.2)	1/8	
56		1	1	SX1001	埋戻し土	瓦器	小皿	ナデ、指オサエ	ナデ、ヘラミガキ	N5/ 灰	N5/ 灰	細・少	−	−	−	−	(8.2)	−	−	1/8	
57		1	1	SX1001		灰色粘土層直上	施釉陶器	回転ナデ、沈線、施釉	回転ナデ、施釉	5Y6/2 灰オリーブ	2.5Y7/2 灰黄	−	−	−	−	細・少	−	−	−	1/8 未満	
58		1	1	SX1001	埋戻し土	土師器	甕	ナデ、指オサエ、ハケメ	ナデ	10YR5/1 褐灰	2.5Y8/2 灰白	粗・少	−	−	−	−	(27.0)	−	−	1/8	
59		1	1	SX1001	埋戻し土	土師器	製塩土器	調整	ヨコナデ、ナデ	5YR6/4 にぶい橙	5YR7/6 橙	中・少	−	−	−	−	−	−	−	1/8 未満	
60	21	1	1	SX1001		土師器	製塩土器	ナデ、指オサエ	ナデ	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	細・少	−	−	−	−	−	−	1.1	7/8	
61		1	1	SX1010	埋戻し土	瓦器	小皿	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y6/2 灰黄	10YR8/6 黄橙	細・少	−	−	−	−	(7.6)	−	−	1/8	
62		1	1	SX1010	1・2 層	瓦器	椀	回転ナデ	ヘラミガキ	5YR5/3 にぶい赤褐	10YR4/1 褐灰	−	−	−	−	−	(11.3)	−	−	1/8	外面受熱破砕痕
63		1	1	SX1010	1・2 層	白磁	椀	回転ナデ、施釉	施釉	7.5Y7/1 灰白	5Y8/1 灰白	−	−	−	−	細・少	−	−	−	1/8 未満	IV 1 − a
64		1	1	SX1010		須恵器	甕	格子タタキ目	青海波文	N6/ 灰	N6/ 灰	−	−	−	−	細・少	−	−	−	1/8 未満	

報文番号	図版番号	調査区名	遺構面	遺構名	層位	種類	器種	調整（外）	調整（内）	色調（外）・釉	色調（内）・胎土	石英長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存率	備考
65		1	1	SX1010	粘土層直上	備前焼	甕	回転ナデ	回転ナデ	5YR4/2灰褐	7.5YR4/1褐灰	−	−	−	−	−	−	−	−	1/8未満	
66		1	1	SX1011		土師質土器	椀	ナデ	精緻なナデ	2.5Y8/3淡黄	2.5Y8/3淡黄	細・少	細・少	−	−	−	−	−	(4.0)	3/8	
67		1	1	SX1011		瓦器	椀	ナデ	ナデ後ヘラミガキ	5Y5/1灰	5Y5/1灰	−	−	−	−	細・少	(15.6)	−	−	1/8	
68		1	1	SX1011		備前焼	擂鉢	回転ナデ	回転ナデ、指オサエ	5YR6/4にぶい橙	5YR6/4にぶい橙	−	−	−	−	細・少	−	−	−	1/8未満	
69		1	2	SK1006		土師質土器	小皿	ナデ	精緻なナデ	2.5Y8/3淡黄	2.5Y8/3淡黄	細・多	細・少	−	−	−	(10.4)	−	−	1/8	
70		1	2	SK1006		土師質土器	小皿	回転ナデ、回転ヘラキリ	回転ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	細・並	−	−	−	−	−	−	(5.7)	1/8	
71		1	2	SK1006		土師質土器	椀	回転ナデ	精緻なナデ後ヘラミガキ	10YR8/4浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	中・少	−	−	−	−	−	−	(8.6)	2/8	
72		1	2	SK1006		瓦器	椀	回転ナデ、体部指オサエ後ナデ	ヘラミガキ	N4/灰	N4/灰	細・並	−	−	−	−	−	−	−	1/8未満	
73		1	2	SK1006		瓦器	椀	回転ナデ、体部下半指オサエ	ナデ後ヘラミガキ	5Y4/1灰	5Y5/1灰	細・並	−	−	−	−	(11.4)	−	−	1/8未満	
74		1	2	SK1006		瓦器	椀	回転ナデ	ヘラミガキ	5Y5/1灰	5Y5/1灰	−	−	−	−	−	−	−	(4.0)	1/8	
75		1	2	SK1006		瓦器	椀	回転ナデ	ナデ後ヘラミガキ	5Y5/1灰	5Y5/1灰	−	−	−	−	細・少	−	−	(4.2)	1/8	
76		1	2	SK1006		須恵器	椀	回転ナデ	回転ナデ	5Y8/1灰白	5Y8/1灰白	−	−	−	−	細・少	−	−	−	1/8未満	
77		1	2	SK1006		須恵器	坏	回転ナデ	回転ナデ	N5/灰	N5/灰	−	−	−	−	細・少	(14.8)	−	−	1/8未満	
78		1	2	SK1006		須恵器	羽釜	板ナデ、ハケメ	ハケメ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	細・並	−	−	−	−	−	−	−	1/8未満	
79		1	2	SK1006		土師質土器	足釜	ナデ、指オサエ	−	5YR5/4にぶい赤褐	5YR4/4にぶい赤褐	中・並	中・少	−	−	−	長4.4	幅2.5	厚1.8	1/8未満	
80		1	2	SK1006		土師質土器	鍋	−	ナデ、板ナデ	5YR4/1褐灰	5YR4/2灰褐	中・多	細・少	−	細・多	−	(40.0)	−	−	1/8未満	
81		1	2	SK1006		土製品	管状土錘	ナデ	−	10YR6/2灰黄褐	−	細・少	−	−	−	−	長3.5	幅1.1	厚1.1	5/8	
82		1	2	SK1006		土製品	管状土錘	ナデ	−	2.5Y6/3にぶい黄	−	細・少	−	−	−	−	長1.9	幅0.7	厚0.7	3/8	
85		1	2	SK1013		土師質土器	椀	精緻なナデ	ナデ、下半指オサエ	10YR7/2にぶい黄橙	10YR8/2灰白	細・並	−	−	−	−	−	−	−	1/8未満	吉備系土師質土器
87	21	1	2	SK1017		土師器	鉢	タタキ目	板ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	中・多	細・少	−	細・多	−	(12.2)	5.0	(2.0)	3/8	
88		1	2	SK1020		土師器	甕	板ナデ、指ナデ	板ナデ	7.5YR6/6橙	7.5YR7/6橙	中・多	−	中・少	細・少	−	(9.6)	−	−	1/8	
89		1	2	SK1020		土師器	甕	ヨコナデ	ヨコナデ、指オサエ後ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/6明黄褐	中・少	−	−	−	−	−	−	−	1/8未満	
90		1	2	SK1020		土師器	製塩土器	タタキ目	ナデ	7.5YR5/3にぶい褐	10YR5/3にぶい黄褐	中・並	−	−	−	−	−	−	−	1/8未満	内面受熱破砕痕有り
91		1	2	SK1020		土師器	製塩土器	タタキ	ナデ	5YR6/6橙	10YR6/4にぶい黄橙	中・並	中・少	−	−	−	−	−	−	1/8未満	
92		1	2	SK1020		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	指オサエ後ナデ	7.5YR5/3にぶい褐	7.5YR5/2灰褐	中・並	−	−	−	−	−	−	4.2	6/8	
93		1	2	SK1020		土師器	製塩土器	指オサエ	指オサエ	5YR5/6明赤褐	5YR5/6明赤褐	細・少	−	−	−	−	−	−	(3.2)	1/8	
94		1	2	SK1022		土師器	製塩土器	指オサエ	ナデ（板ナデ?）	10R5/6赤	7.5YR4/3褐	中・多	−	−	−	−	−	−	−	1/8	
95		1	2	SK1023		土師器	製塩土器	ナデ	板ナデ	2.5Y4/2暗灰黄	2.5Y4/2暗灰黄	細・少	細・少	−	−	−	−	−	−	1/8未満	
96		1	2	SK1023		−	焼土塊			2.5YR6/8橙	2.5YR6/8橙	細・少	−	−	−	−	長2.1	幅1.8	厚0.7	1/8未満	炉壁か壁土？スサを多く含む
97		1	2	SK1025		土師器	製塩土器	指オサエ、後ナデ	ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	10YR7/4にぶい黄橙	中・多	−	−	−	−	−	−	−	1/8未満	器表がかなり荒れる、使用痕？
98		1	2	SK1026		瓦器	小皿	回転ナデ	回転ナデ	N4/灰	N4/灰	−	−	−	−	細・少	(9.9)	1.2	(7.3)	1/8	
99		1	2	SK1026		土師器	小皿	ナデ	ナデ後ヘラミガキ	5Y5/1灰	5Y6/1灰	−	−	−	−	細・少	−	−	−	1/8未満	
100		1	2	SK1027		土師質土器	椀	回転ナデ	精緻なナデ	10YR8/4浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	細・少	−	−	−	−	−	−	(5.0)	1/8	吉備系土師質土器

挿図番号	図版番号	調査区名	遺構面	遺構名	層位	種類	器種	調整（外）	調整（内）	色調（外）・釉	色調（内）・胎土	石英長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	備考
101		1	2	SK1027		須恵器	壺坏	回転ヘラケズリ，回転ナデ	回転ナデ	10Y5/1灰	10Y5/1灰	−	−	−	−	細・少	(13.8)	−	−	1/8	外面口縁部に煤過痕有り
102		1	2	SK1027		瓦器	羽釜	ナデ	−	N5/灰	−	−	−	−	−	中・少	−	−	−	1/8未満	
103		1	2	SK1027		土師器	甕	指オサエ，後ナデ	板ナデ	2.5YR5/6明赤褐	5YR6/6橙	中・多	−	−	−	−	−	−	−	1/8未満	
104		1	2	SK1027		土製品	管状土錘	ナデ	ナデ	10YR6/6明黄褐	−	細・少	−	−	細・少	−	長 3.2	幅 1.2	厚 1.1	5/8	
105		1	2	SK1028		須恵器	甕	タタキ目後カキ目	タタキ目	5Y6/2灰オリーブ	5Y6/2灰オリーブ	−	−	−	細・少	−	−	−	−	1/8未満	
106	21	1	2	SK1028		弥生土器	製塩土器	タタキ目後ヘラケズリ，ナデ	板ナデ後指オサエ，ナデ	2.5Y7/3浅黄	2.5Y6/3にぶい黄	中・多	−	−	−	−	9.1	17.8	4.3	5/8	
107		1	2	SD1004		須恵器	坏	回転ナデ	回転ナデ	7.5Y8/1灰白	7.5Y7/1灰白	−	−	−	−	細・少	(6.8)	−	−	1/8	
109		1	2	SD1006		土師器	製塩土器	指オサエ，ナデ	ナデ	2.5Y6/3にぶい黄	2.5Y6/3にぶい黄	中・少	中・少	−	−	−	−	−	−	1/8未満	
110		1	2	SD1007		瓦器	椀	回転ナデ，貼付高台	ナデ，ヘラミガキ	5Y5/1灰	2.5Y6/3にぶい黄	−	−	−	−	細・少	−	−	(5.3)	2/8	
111		1	2	SD1007		須恵器	坏	回転ナデ，底部ヘラキリ後ナデ	回転ナデ	5Y8/2灰白	5Y8/2灰白	−	−	−	−	細・少	(13.6)	3.1	(9.8)	1/8	
112		1	2	SD1009		土師質土器	坏	回転ナデ，器表調落有り	回転ナデ	10YR8/6黄橙	10YR8/6黄橙	細・少	−	−	−	−	(12.6)	−	−	1/8	
113		1	2	SD1009		土師質土器	坏	回転ナデ	回転ナデ	10YR7/6明黄褐	10YR7/6明黄褐	細・少	−	−	−	−	−	−	−	1/8未満	
114		1	2	SD1009		瓦器	椀	回転ナデ，口縁端部ヘラミガキ	回転ナデ	5Y5/1灰	5Y5/1灰	−	−	−	−	細・少	(6.4)	−	−	1/8未満	
115		1	2	SD1009		瓦器	椀	回転ナデ	ヘラミガキ	5Y5/1灰	5Y7/1灰白	−	−	−	−	細・少	−	−	−	1/8未満	
116		1	2	SD1009		瓦器	椀	回転ナデ，ヘラミガキ	回転ナデ	5Y6/1灰	5Y5/1灰	−	−	−	−	細・少	−	−	−	1/8未満	
117		1	2	SD1009		瓦器	椀	回転ナデ，ヘラミガキ	回転ナデ，ヘラミガキ	N3/暗灰	5Y7/1灰白	−	−	−	−	細・少	−	−	−	1/8未満	
118		1	2	SD1010		土師質土器	小皿	回転ナデ，回転ヘラキリ	回転ナデ	10YR5/4にぶい黄褐	10YR5/4にぶい黄褐	中・少	−	−	−	−	−	−	−	1/8未満	
119		1	2	SD1010		瓦器	小皿	回転ナデ，指オサエ	ナデ後ヘラミガキ	5Y5/1灰	5Y5/1灰	−	−	−	−	細・少	(8.0)	−	−	1/8	
120		1	2	SD1010		瓦器	小皿	回転ナデ，指オサエ	回転ナデ，ヘラミガキ（マメツ）	10YR6/3にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	−	−	−	−	−	(8.2)	−	−	1/8	
121		1	2	SD1010		瓦器	椀	回転ナデ	回転ナデ	N4/灰	N4/灰	−	−	−	−	細・少	−	−	−	1/8未満	
122		1	2	SD1010		瓦器	椀	ナデ	ナデ後ヘラミガキ（マメツ）	2.5Y6/3にぶい黄	2.5Y6/3にぶい黄	−	−	−	−	細・少	(4.0)	−	−	1/8	
123		1	2	SD1010		青磁	椀	施釉	回転ナデ	7.5Y6/2灰オリーブ	7.5Y7/1灰白	−	−	−	−	細・少	−	−	−	1/8未満	
124		1	2	SD1010		土師質土器	鍋	ハケメ，タタキ	ハケメ	10YR7/4にぶい黄橙	2.5Y7/4浅黄	−	−	−	−	−	−	−	−	1/8未満	
125		1	2	SD1010		土師質土器	甕	指オサエ後ナデ	板ナデ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	中・少	−	−	−	−	−	−	−	1/8未満	
126		1	2	SP1050（SB1001）		土師質土器	小皿	体部回転ナデ	ナデ	5Y5/1灰	2.5Y7/2灰黄	細・並	−	−	−	−	(6.8)	−	(5.6)	2/8	
127		1	2	SP1050（SB1001）		土師質土器	小皿	回転ナデ，回転ヘラキリ	回転ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	細・並	−	−	−	−	(8.1)	−	(7.4)	1/8	
128	21	1	2	SP1008（SB1001）		土師質土器	坏	ナデ，板状圧痕	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	−	−	−	−	−	(7.8)	2.6	(5.8)	2/8	
129		1	2	SP1008（SB1001）		土師質土器	椀	ナデ	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	細・少	−	−	−	−	(10.2)	−	−	1/8	
130		1	2	SP1229（SB1001）		土師質土器	椀	ナデ	精緻なナデ	10YR8/3浅黄橙	2.5Y8/3淡黄	細・並	−	−	−	−	(11.2)	−	−	1/8	
131		1	2	SP1050（SB1001）		土師質土器	椀	回転ナデ	回転ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	7.5YR7/6橙	細・並	−	−	−	−	(11.6)	−	−	1/8	

報文番号	図版番号	調査区名	遺構面	遺構名	層位	種類	器種	調整（外）	調整（内）	色調（外）・釉	色調（内）・胎土	石英長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	備考
132		1	2	SP1021（SB1001）		土師質土器	椀	ナデ	精緻なナデ	2.5Y7/4 浅黄	2.5Y7/4 浅黄	細・少	－	－	－	－	(12.0)	－	－	1/8	古備系土師質土器
133		1	2	SP1039（SB1001）		土師質土器	椀	ナデ、指オサエ後ナデ	ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	細・少	－	－	－	－	－	－	(4.8)	1/8	
134		1	2	SP1021（SB1001）		土師質土器	椀	回転ナデ	精緻なナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	2.5Y7/3 浅黄	中・少	－	－	－	－	－	－	(3.8)	1/8	
135		1	2	SP1050（SB1001）		土師質土器	椀	ヨコナデ、貼付高台	ヨコナデ、見込み重ね焼き痕	2.5Y8/2 灰白	10YR8/4 浅黄橙	中・少	－	－	－	－	－	－	(4.2)	4/8	
136		1	2	SP1207（SB1001）		土師質土器	椀	回転ナデ、体部指オサエ	精緻なナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	細・並	－	－	－	－	－	－	(5.0)	4/8	古備系土師質土器
137		1	2	SP1006（SB1001）		土師質土器	椀	回転ナデ	回転ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/3 浅黄橙	細・少	－	－	－	－	－	－	－	3/8	古備系土師質土器？
138	21	1	2	SP1229（SB1001）		瓦器	椀	ナデ、指オサエ	ナデ、ヘラミガキ	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	－	－	－	－	細・少	(11.2)	－	(3.0)	3/8	
139		1	2	SP1021（SB1001）		瓦器	椀	ナデ、指オサエ	ナデ、ヘラミガキ	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	細・少	－	－	－	中・多	(12.2)	－	－	1/8	
140	22	1	2	SP1006（SB1001）		瓦器	椀	指オサエ後ナデ、ナデ、部分ヘラミガキ有り	ナデ後ヘラミガキ	7.5Y5/1 灰	5Y5/1 灰	細・少	－	－	－	－	14.5	5.0	5.0	3/8	
141		1	2	SP1008（SB1001）		瓦器	椀	ヨコナデ、指オサエ	ヨコナデ、ヘラミガキ	N4/ 灰	N5/ 灰	－	－	－	－	中・少	(11.4)	－	－	1/8	
142		1	2	SP1206（SB1001）		瓦器	椀	ヨコナデ、指オサエ後ナデ	ヨコナデ	N4/ 灰	10Y4/1 灰	細・並	－	－	－	－	(14.8)	－	－	1/8	
143		1	2	SP1008（SB1001）		瓦器	椀	ナデ、ヘラミガキ	ナデ	N4/ 灰	N4/ 灰	－	－	－	－	細・少	－	－	(5.2)	1/8	
144		1	2	SP1008（SB1001）		青磁	皿	回転ヘラケズリ	施釉	7.5Y7/2 灰白	7.5Y7/1 灰白	－	－	－	－	細・並	－	－	(4.2)	3/8	
145		1	2	SP1021（SB1001）		瓦質土器	羽釜	ヨコナデ	ヨコナデ	5Y6/1 灰	5Y4/1 灰	－	－	－	－	中・少	－	－	－	1/8 未満	
146		1	2	SP1207（SB1001）		土師質土器	鍋	指オサエ後ナデ	板ナデ後ヨコナデ	10YR5/3 にぶい黄褐	7.5YR7/6 橙	細・少	－	－	細・少	－	－	－	－	1/8 未満	
147		1	2	SP1216（SB1001）		土師質土器	鍋	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	板ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	中・並	－	－	－	－	－	－	－	1/8 未満	
148		1	2	SP1209（SB1002）		土師質土器	小皿	回転ナデ、低部ヘラキリ後ナデ	回転ナデ、低部ヘラキリ後ナデ	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	細・少	－	－	－	－	(8.0)	－	－	1/8	
149		1	2	SP1209（SB1002）		土師質土器	椀	貼付高台、ナデ、マメツ	精緻なナデ、マメツ	2.5Y8/2 灰白	2.5Y5/2 暗灰黄	中・多	－	－	－	－	－	－	(4.5)	4/8	古備系土師質土器
150		1	2	SP1265（SB1002）		瓦器	椀	指オサエ後ヨコナデ、受熱潤離痕	ヨコナデ、ヘラミガキ、受熱潤離痕	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y4/2 暗灰黄	－	－	－	－	中・少	(10.6)	－	－	1/8	
151	22	1	2	SP1265（SB1002）		瓦器	椀	ナデ、（剥離）	ナデ後ヘラミガキ	10YR7/2 にぶい黄橙	10YR8/2 灰白	粗・多	細・多	－	－	－	11.0	2.9	(3.2)	8/8	
152		1	2	SP1219（SB1002）		白磁	椀	ナデ、施釉	ナデ、施釉	2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/3 淡黄	－	－	－	－	細・少	－	－	－	1/8 未満	V － 3a か？
153		1	2	SP1209（SB1002）		常滑	甕	板ナデ	ナデ	5YR4/4 にぶい赤褐	2.5Y5/2 暗灰黄	－	－	－	－	中・多	－	－	－	1/8 未満	
154		1	2	SP1233（SB1005）		土師質土器	椀	不定方向の指オサエ、指オサエ	精緻なナデ	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y8/2 灰白	細・少	－	－	－	－	(11.4)	－	－	1/8	布、皮などによるナデか　古備系
155		1	2	SP1054（SB1006）		土師質土器	椀	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y8/2 灰白	細・少	－	－	－	－	(10.6)	－	－	1/8	

報文番号	図版番号	調査区名	遺構面	遺構名	層位	種類	器種	調整（外）	調整（内）	色調（外）・釉	色調（内）・胎土	石英長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	備考
156		1	2	SP1082（SB1007）		瓦器	小皿	ヨコナデ、底部指オサエ後ナデ	ナデ後ヘラミガキ	5Y5/1灰	7.5Y5/1灰	細・少	–	–	–	–	(8.6)	–	–	1/8	
157	22	1	2	SP1119（SB1009）		土師質土器	小皿	回転ナデ、回転ヘラキリ後板状圧痕	回転ナデ後見込み部ヨコナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	細・並	–	–	–	–	7.4	1.4	5.4	5/8	
158		1	2	SP1109（SB1009）		瓦器	椀	ヨコナデ後ヘラミガキ	ヘラミガキ	N5/灰	N4/灰	細・少	–	–	–	–	(15.9)	–	–	1/8	
159		1	2	SP1109（SB1009）		土師質土器	足釜	ナデ、指オサエ	–	10YR4/3にぶい黄褐	10YR6/3にぶい黄橙	中・多	–	–	–	–	長 5.0	幅 3.2	厚 1.6	1/8 未満	
160		1	2	SP1181（SB1010）		土師質土器	小皿	回転ナデ、回転ヘラキリ	回転ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	細・少	–	–	–	–	(6.7)	1.1	(5.0)	1/8	
161		1	2	SP1166（SB1010）		瓦器	椀	回転ナデ	ヘラミガキ	5Y4/1灰	2.5Y5/1黄灰	細・少	–	–	–	–	(9.5)	–	–	1/8	
162		1	2	SP1146（SB1010）		瓦器	椀	ナデ	ナデ、ヘラミガキ	N4/灰	N4/灰	–	–	–	–	細・少	–	–	(4.6)	1/8	
163		1	2	SP1131（SB1010）		須恵器	坏	回転ナデ	回転ナデ	5Y7/2灰白	5Y7/2灰白	–	–	–	–	中・少	(13.0)	–	–	1/8	
164		1	2	SP1132（SB1010）		須恵器	捏鉢	ヨコナデ	ヨコナデ	N6/灰	N6/灰	–	–	–	–	細・多	–	–	–	1/8	
165		1	2	SP1135（SB1010）		陶器	壺	ヨコナデ	ヨコナデ	5Y4/1灰	5Y3/1オリーブ黒	–	–	–	–	細・少	(9.0)	–	–	1/8	
166	22	1	2	SP1146（SB1010）		土師器	高坏	マメツ	板ナデ、ヘラミガキ	2.5YR5/6明赤褐	2.5Y6/6明黄褐	粗・多	粗・多	–	細・多	–	–	–	–	4/8	
167		1	2	SP1181（SB1010）		須恵器	甕	タタキ目後ナデ	ヨコナデ、青海波文	2.5Y6/1黄灰	N7/灰白	–	–	–	–	細・少	–	–	–	1/8 未満	
168		1	2	SP1152（SB1010）		須恵器	甕	タタキ目後ナデ	ヨコナデ、青海波文	7.5Y5/1灰	7.5Y5/1灰	–	–	–	–	細・少	–	–	–	1/8 未満	
169		1	2	SP1190（SB1011）		土製品	管状土錘	ナデ	–	10YR5/4にぶい黄褐	–	細・少	–	–	–	–	長 3.8	幅 0.9	厚 1.0	7/8	
171		1	2	SP1040（SB1013）		土師質土器	椀	ヨコナデ、体部下半ケズリ	精緻なナデ	10YR7/6明黄褐	10YR7/6明黄褐	細・多	細・少	–	–	–	(10.8)	–	–	1/8	古備系土師質土器
172		1	2	SP1040（SB1013）		土師質土器	椀	指オサエ後ヨコナデ	精緻なナデ（被熱によるはじけ多い）	10YR7/4にぶい黄橙	2.5Y6/2灰黄	細・少	–	–	–	–	(11.5)	–	–	1/8	
173		1	2	SP1040（SB1013）		土師質土器	椀	指オサエ後指ナデ	精緻なナデ	10YR8/3浅黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	中・少	–	–	–	–	(12.2)	–	–	2/8	古備系土師質土器
174		1	2	SP1017（SB1013）		土師質土器	足釜	ナデ	–	2.5Y6/2灰黄	2.5Y6/3にぶい黄	細・少	–	–	–	–	長 3.8	幅 1.3	厚 1.4	1/8 未満	
177		1	2	SP1028		瓦器	椀	ヨコナデ、指オサエ後ナデ	ヘラミガキ	2.5Y6/2灰黄	5Y5/1灰	細・少	–	–	–	–	(13.1)	–	(5.0)	1/8	右回上がりの粘土ひも接合痕有り
178		1	2	SP1029		土師質土器	足釜	指オサエ、ナデ	ハケメ	10YR6/3にぶい黄橙	N3/暗灰	粗・多	–	–	細・少	–	長 4.5	幅 6.3	–	1/8 未満	
179		1	2	SP1038		瓦器	小皿	ナデ	ヘラミガキ	5Y6/1灰	5Y7/1灰白	–	–	–	–	細・少	–	–	(6.4)	1/8	
180		1	2	SP1041		土師質土器	小皿	回転ナデ、底部不定方向ナデ	回転ナデ	5YR6/8橙	5YR6/8橙	細・少	細・少	–	–	–	(8.0)	–	–	2/8	
181		1	2	SP1044		土師質土器	椀	ヨコナデ	精緻なナデ	2.5Y7/4浅黄	2.5Y7/2灰黄	細・少	–	–	–	–	–	–	(4.6)	1/8	太い単位のヘラミガキ？内傾系？
182		1	2	SP1051		須恵器	捏鉢	底部切り離し後不定方向ナデ、体部ヨコナデ	ナデ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y7/2灰黄	–	–	–	–	–	–	–	(9.0)	2/8	

報文番号	図版番号	調査区名	遺構面	遺構名	層位	種類	器種	調整（外）	調整（内）	色調（外）・釉	色調（内）・胎土	石英長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	備考
183		1	2	SP1051		土製品	管状土錘	ナデ	–	5Y4/1 灰	–	–	–	–	–	–	長 3.8	幅 0.9	厚 0.9	7/8	
184		1	2	SP1052		土師質土器	椀	ヨコナデ、指オサエ	精緻なナデ	2.5Y7/4 浅黄	10YR6/4 にぶい黄橙	細・少	–	–	–	–	(10.0)	–	–	1/8	
185		1	2	SP1059		瓦器	小皿	体部下半指オサエ後ヨコナデ	回転ナデ、ヘラミガキ	N3/ 暗灰	N4/ 灰	–	–	–	–	細・少	(8.8)	1.8	–	1/8	
186		1	2	SP1067		土師質土器	坏	回転ナデ、回転ヘラキリ	回転ナデ	7.5YR8/6 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	細・多	–	–	細・少	–	–	–	(8.0)	1/8	
187		1	2	SP1070		土師器	坏	ナデ	ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/4 浅黄橙	中・少	–	–	–	–	(12.6)	2.7	(5.5)	1/8	
188		1	2	SP1070		土製品	管状土錘	ナデ	–	2.5Y5/1 黄灰	–	細・多	–	細・少	細・少	–	長 4.1	幅 0.9	厚 1.0	7/8	
189	22	1	2	SP1072		土師質土器	坏	ナデ、底部指オサエ後ナデ	ナデ	10YR8/4 浅黄橙	2.5Y7/3 浅黄	細・並	–	–	–	–	11.1	3.7	6.1	5/8	
190		1	2	SP1072		土師器	椀	ナデ	ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	中・多	–	–	–	–	(11.8)	–	–	1/8	
191		1	2	SP1072		土製品	管状土錘	ナデ	–	2.5Y7/3 浅黄	–	–	–	–	–	–	長 3.4	幅 1.0	厚 0.9	6/8	
192		1	2	SP1083		瓦器	椀	ヨコナデ	ナデ後ヘラミガキ	N6/ 灰	N6/ 灰	–	–	–	–	–	–	–	(3.8)	2/8	
193		1	2	SP1086		青磁	椀	削り出し高台、施釉	施釉、蛇の目釉剥ぎ	7.5Y7/1 灰白	2.5Y5/1 黄灰	–	–	–	–	中・少	–	–	5.6	4/8	
194		1	2	SP1090		須恵器	甕	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y5/1 黄灰	–	–	–	–	中・多	–	–	–	1/8 未満	
195		1	2	SP1096		土師質土器	椀	回転ナデ	ナデ	2.5Y7/4 浅黄	2.5Y8/3 淡黄	細・並	–	–	–	–	–	–	(6.0)	1/8	
196		1	2	SP1098		土師質土器	小皿	回転ナデ	回転ナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR8/4 浅黄橙	細・並	–	–	–	–	(8.2)	1.4	(7.0)	1/8	
197		1	2	SP1104		瓦器	小皿	ナデ、ヘラミガキ（マメツ）	ナデ、ヘラミガキ（マメツ）	N5/ 灰	N7/ 灰白	–	–	–	–	細・少	(10.0)	–	–	1/8	
198		1	2	SP1104		土製品	管状土錘	ナデ	–	2.5Y5/3 黄褐	–	細・少	–	–	–	–	長 4.8	幅 1.1	厚 1.1	7/8	
199		1	2	SP1108		土師質土器	椀	指オサエ	精緻なナデ	10YR7/4 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	細・少	–	–	–	–	(11.4)	–	–	2/8	
200		1	2	SP1121		須恵器	壺坏	回転ナデ	回転ナデ	N6/ 灰	N6/ 灰	–	–	–	–	–	(15.0)	–	–	1/8	
201		1	2	SP1121		土師器	製塩土器	指オサエ、マメツ	指オサエ後ナデ後板ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	中・多	中・少	細・少	細・少	–	–	–	–	1/8 未満	
202		1	2	SP1124		土製品	管状土錘	ナデ	–	10YR6/3 にぶい黄橙	–	細・少	–	細・少	–	–	長 4.4	幅 1.0	厚 1.9	7/8	
203	22	1	2	SP1133		–	砂壁	指オサエ	–	10YR3/1 黒褐	–	中・多	–	–	–	–	長 5.3	幅 4.9	厚 4.3	1/8 未満	
204		1	2	SP1133		土師器	製塩土器	ナデ、指オサエ	ナデ、指オサエ	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	中・多	–	–	–	–	–	–	(2.6)	2/8	
205		1	2	SP1149		土師器	鍋	ヨコナデ、ハケメ後ナデ	ヨコナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR6/4 にぶい黄橙	中・少	–	–	–	–	–	–	–	1/8 未満	
207		1	2	SP1159		瓦器	椀	ヨコナデ	ヘラミガキ	N5/ 灰	N3/ 暗灰	–	–	–	–	細・少	–	–	(4.1)	2/8	
208		1	2	SP1163		須恵器	甕	カキ目後タタキ目	青海波文	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	–	–	–	–	細・少	–	–	–	1/8 未満	
209		1	2	SP1174		土師器	椀	ナデ	精緻なナデ	2.5Y7/4 浅黄	10YR7/3 にぶい黄橙	–	–	–	–	細・少	(11.9)	–	–	1/8	
211		1	2	SP1191		土師質土器	椀	ヨコナデ	精緻なナデ（受け溝）	2.5Y7/3 浅黄	2.5Y7/2 灰黄	細・並	–	–	–	–	–	–	(4.8)	4/8	
212		1	2	SP1196		瓦器	椀	ナデ、ヘラミガキ	ナデ、指オサエ	N5/ 灰	N5/ 灰	–	–	–	–	細・少	(11.9)	2.5	(3.0)	1/8	
213		1	2	SP1198		土師質土器	坏	ナデ	ナデ	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	細・少	中・少	–	–	–	(9.0)	–	–	2/8	
214		1	2	SP1198		須恵器	甕	タタキ目後指オサエ、ナデ	板ナデ	5Y6/1 灰	5Y7/1 灰白	–	–	–	–	中・少	–	–	(17)	1/8	
215		1	2	SP1201（SB10002）		土製品	管状土錘	ナデ	–	7.5YR5/4 にぶい褐	–	細・少	–	–	–	–	長 4.1	幅 1.4	厚 1.4	8/8	
216		1	2	SP1204		土師質土器	鍋	ヨコナデ、ナデ	ヨコナデ、板ナデ	5YR5/2 灰褐	2.5YR3/2 暗赤褐										
218		1	2	SP1208		青磁	椀	ヨコナデ、施釉	ヨコナデ、施釉、劃花文？	2.5G7/1 明オリーブ灰	N8/ 灰白	–	–	–	–	細・少	(17.8)	–	–	1/8 未満	竜泉窯系 I 2a
219		1	2	SP1208		土師質土器	鍋	指オサエ後ハケメ	ハケメ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	–	–	–	–	–	–	–	–	1/8 未満	
220		1	2	SP1210		瓦器	椀	ヨコナデ、指オサエ	板ナデ後ヘラミガキ後ヨコナデ	N4/ 灰	N5/ 灰	–	–	–	–	中・少	(12.0)	–	–	1/8	

挿図番号	図版番号	調査区名	遺構面	遺構名	層位	種類	器種	調整（外）	調整（内）	色調（外）・釉	色調（内）・胎土	石英長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	備考
221		1	2	SP1212		須恵器	転用円盤	ナデ	ナデ	5Y6/1 灰	N6/ 灰	−	−	−	−	中・少	長 1.9	幅 2.0	厚 0.4	7/8	
222		1	2	SP1217		須恵器	蓋	回転ナデ	回転ナデ	5YR5/3 にぶい赤褐	2.5YR6/4 にぶい橙	−	−	−	−	中・多	−	−	−	1/8 未満	
223		1	2	SP1217		土師器	製塩土器	ナデ	ナデ	2.5YR5/6 明赤褐	10R5/6 赤	中・多	−	細・少	細・少	−	−	−	2.0	8/8	備讃Ⅳ c
224		1	2	SP1230		土師質土器	小皿	回転ナデ	回転ナデ	5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	細・少	細・少	−	−	−	(8.6)	−	−	1/8	
225	27	1	2	SP1230		土製品	管状土錘	指オサエ、ナデ	−	5YR5/4 にぶい赤褐	−	粗・並	−	−	細・並	−	長 9.4	幅 3.4	厚 3.4	7/8	
226		1	2	SP1245		青磁	椀	回転ナデ、施釉	回転ナデ、施釉	2.5GY6/1 オリーブ灰	N5/ 灰	−	−	−	−	−	−	−	−	1/8 未満	
227		1	2	SP1246		施釉陶器	壺	回転ナデ	回転ナデ	7.5Y5/2 灰オリーブ	7.5YR5/3 にぶい褐	−	−	−	−	−	(9.4)	−	−	1/8	
228		1	2	SP1255		土師質土器	小皿	ヨコナデ、底部指オサエ	ヨコナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	中・並	−	−	−	−	(8.9)	1.2	(5.1)	1/8 未満	
229		1	2	SP1257		瓦器	椀	ヨコナデ	ヘラミガキ	7.5Y5/1 灰	7.5Y5/1 灰	細・少	−	−	−	−	(13.0)	−	−	1/8	
230		1	2	SP1257		土製品	棒状土錘	ナデ	−	2.5Y5/1 黄灰	−	細・多	−	−	−	−	長 4.4	幅 1.4	厚 1.3	7/8	
232		1	2	SP1264		土師質土器	椀	口縁ヨコナデ、体部指オサエ後ヨコナデ	精緻なナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	細・少	細・少	−	−	−	(12.6)	−	−	1/8 未満	古備系土師質土器
233		1	2	SX1012・SX1013		土師質土器	皿	ヨコナデ	ヨコナデ、指オサエ	10YR8/2 灰白	5YR7/6 橙	中・多	細・並	−	−	−	−	−	−	1/8 未満	
234		1	2	SX1012・SX1013		土師質土器	坏	ナデ	ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	5YR5/4 にぶい赤褐	細・多	細・少	−	細・少	−	(12.2)	−	−	3/8	
235	22	1	2	SX1012・SX1013		土師質土器	坏	回転ナデ、ナデ	回転ナデ	2.5Y5/2 暗灰黄	N3/ 暗灰	細・並	−	−	−	−	(12.1)	3.6	(7.4)	3/8	黒色土器 B 類の可能性有り
236		1	2	SX1012・SX1013		須恵器	坏蓋	回転ナデ、ヘラケズリ	回転ナデ	2.5YR6/6 橙	2.5YR5/6 明赤褐	−	−	−	−	中・少	(13.0)	−	−	1/8	
237		1	2	SX1012・SX1013		須恵器	坏蓋	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	−	−	−	−	細・少	(13.5)	−	−	1/8	
238		1	2	SX1012・SX1013		須恵器	坏蓋	回転ナデ	回転ナデ	5Y6/1 灰	5Y7/1 灰白	−	−	−	−	細・少	(13.9)	−	−	1/8	
239	23	1	2	SX1012・SX1013		須恵器	坏蓋	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	5Y5/1 灰	N6/ 灰	−	−	−	−	中・少	14.8	4.5	6.8	6/8	
240		1	2	SX1012・SX1013		須恵器	蓋	ナデ	ナデ	7.5Y5/1 灰	N6/ 灰	−	−	−	−	細・少	つまみ部 2.3	−	−	1/8 未満	
241	23	1	2	SX1012		須恵器	坏身	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	2.5Y5/1 黄灰	10YR4/1 褐灰	−	−	−	−	−	12.8	4.4	−	6/8	
242	23	1	2	SX1012		須恵器	坏身	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	5Y6/1 灰	5Y5/1 灰	−	−	−	−	−	13.0	4.4	−	6/8	底部ヘラ記号「−」
243	23	1	2	SX1012		須恵器	坏	回転ナデ、底部回転ヘラキリ後不定方向ナデ、火襷	回転ナデ、火襷	5B6/1 青灰	5B5/1 青灰	−	−	−	−	中・多	12.6	3.3	8.3	5/8	
244	23	1	2	SX1012		須恵器	坏	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y7/2 灰黄	5Y7/1 灰白	−	−	−	−	中・少	−	−	9.4	底部 5/8	
245		1	2	SX1012		土師器	高坏	回転ナデ	回転ナデ後ミガキ（マメツ）	10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	細・並	−	−	−	−	−	−	−	体部 1/8	
246		1	2	SX1012		土師器	甕	ナデ、板ナデ	ナデ、板ナデ	10YR6/4 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄褐	中・多	−	−	細・多	−	(22.4)	−	−	1/8	
247	23	1	2	SX1012		須恵器	甕	回転ナデ、カキ目、タタキ目	回転ナデ、タタキ目	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	−	−	−	−	細・少	−	−	−	5/8	
248		1	2	SX1012		須恵器	甕	タタキ目	青海波文	2.5Y7/1 灰白	2.5Y6/2 灰黄	−	−	−	−	中・多	−	−	−	1/8 未満	
249		1	2	SX1012		須恵器	壺	回転ナデ、回転ヘラキリ	回転ナデ	5Y6/1 灰	2.5Y7/1 灰白	−	−	−	−	中・少	−	−	8.2	5/8	
250	23	1	2	SX1012		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	板ナデ後指ナデ	7.5YR7/6 橙	7.5YR7/4 にぶい橙	中・並	−	−	−	−	(19.4)	−	−	口縁 2/8	

報文番号	図版番号	調査区名	遺構面	遺構名	層位	種類	器種	調整（外）	調整（内）	色調（内）・釉	色調（内）・胎土	石英長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	備考
251	24	1	2	SX1012		土師器	製塩土器	指オサエ，受熱破砕	指ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	中・多	中・少	–	中・少	–	(20.8)	–	–	2/8	
252	24	1	2	SX1012		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	二枚貝条痕後ナデ，口縁残頭	10YR6/4 にぶい黄橙	5YR6/6 橙	細・多	細・少	–	細・少	–	–	–	–	1/8未満	
253		1	2	SX1012		土師器	製塩土器	ナデ，指オサエ	ナデ，指オサエ	10YR4/3 にぶい黄褐	5YR6/4 にぶい橙	細・多	細・多	–	–	–	–	–	0.5	1/8未満	
254		1	2	SX1012		土師器	製塩土器	指オサエ	指オサエ	2.5Y8/6 橙	2.5Y8/7/6 橙	中・多	中・並	–	–	–	–	–	0.5	1/8未満	
255		1	2	SX1012		土師器	製塩土器	指オサエ，タタキ	指オサエ	7.5YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	中・多	中・多	–	細・少	–	–	–	–	1/8未満	
256	27	1	2	SX1012		土製品	管状土錘	ナデ	–	2.5Y5/2 暗灰黄	–	粗・多	細・少	–	細・少	–	長 4.5	幅 2.7	厚 2.8	8/8	
259		1	2	SX1012			縄文土器	凹，縄文施文後二条沈線，外側磨消	ナデ	10YR7/6 明黄褐	10YR6/6 明黄褐	–	–	–	–	–	–	–	–	1/8未満	
260		1	2	SX1012	包含層 3	土師器	坏	ヨコナデ後ヘラミガキ（ツメ ?），底部ヘラケズリ後ナデ	ヨコナデ後ヘラミガキ	5YR6/6 橙	5YR5/6 明赤褐	細・並	–	–	–	–	–	–	–	1/8	口縁直下に沈線，磯内系
261	24	1	2	SX1012	包含層 3	須恵器	蓋坏	回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	10Y6/1 灰	N6/ 灰	–	–	–	–	中・多	(14.0)	–	–	3/8	
262		1	2	SX1012	包含層 3	須恵器	蓋	回転ナデ	回転ナデ	N8/ 灰白	5Y6/1 灰	–	–	–	–	細・少	(14.4)	–	–	1/8	
263	24	1	2	SX1012	包含層 3	黒色土器	椀	ナデ，ヘラミガキ	ナデ，ヘラミガキ，マメツ	5YR6/6 橙	N3/ 暗灰	–	–	–	–	細・多	(16.4)	–	–	1/8	磯内系か？A 類
264		1	2	SX1012	包含層 3	土師器	壺	ナデ後ミガキ（マメツ）	ナデ	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR6/3 にぶい褐	中・多	中・少	–	中・少	–	(12.0)	–	–	2/8	
265		1	2	SX1012	包含層 3	土師器	甕	ナデ，ハケメ	ナデ，ハケメ	10YR6/3 にぶい黄橙	5YR5/6 明赤褐	中・多	–	–	細・少	–	–	–	–	1/8未満	
266		1	2	SX1012	包含層 3	土師器	甕	ハケメ後ナデ	板ナデ，指オサエ	2.5Y8/8 橙	5YR7/8 橙	粗・多	細・少	中・並	細・多	–	(29.6)	–	–	1/8未満	
267		1	2	SX1012	包含層 3	土師器	甕	指オサエ後ナデ	ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/6 橙	中・並	–	–	–	–	–	–	–	1/8	
268	27	1	2	SX1012		土製品	有溝土錘	ナデ	–	5YR6/8 橙	–	中・多	中・少	中・少	中・少	–	長 8.1	幅 4.4	厚 3.3	7/8	
269		1	2	SX1012		土製品	管状土錘	ナデ	–	5YR6/6 橙	–	中・並	–	細・少	細・少	–	長 4.3	幅 1.3	厚 1.3	8/8	
270	27	1	2	SX1012	包含層 3	土製品	管状土錘	ナデ	–	10YR5/2 灰黄褐	–	細・多	細・少	細・少	細・多	–	長 9.7	幅 4.8	厚 4.7	7/8	
272	24	1	2	SX1013		土師器	坏	ヨコナデ	ヨコナデ，指オサエ	2.5Y7/8 橙	2.5Y7/8 橙	中・少	中・少	–	–	–	–	–	(9.0)	2/8	
273		1	2	SX1013		須恵器	坏身	回転ナデ，回転ヘラケズリ	回転ナデ	N6/ 灰	5Y6/1 灰	–	–	–	–	中・少	(11.2)	3.6	–	口縁 1/8	
274		1	2	SX1013		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	指ナデ	2.5Y6/3 にぶい黄	10YR6/3 にぶい黄橙	中・並	–	–	–	–	–	–	–	1/8	
275		1	2	SX1013		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	二枚貝条痕後ナデ	5YR7/4 にぶい橙	10YR6/3 にぶい黄橙	中・並	–	–	細・少	–	(17.1)	–	–	1/8	
276		1	2	SX1013	表面	土師器	製塩土器	指オサエ	板ナデ，指オサエ	7.5YR7/6 橙	10YR5/3 にぶい黄褐	中・多	中・並	–	中・少	–	(20.5)	–	–	1/8	
277		1	2	SX1013		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	ナデ	10YR6/2 灰黄褐	10YR5/1 褐灰	中・並	–	–	–	–	(19.9)	–	–	1/8	
278		1	2	SX1013		土師器	製塩土器	ナデ	ナデ，板ナデ	7.5YR7/6 橙	5YR6/6 橙	粗・多	細・多	–	細・少	–	(22.0)	–	–	1/8	
279	24	1	2	SX1013		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	ナデ	2.5Y5/2 暗灰黄	10YR6/4 にぶい黄橙	中・並	–	–	–	–	(9.8)	8.5	–	3/8	
280		1	2	SX1013	表面	土師器	製塩土器	指オサエ	ナデ，指オサエ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR5/4 にぶい褐	中・多	中・並	–	中・少	–	–	–	–	1/8未満	
281		1	2	SX1013		土師器	製塩土器	ナデ	ナデ，板ナデ	5YR5/4 にぶい赤褐	7.5YR6/4 にぶい橙	中・多	細・多	–	細・多	–	–	–	–	1/8未満	
282		1	2	SX1013		土師器	製塩土器	指オサエ	板ナデ，指オサエ	2.5Y8/6 橙	5YR8/6 橙	中・多	細・少	–	細・少	–	–	–	–	1/8未満	
283		1	2	SX1013		弥生土器	製塩土器	ケズリ，ヨコナデ	ケズリ，ヨコナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	5YR5/4 にぶい赤褐	細・並	–	–	細・少	–	–	–	(3.4)	3/8	備讃Ⅱａ
284		1	2	SX1013		須恵器	壺	回転ナデ	回転ナデ	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/2 灰オリーブ	–	–	–	–	細・少	(17.9)	–	–	口縁 1/8	
285		1	2	SX1013		弥生土器	壺	ナデ，ミガキ，マメツ	ナデ	7.5YR5/4 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい橙	細・並	中・少	細・並	細・多	–	(17.4)	–	–	1/8未満	
286		1	2	SX1013		弥生土器	甕	ヨコナデ，タタキ後ナデ	ヨコナデ，ヘラケズリ	10YR6/4 にぶい黄橙	2.5Y6/2 灰黄	中・並	–	–	細・少	–	(12.9)	–	–	1/8	
288		1	2	SX1016		土師器	坏	ヨコナデ，指オサエ	板ナデ	5YR6/6 橙	5YR6/4 にぶい橙	粗・多	–	細・少	中・少	–	–	–	(6.9)	3/8	

報文番号	図版番号	調査区名	遺構面	遺構名	層位	種類	器種	調整（外）	調整（内）	色調（外）・釉	色調（内）・胎土	石英長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径（cm）	器高（cm）	底径（cm）	残存率	備考
289		1	2	SX1016		土師器	坏	ヘラミガキ	ヘラミガキ	5YR6/6橙	7.5YR6/6橙	−	−	−	細・少	−	−	−	−	1/8	
290		1	2	SX1016		須恵器	蓋坏	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	N5/灰	5PB5/1青灰	−	−	−	−	粗・少	12.1	3.1	7.2	7/8	
291		1	2	SX1016		須恵器	蓋坏	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	5Y5/1灰	5Y6/1灰	−	−	−	−	中・少	(12.1)	4.7	−	2/8	
292		1	2	SX1016		須恵器	蓋坏	回転ヘラケズリ、回転ナデ	回転ナデ	5PB6/1青灰	5PB5/1青灰	−	−	−	−	中・多	(12.0)	4.4	(0.4)	2/8	
293		1	2	SX1016		須恵器	蓋坏	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	N5/灰	N6/灰	−	−	−	−	粗・少	(13.0)	4.0	(6.2)	2/8	
294		1	2	SX1016		須恵器	坏	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y8/2灰白	−	−	−	−	細・少	−	−	(8.1)	1/8	
295		1	2	SX1016		黒色土器	坏	回転ナデ	ミガキ	2.5Y5/2暗灰黄	7.5YR6/6橙	細・並	−	−	細・少	−	(18.1)	−	−	1/8	黒色土器A類か、表面
296		1	2	SX1016		土師器	甕	板ナデ、指オサエ	板ナデ	5YR5/4にぶい赤褐	5YR5/4にぶい赤褐	粗・少	−	−	細・少	−	(18.0)	−	−	1/8	
297		1	2	SX1016		須恵器	脚付盤	回転ナデ、カキ目、脚部三方透かし	回転ナデ	N4/灰	N7/灰白	−	−	−	−	細・少	−	−	−	3/8	
298		1	2	SX1016		須恵器	甕	ナデ	ナデ	2.5Y7/1灰白	2.5Y7/1灰白	−	−	−	−	中・少	(17.0)	−	−	1/8	
299		1	2	SX1016		須恵器	甕	回転ナデ、タタキ、カキ目	回転ナデ、タタキ	N6/灰	N6/灰	−	−	−	−	細・少	−	−	−	1/8未満	
300	24	1	2	SX1016		土師器	製塩土器	ナデ、指オサエ後ナデ	二枚貝条痕後下半指ナデ	7.5YR5/3にぶい褐	5YR6/6橙	中・並	−	−	−	−	(19.6)	−	−	1/8	口縁端部調整残留部分布目痕？
303		1	2	SX1018		土師器	製塩土器	ナデ	ナデ	10YR4/2灰黄褐	10YR4/2灰黄褐	粗・多	細・多	−	細・少	−	−	−	−	1/8未満	下端器表剥落
304		1	2	SX1022		土師器	坏	ナデ（マメツ）	ナデ	7.5YR7/6橙	7.5YR6/6橙	細・並	−	−	細・少	−	−	−	−	1/8	外面型押し成型か
305		1	2	SX1022		土師質土器	椀	ナデ	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	細・多	細・少	−	細・少	−	(11.0)	−	−	1/8	
306		1	2	SX1022		土師質土器	椀	ナデ	ナデ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	細・多	中・少	−	−	−	(12.2)	−	−	1/8	
307		1	2	SX1022		土師質土器	椀	ナデ	ナデ	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	−	−	−	−	細・少	(22.0)	−	−	1/8	吉備系土師質土器
308		1	2	SX1022		瓦器	椀	ナデ、指オサエ	ナデ、ヘラミガキ	5Y7/1灰白	5Y7/1灰白	−	−	−	−	細・少	(12.4)	−	−	1/8未満	
309		1	2	SX1022		瓦器	椀	ヨコナデ、指オサエ後ナデ	ヘラミガキ	N5/灰	N6/灰	細・並	−	−	−	−	(13.1)	−	−	1/8	
310		1	2	SX1022		瓦器	椀	ヨコナデ、指オサエ後ナデ	指オサエ後ナデ、ヘラミガキ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR8/3浅黄橙	細・並	−	−	−	−	(14.2)	−	−	1/8	
311		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	条痕後ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	2.5Y7/3浅黄	中・少	−	−	細・少	−	(11.6)	−	−	1/8	
312	25	1	2	SX1022		土師器	製塩土器	ヨコナデ、指オサエ、受熱破砕	板ナデ、指オサエ、マメツ	7.5YR8/6浅黄橙	10YR8/6黄橙	中・多	中・少	細・少	細・少	−	−	−	−	1/8	
313		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	ナデ	2.5Y7/4浅黄	2.5Y7/4浅黄	中・並	−	−	細・少	−	(15.6)	−	−	1/8	
314	25	1	2	SX1022		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	条痕後ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	2.5Y7/3浅黄	−	−	−	−	−	(17.8)	−	−	1/8	
315		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	ナデ	2.5Y6/2灰黄	2.5Y6/3にぶい黄	中・並	−	−	細・少	−	(18.0)	−	−	1/8	
316		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	条痕後ナデ	2.5Y7/4浅黄	2.5Y7/4浅黄	中・並	−	−	細・少	−	(19.1)	−	−	1/8	
317		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	指ナデ、指オサエ	ヨコナデ、板ナデ、マメツ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	中・多	中・並	細・少	細・少	−	(18.6)	−	−	1/8	
318		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	ナデ	2.5Y6/2灰黄	2.5Y6/2灰黄	中・並	−	−	細・少	−	(17.2)	−	−	1/8	
319		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	条痕後ナデ	2.5Y5/2暗灰黄	2.5Y6/3にぶい黄	中・並	−	−	細・少	−	(18.6)	−	−	1/8	
320		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	条痕後ナデ	7.5YR7/6橙	2.5Y6/3にぶい黄	中・並	−	−	細・少	−	(16.6)	−	−	1/8	

報文番号	図版番号	調査区名	遺構面	遺構名	層位	種類	器種	調整（外）	調整（内）	色調（外）・釉	色調（内）・胎土	石英長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	備考
321	25	1	2	SX1022		土師器	製塩土器	指オサエ	指ナデ	7.5YR8/6浅黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	中・多	中・少	中・少	細・多	–	(18.0)	–	–	1/8	口縁部、棒状工具による粗い刺み目
322		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	条痕後ナデ	2.5Y6/3にぶい黄	2.5Y6/3にぶい黄	中・多	–	–	–	–	(22.0)	–	–	1/8	
323		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	指オサエ後粗い板ナデ	二枚貝条痕後ナデ	2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/3浅黄	粗・多	–	細・少	–	–	(21.8)	–	–	1/8	
324		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	ナデ、指オサエ	板ナデ	2.5Y7/2灰黄	2.5Y6/2灰黄	中・多	–	–	細・少	–	(23.0)	–	–	1/8 未満	
325	25	1	2	SX1022		土師器	製塩土器	ナデ、指オサエ	ナデ、板ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	10YR6/3にぶい黄橙	細・多	細・少	細・少	細・少	–	(25.2)	–	–	1/8	
326		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	条痕後ナデ	2.5Y6/3にぶい黄	2.5Y7/4浅黄	中・並	–	–	細・少	–	(17.5)	–	–	1/8	
327		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	ヨコナデ、指オサエ	板ナデ、指ナデ、指オサエ	10YR8/6黄橙	10YR8/4浅黄橙	中・多	中・少	中・少	中・並	–	(16.2)	–	–	1/8	
328		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	条痕後ナデ	2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/3浅黄	中・多	–	–	細・少	–	(15.8)	–	–	1/8	
329		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	ナデ、二枚貝条痕後ナデ	2.5Y6/4にぶい黄	10YR6/4にぶい黄橙	中・並	–	–	細・少	–	(20.2)	–	–	1/8	二次焼成に伴う劣化器壁剥落を認める
330		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	ヨコナデ、指オサエ、マメツ	ヨコナデ、板ナデ、指オサエ	10R5/8赤	7.5YR7/6橙	中・多	中・少	中・少	細・少	–	(15.7)	–	–	1/8	
331		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	指オサエ	ナデ、指オサエ	2.5Y6/2灰黄	2.5Y5/2暗灰黄	細・多	細・少	細・少	細・少	–	(19.2)	–	–	1/8	
332	25	1	2	SX1022		土師器	製塩土器	ナデ、指オサエ	板ナデ	2.5Y6/2灰黄	10YR7/4にぶい黄橙	中・多	細・少	–	細・少	–	(22.0)	–	–	1/8	二枚貝条痕の可能性有り
333	25	1	2	SX1022		土師器	製塩土器	指オサエ	ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	中・多	細・少	–	細・多	–	–	–	–	1/8	
334		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	ナデ、指オサエ	二枚貝条痕後ナデ	2.5Y7/3浅黄	10YR7/4にぶい黄橙	細・多	細・少	–	細・多	–	–	–	–	1/8 未満	
335		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	ナデ、指オサエ	板ナデ	10YR7/3にぶい黄橙	10YR7/3にぶい黄橙	細・多	細・少	–	細・多	–	–	–	–	1/8 未満	
336		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	板ナデ、指オサエ	板ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	中・多	細・少	細・少	細・少	–	–	–	–	1/8 未満	
337		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	条痕後ナデ	2.5Y6/3にぶい黄	10YR7/4にぶい黄橙	中・並	–	–	細・少	–	–	–	–	1/8 未満	
338		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	ナデ	5YR7/6橙	5YR7/6橙	細・多	–	–	細・少	–	(10.2)	–	–	1/8	
339		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	ナデ	10YR6/3にぶい黄橙	7.5YR7/6橙	中・並	–	–	–	–	(9.6)	–	–	1/8	
340		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	ナデ	2.5Y6/3にぶい黄	10YR7/4にぶい黄橙	中・少	–	–	細・少	–	(10.1)	–	–	1/8	
341		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	ナデ、指オサエ	ナデ、指オサエ	5YR6/6橙	5YR6/4にぶい橙	粗・多	細・少	–	細・少	–	–	–	–	1/8 未満	底部、粘土接合痕
342		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	ナデ	7.5YR7/6橙	7.5YR7/6橙	中・少	–	–	–	–	–	–	–	1/8	
343		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	ナデ	ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	10YR7/4にぶい黄橙	中・少	細・少	–	–	–	–	–	–	3/8	
344		1	2	SX1022		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	指オサエ後ナデ	5YR6/4にぶい橙	5YR6/4にぶい橙	中・多	–	–	細・少	–	–	–	–	1/8 未満	
345		1	2	SX1025		土師器	製塩土器	皿	ナデ、指オサエ	ナデ後ヘラミガキ（マメツ）	2.5Y5/1黄灰	5YR5/6明赤褐	細・少	–	–	細・少	–	–	–	–	1/8 未満	
346		1	2	SX1027		土師器	製塩土器	ナデ、指オサエ	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR6/4にぶい黄橙	細・多	細・少	細・多	細・少	–	(15.0)	–	–	1/8	
347		1	2	SX1027		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ	ナデ	2.5Y6/2灰黄	2.5Y7/3浅黄	中・並	–	–	細・少	–	(17.6)	–	–	1/8	
348		1	2	SX1027		土師器	製塩土器	ナデ、ハケり	ナデ	7.5YR7/8黄橙	7.5YR7/6橙	中・多	細・少	–	細・少	–	–	–	–	1/8 未満	
349		1	1	包含層	第1包含層	土師質土器	小皿	ナデ	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	細・少	–	–	細・少	–	(9.2)	1.6	(8.2)	1/8	
350		1	1	包含層	第1包含層	土師質土器	坏	回転ナデ、底部回転ヘラきり後ナデ	回転ナデ	10YR8/4にぶい黄橙	10YR7/2にぶい黄橙	中・多	–	–	細・少	–	(11.0)	2.8	(7.6)	2/8	
351		1	1	包含層	第1包含層	土師質土器	椀	ヨコナデ	ナデ	10YR8/3浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	–	–	–	–	細・少	(10.0)	–	–	1/8	吉備系土師質土器
352		1	1	包含層	第1包含層	土師質土器	椀	ヨコナデ	ハケメ後ナデ	10YR8/3浅黄橙	10YR8/3浅黄橙	–	–	–	–	細・少	(11.3)	–	–	1/8	吉備系土師質土器

挿文番号	図版番号	調査区名	遺構面	遺構名	層位	種類	器種	調整（外）	調整（内）	色調（外）・釉	色調（内）・胎土	石英長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	備考
353		1	1	包含層	第1包含層	土師質土器	椀	ナデ	ナデ	10YR8/3浅黄橙	5YR6/1灰白	中・少	－	－	－	－	－	－	(3.8)	4/8	
354		1	1	包含層	第1包含層	瓦器	小皿	ヨコナデ、底部指オサエ	ヨコナデ	5Y6/1灰	N5/灰	－	－	－	－	細・少	(8.6)	－	－	1/8	
355		1	1	包含層	第1包含層	瓦器	椀	回転ナデ	ナデ	2.5Y5/1黄灰	2.5Y5/2暗灰黄	細・並	－	－	－	－	－	－	3.9	3/8	
356		1	1	包含層	第1包含層	陶器	皿	回転ナデ	回転ナデ	5Y5/2灰オリーブ	10YR5/3にぶい黄褐	－	－	－	－	細・少	－	－	－	1/8	未満
357		1	1	包含層	第1包含層	白磁	椀	回転ナデ	回転ナデ	5Y7/2灰白	5Y8/1灰白	－	－	－	－	細・少	－	－	－	1/8	未満
358		1	1	包含層	第1包含層	白磁	皿	回転ナデ	回転ナデ	10Y8/1灰白	10Y8/1灰白	－	－	－	－	細・少	(11.0)	－	－	1/8	
359		1	1	包含層	第1包含層	青磁	椀	回転ナデ、施釉	施釉	7.5Y6/2灰オリーブ	5Y7/1灰白	－	－	－	－	－	(16.0)	－	－	1/8	
360		1	1	包含層	第1包含層	土師質土器	足釜	ナデ、脚端玄横指オサエ裏面ナデ	ナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	中・並	－	－	－	－	長19	幅5	－	1/8	未満
361		1	1	包含層	第1包含層	須恵器	捏鉢	ナデ	ナデ	2.5Y6/1黄灰	2.5Y6/1黄灰	－	－	－	－	中・多	－	－	－	1/8	未満
362		1	1	包含層	第1包含層	土師器	甕	ナデ	ナデ	7.5YR5/6明褐	10YR5/3にぶい黄褐	中・多	－	－	－	－	(20.6)	－	－	1/8	
363	25	1	1	包含層	第1包含層	細器	壺	回転ナデ	回転ナデ	2.5YR6/2灰白	5YR6/1灰白	－	－	－	－	細・少	－	－	(4.0)	3/8	
364		1	1	包含層	第1包含層	土製品	管状土錘	ナデ	－	10YR5/3にぶい黄褐	－	細・少	－	－	－	－	長3.2	幅1.0	厚1.0	7/8	
365		1	1	包含層	第1包含層	土製品	管状土錘	ナデ	－	5YR6/4にぶい橙	－	細・少	－	－	－	－	長4.0	幅1.1	厚1.1	8/8	
366		1	1	包含層	第1包含層	土製品	管状土錘	ナデ	－	2.5YR5/6明赤褐	－	細・少	－	－	－	－	長4.6	幅1.1	厚1.0	7/8	
367		1	1	包含層	第1包含層	土製品	管状土錘	ナデ	－	2.5Y7/2灰黄	－	細・少	－	－	－	－	長4.9	幅1.2	厚1.1	7/8	
368		1	1	包含層	第1包含層	土製品	管状土錘	ナデ	－	10YR7/3にぶい黄橙	－	細・少	－	－	－	－	長5.3	幅1.4	厚1.2	8/8	
369		1	1	包含層	第1包含層	土製品	管状土錘	ナデ	－	10YR8/4浅黄橙	－	細・少	－	－	－	－	長5.5	幅0.6	厚1.0	8/8	
370		1	1	包含層	第1包含層	土製品	管状土錘	指オサエ後ナデ	－	5YR5/3にぶい赤褐	2.5Y4/1黄灰	－	－	－	－	－	長4.9	幅3.9	厚1.0	3/8	備前焼
373		1	2	包含層	第2包含層	土師質土器	小皿	回転ナデ、ナデ	回転ナデ、ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/6橙	細・少	－	－	－	－	7.1	1.3	5.9	4/8	
374		1	2	包含層	第2包含層	土師質土器	椀	ヨコナデ、指オサエ後ナデ	精緻なナデ	10YR7/4にぶい黄橙	10YR8/4浅黄橙	中・少	－	－	－	－	(10.2)	3.2	(3.4)	1/8	内面見込みに重ね焼痕、古備系土師質土器
375		1	2	包含層	第2包含層	土師質土器	椀	回転ナデ	回転ナデ	2.5Y7/3浅黄	2.5Y7/4浅黄	細・並	－	－	－	－	(10.7)	3.3	(3.7)	1/8	内面見込みに重ね焼痕、古備系土師質土器
376		1	2	包含層	第2包含層	土師質土器	椀	ヨコナデ	ヨコナデ、精緻なナデ	10YR6/2灰黄褐	10YR6/1褐灰	－	－	－	－	細・少	(11.5)	－	－	1/8	
377		1	2	包含層	第2包含層	土師質土器	椀	指オサエ後ナデ	精緻なナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR7/4にぶい黄橙	細・少	－	－	－	－	－	－	4.1	3/8	内面見込み重ね焼痕、古備系？
378		1	2	包含層		土師質土器	椀	回転ナデ	回転ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR5/2灰黄褐	細・少	－	－	－	－	(13.6)	－	－	1/8	
379	25	1	2	包含層	攪乱土	土師質土器	椀	ヨコナデ、ナデ	板ナデ後ヨコナデ	2.5Y5/3黄褐	2.5YR6/6橙	－	－	－	－	－	(13.1)	5.0	(5.6)	2/8	
380		1	2	包含層	第2包含層	瓦器	小皿	ヨコナデ、指オサエ後ナデ	ヘラミガキ	N3/暗灰	N5/灰	細・並	－	－	－	－	(8.5)	－	－	1/8	
381		1	2	包含層	第2包含層	瓦器	椀	ナデ、指オサエ	ナデ、ヘラミガキ	N4/灰	2.5Y7/1灰白	－	－	－	－	細・少	－	－	－	1/8	未満
382		1	2	包含層		須恵器	坏	回転ナデ、底部糸切り	回転ナデ	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	－	－	－	－	細・少	－	－	(7.0)	2/8	
383		1	2	包含層	第2包含層	須恵器	坏	回転ナデ、底部ヘラキリ後ナデ	回転ナデ	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	－	－	－	－	細・少	－	－	(6.4)	2/8	
384		1	2	包含層	第2包含層	須恵器	坏	回転ナデ	回転ナデ	5Y6/1灰	5Y6/1灰	－	－	－	－	－	－	－	(9.0)	1/8	
385		1	2	包含層	第2包含層	須恵器	坏	回転ナデ、回転ヘラキリ後ナデ	回転ナデ	2.5Y8/2灰白	2.5Y8/2灰白	中・多	－	－	－	－	(13.4)	3.0	(6.7)	2/8	
386		1	2	包含層	第2包含層	須恵器	蓋坏	回転ナデ、回転ヘラケズリ	回転ナデ	5Y6/1灰	5Y5/1灰	－	－	－	－	中・少	－	4.6	(13.4)	2/8	

報文番号	図版番号	調査区名	遺構面	遺構名	層位	種類	器種	調整（外）	調整（内）	色調（外）・釉	色調（内）・胎土	石英長石	赤色粒	角閃石	雲母	砂粒	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	残存率	備考
387		1	2	包含層	第2包含層	黒色土器	椀	ナデ、ヘラミガキ	ナデ、ヘラミガキ	N4/灰	N4/灰	−	−	−	−	細・少	(14.0)	−	−	1/8	
388		1	2	包含層	第2包含層	白磁	皿	回転ナデ	回転ナデ	10Y8/1灰白	N8/灰白	−	−	−	−	細・少	(11.8)	−	−	1/8未満	
389		1	2	包含層	第2包含層	青磁	椀	回転ナデ	回転ナデ	5Y6/2灰オリーブ	5Y7/1灰白	−	−	−	−	−	(15.4)	−	−	1/8	
390		1	2	包含層	第2包含層	白磁	椀	回転ナデ、回転ヘラケズリ	施釉	10Y7/1灰白	5Y8/1灰白	−	−	−	−	細・少	−	−	(5.4)	1/8	
391		1	2	包含層	第2包含層	土師器	鉢	指オサエ後ナデ	ヨコナデ、板ナデ	7.5YR7/4にぶい橙	7.5YR7/4にぶい橙	中・並	−	−	細・少	−	(12.8)	−	−	1/8	製塩土器の可能性有り
392		1	2	包含層	第2包含層	須恵器	擂鉢	ヨコナデ、底部ヘラキリ後ナデ	回転ナデ後卸し目、卸し目は4mm幅と25mm幅のヘラ状工具2本単位1cm間隔で保持しかき上げる	5Y6/1灰	N7/灰白	−	−	−	−	中・少	−	−	(14.9)	1/8	
393		1	2	包含層	第2包含層	土師質土器	羽釜	ハケメ、指オサエ、板ナデ、マメツ	ハケメ、ナデ	10YR8/3浅黄橙	10YR8/4浅黄橙	−	−	−	−	中・少	(23.0)	−	−	1/8未満	
394		1	2	包含層	第2包含層	土師器	甕	ヨコナデ、ハケメ後ヨコナデ	ハケメ後ヨコナデ、板ナデ	10YR5/3にぶい黄褐	2.5Y5/2暗灰黄	中・並	−	−	−	−	(26.8)	−	−	1/8	
395		1	2	包含層	埋戻し土	土師器	移動式カマド	ナデ、板ナデ後ナデ	板ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	10YR5/4にぶい黄褐	粗・多	−	−	細・少	−	長 6.9	幅 7.5	厚 4.4	1/8未満	
396	26	1	2	包含層	第2包含層	土師器	製塩土器	指オサエ後タタキ目、ナデ	指ナデ、ナデ	5Y3/1オリーブ黒	2.5Y5/2暗灰黄	中・並	−	−	−	−	7.8	19.0	3.7	6/8	
397		1	2	包含層	第2包含層	土師器	製塩土器	ナデ、指オサエ	−	10YR6/4にぶい黄橙	2.5Y4/2暗灰黄	中・多	細・少	細・少	細・少	−	−	−	4.0	8/8	
398		1	2	包含層	第2包含層	土師器	製塩土器	タタキ、底部指オサエ、ナデ	指オサエ後ケズリ	2.5YR5/6明赤褐	10YR7/4にぶい黄橙	中・多	細・少	−	細・少	−	−	−	−	8/8	
399		1	2	包含層	第2包含層	土師器	製塩土器	タタキ目、ヨコナデ	タタキ目	2.5Y6/3にぶい黄	10YR6/3にぶい黄橙	細・並	−	−	−	−	−	−	(2.0)	2/8	
400		1	2	包含層	第2包含層	土師器	製塩土器	タタキ目	ナデ	10YR6/4にぶい黄橙	7.5YR7/4にぶい橙	中・並	−	−	−	−	−	−	−	1/8未満	
401		1	2	包含層	第2包含層	土製品	有溝土錘	指オサエ、ナデ	−	2.5Y5/3黄褐	−	細・並	−	−	−	−	長 5.1	幅 3.2	厚 2.7	7/8	
402		1	2	包含層	第2包含層	土製品	有溝土錘	ナデ	−	7.5YR8/1灰白	−	細・少	−	−	細・少	−	長 4.0	幅 3.1	厚 2.5	8/8	
403		1	2	包含層	第2包含層	土製品	管状土錘	ナデ	−	2.5Y6/3にぶい黄	−	細・少	−	−	細・少	−	長 4.5	幅 1.3	厚 1.3	7/8	
404	27	1	2	包含層	第2包含層	土製品	棒状土錘	ナデ	−	2.5Y5/1黄灰	−	−	−	−	−	−	長 5.8	幅 1.9	厚 1.5	8/8	
412		2	1	包含層		土師質土器	皿	指オサエ後ナデ	指オサエ、ナデ	2.5YR6/2灰白	2.5YR6/2灰白	−	−	−	−	細・少	(13.4)	−	−	2/8	口縁の一部にススけ着、灯明皿か？
413		2	1	包含層		備前焼	擂鉢	ナデ	ナデ	10R4/2灰赤	−	粗・少	−	−	−	−	−	−	−	1/8未満	
414	26	2	1	包含層		白磁	皿	回転ヘラケズリ、底部付近露胎	回転ナデ	7.5Y6/1灰	N7/灰白	−	−	−	−	細・少	(10.2)	2.3	(6.6)	2/8	Ⅷ 1b
415		2	1	包含層		土師器	甕	ナデ	ナデ、指オサエ、ハケメ	10YR5/3にぶい黄褐	10YR4/2灰黄褐	−	−	−	−	−	(15.0)	−	−	1/8	
416		2	1	包含層	SD2003・2004付近	弥生土器	高坏	板ナデ、指ナデ	指オサエ、ナデ	2.5YR6/6橙	5YR6/4にぶい橙	粗・多	中・並	中・並	中・多	−	−	−	−	1/8未満	
417	26	2	1	包含層		土師器	移動式カマド	ナデ、板ナデ	ナデ、板ナデ、ハケメ	5YR6/6橙	5YR6/6橙	中・多	−	−	−	−	−	−	−	1/8未満	
418		2	1	包含層		土師器	製塩土器	指オサエ、ナデ、板ナデ	指ナデ	7.5YR6/4にぶい橙	7.5YR7/6橙	中・多	中・並	中・少	中・少	−	(16.4)	−	−	1/8	
419	26	2	1	包含層		土師器	製塩土器	指オサエ後ナデ、受熱破砕	指ナデ	10R6/6赤橙	2.5YR7/6橙	中・多	中・少	細・少	細・少	−	(20.2)	−	−	1/8	
420		2	1	包含層		土師器	製塩土器	ナデ、指オサエ	板ナデ、指オサエ	7.5YR5/4にぶい褐	5YR6/6橙	細・多	細・少	−	細・少	−	(23.6)	−	−	1/8	

第７表　石器観察表

報文番号	図版番号	調査区名	遺構面	遺構名	層位	種類	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	備考
28		1	1	SX1008		サヌカイト	石鏃	2.1	2.1	0.5	2.1	
372		1	1	包含層		サヌカイト	石鏃	1.6	1.2	0.3	0.5	
409	26	1	2	包含層		滑石	石鍋	－	－	－	－	口径 22.6cm　本戸 1992　Ⅲ類－a－2　12～13c
410		1	2	包含層	包含層 2	粘板岩	硯	3.9	6.4	0.9	38.1	
411		1	2	包含層		サヌカイト	石鏃未成品	3.4	2.4	0.8	7.1	

第８表　金属器観察表

報文番号	図版番号	調査区名	遺構面	遺構名	層位	種類	器種	長さ（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重量（g）	備考
83		1	2	SK1006		鉄	釘？	3.0	1.0	1.2	5.31	
84		1	2	SK1006		鉄	釘？	4.2	0.9	0.5	5.04	
86		1	2	SK1013		鉄	刀子？	2.4	1.7	0.4	1.57	
108	27	1	2	SD1004		鉄	鉄鏃？	3.9	1.6	0.6	5.82	
170		1	2	SP1183（SB1011）		鉄	釘	3.9	0.6	0.5	2.70	
175	27	1	2	SP1021（SB1001）		鉄	釣針	5.7	3.1	0.6	6.11	
176		1	2	SP1025		鉄	不明	6.7	2.8	1.6	28.66	
206	27	1	2	SP1155（SB1010）		鉄	釘	8.0	0.6	0.5	4.67	
210		1	2	SP1182		鉄	釘	6.9	1.0	0.9	9.05	
217		1	2	SP1207（SB1001）		鉄	釘	7.4	0.8	0.9	7.99	
257		1	2	SX1012	1 層	鉄	刀子	4.0	0.7	0.3	1.46	
258	27	1	2	SX1012		鉄	刀子	7.4	1.2	0.5	7.90	
271	27	1	2	SX1012		銅	銅板	7.0	0.4	0.1	1.81	
287	27	1	2	SX1013		鉄	有孔鉄片	8.5	0.8	0.5	6.39	
301	27	1	2	SX1016		鉄	刀子	7.3	1.1	0.5	7.49	
302	27	1	2	SX1016		鉄	釣針	4.5	2.5	0.6	4.10	
371		1	2	包含層		鉄	釘	4.8	0.9	0.5	3.20	
405		1	2	包含層		鉄	刀子	3.5	0.9	0.8	4.94	
406		1	2	包含層		鉄	刀子	2.4	0.8	0.5	1.37	
407		1	2	包含層		鉄	不明	3.9	1.0	1.7	6.24	
408	26	1	2	包含層		銅銭	絹定通寶	2.0	2.0	0.2	2.00	

第９表　骨角器観察表

報文番号	図版番号	調査区名	遺構面	遺構名	層位	種類	器種	調整（外）	調整（内）	色調（外）	色調（内）	長さ（cm）	幅（cm）	厚（cm）	残存率	備考
231		1	2	SP1257		骨角器	垂飾か	表裏からの穿孔後、全面をケズリ整形、長手、小口共に角を面取りし、磨いて仕上げ	－	10YR7/3 にぶい黄橙	－	2.1	1.4	0.4	8/8	

遺跡遠景　東から　1

遺跡遠景　東から　2

1区 第1面 全景　南東から　1

1区 第1面 南半全景　北から

1区 第1面 北半全景　東から

1区 第1面 全景　南東から　2

1区 第1面 北半部遺構検出状況　南東から

1区 第1面 北半部全景　北東から

1区 第1面 鹹水槽群全景　南東から

1区 調査区周辺遠景　北東から

1区 第2面 全景　東から

1区 第2面 全景　北から

1区 第2面 周辺遠景　東から

1区 第2面 遺構検出状況（確認トレンチ3－試掘トレンチ2追加間）　北から

1区 第2面 全景　南から

1区 第2面 北端遺構検出状況　南から

1区 第2面 北端遺構検出状況　北から

1区 北半部完掘状況　東から

1区 西壁土層　北から

1区 西壁土層（下部追加）　北から

1区 西壁土層　東から　1

1区 西壁土層　東から　2

2区 平面精査終了後　北から

2区 全景　東から

2区 西壁土層　東から　1

2区 西壁土層　東から　2

2区 西壁土層　北から

図版 7　層生遺跡

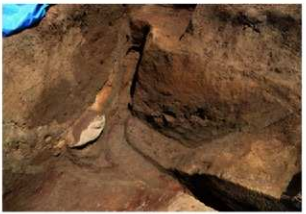
図版 8　蒲生遺跡

SD1012 土層　西から

SX1004 土層　東から

SX1004 土層　南から

SX1004 完掘状況　南から



SX1007 土層　西から

SX1007 完掘状況　西から

SX1003 土層　東から

SX1003 土層　南から

SX1003 土層　北から

SX1008 土層　北から

SX1008 完掘状況　北から

SX1008 粘土層上面完掘状況　北東から

SX1008 完掘状況　北東から

SX1020 土層　東から　1

SX1020 土層　東から　2

図版 10　蒲生遺跡

SX1020 粘土層上面完掘状況　南西から

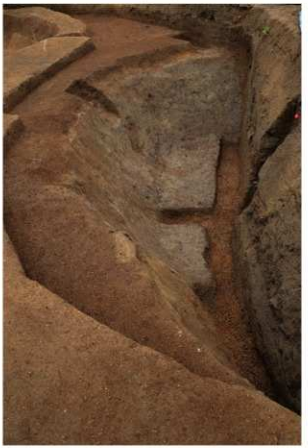
SX1005 土層　東から　1

SX1005 土層　南から

SX1005 土層　東から　2

SX1015 土層　北から

SX1015 粘土層上面完掘状況　南から



SX1015 粘土層上面完掘状況　北から

SX1015 粘土層上面完掘状況　東から

SX1019 完掘状況　南東から

SX1019 完掘状況　北東から

SX1019 完掘状況　北から

SX1002 平面検出状況　東から

SX1002 土層　東から

SX1002 埋土中大型礫検出状況　北から

図版 12　蒲生遺跡

SX1002 粘土層上面完掘状況　東から

SX1006 土層　北西から　1

SX1006 土層　南西から

SX1006 土層　北西から　2

SX1006 完掘状況　南西から

SX1009 東西土層　南から

SX1009 完掘状況　南から

SX1021・1023 土層　南東から

SX1021 完掘状況　南から

SX1023 粘土層上面完掘状況　南東から

SX1001・1002 土層　南東から

SX1001 南北土層 北半　南西から

SX1001 南北土層 南半部　北東から

SX1001 粘土層上面完掘状況　東から

SX1001 礎石検出状況　南から

SX1001 灰色粘土除去後　南東から

図版 14　蒲生遺跡

SX1001 完掘状況　南から

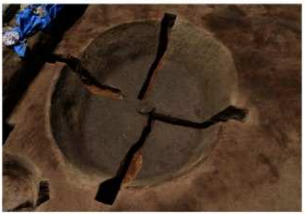
SX1010 土層　西から

SX1010 土層　東から

SX1010 土層　南から

SX1010 土層　北から

SX1010 礫層礫検出状況　北から



SX1010 粘土層上面完掘状況　南から

SX1010 灰色粘土除去後　北から

SX1010 完掘状況　南から

SX1011 土層　南から

SK1006 土層　北から

SK1006 完掘状況　西から

SK1013 土層　東から

SK1017 土層　東から

SK1018 土層　北から

SK1020 土層　西から

図版 16　蒲生遺跡

SK1020 土層　東から

SK1022 土層　東から

SK1023 土層　南から

SK1025 土層　南西から

SK1026 土層　東から

SK1026 土層　南から

SK1026 礫投棄状況　東から

SK1026 礫投棄状況　北から

SK1026 炭化物層上面検出状況　北から

SK1026 炭化物層上面検出状況　南東から

SK1026 鉄滓集中範囲　南東から　1

SK1026 鉄滓集中範囲　南東から　2

SK1026 硬化面半裁状況　南東から

SK1026 硬化面範囲　南から　1

SK1026 硬化面範囲　南から　2

SD1009 土層　南から

図版 18　蒲生遺跡

SD1010 土層　北から

SX1012 土層　西から

SP1131 土層　東から

SX1012 土層　南から

SX1012 土層　北から

SX1012 土層　北東から

SX1012・1013 土層　東から

SX1012・1013 土層　南西から

SX1012・1013 土層　北東から

SX1012（左）・1013（右）　東から

SX1013　東から

SX1012・1013 内 焼土・炭化物検出状況　北から

SX1016 土層　西から

SX1016 東西土層　南から

SX1016 完掘状況　西から

図版 20　蒲生遺跡

SX1022 土層　西から

SX1022 完掘状況　西から

SX1024 土層　西から

SX1027 粘土面完掘状況　北から

SX1027 粘土面完掘状況　東から

SX1027 完掘状況　北から

SX1027 完掘状況　東から

SD2002 土層　西から

29

34

53

60

87

106

128

138

図版 22　蒲生遺跡

239

241

242

243

244

247

250

図版 24　蒲生遺跡

312

314

321

325

332

333

363

379

図版 26　蒲生遺跡

396

408

409

414

417

419

256
225
270
404
39
49
38
268
51

302
108
258
206
287
271
175
301

報告書抄録

ふりがな	かもういせき
書名	蒲生遺跡
副書名	
シリーズ名	小豆地域県立学校再編整備事業（小豆地区統合校）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	
編著者名	小野秀幸
編集機関	香川県埋蔵文化財センター
所在地	〒762-0024　香川県坂出市府中町字南谷５００１番地４　　TEL　0877 － 48 － 2191 FAX　0877 － 48 － 3249
発行年月日	2017年3月17日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
蒲生遺跡（かもういせき）	香川県小豆郡小豆島町蒲生（かがわけんしょうずぐんしょうどしまちょうかもう）	37324		34°28′51″	134°12′51″	20150401～20150731	794（延べ 1,298）	小豆地域県立学校再編整備事業（小豆地区統合校）

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
蒲生遺跡	集落 生産	弥生時代 古墳時代 中世 近世	土坑 土器集中部 掘立柱建物 鍛冶炉 鹹水槽	製塩土器 土師質土器 瓦器 輸入陶磁 鉄製品 鍛冶滓	

要　約

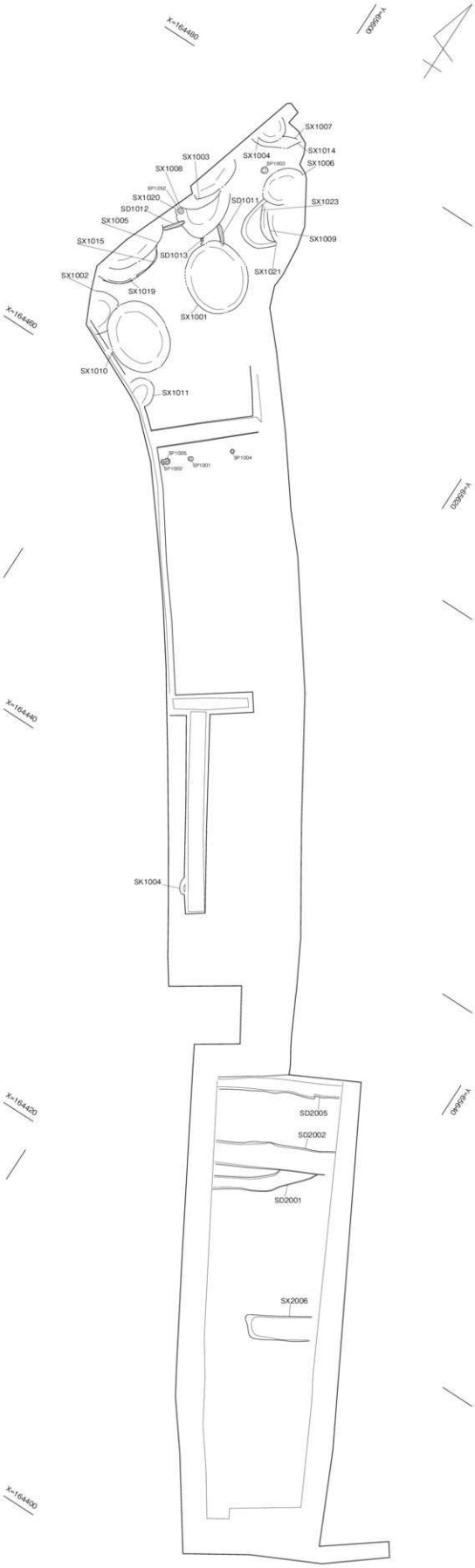
本遺跡は弥生時代から近世にかけての複合遺跡である。中でも中世前半期に遺構・遺物が集中する。弥生時代から古代にかけては、遺構密度は低いが製塩関連の遺物が主体を占め、塩の生産に関わる集落などの存在が想定できる。特に、古墳時代後期の前半期にピークが認められる。中世前半期は掘立柱建物13棟を始め、柱穴・土坑・溝状遺構が確認できた。吉備系土師質土器椀が目立ち、備前とのつながりが色濃くうかがえる。土錘が多数出土したほか、鍛冶炉や鉄滓などの生業関係の遺物が一定量出土し、漁業を主体とし、それに伴う用具の生産・修理が行われていたことがうかがえる。近世は明確な時期を示すことが出来なかったが、塩田関連遺構として鹹水槽17基が特筆できる。重複関係から最低4期の操業がうかがえる。

小豆地域県立学校再編整備事業（小豆地区統合校）
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

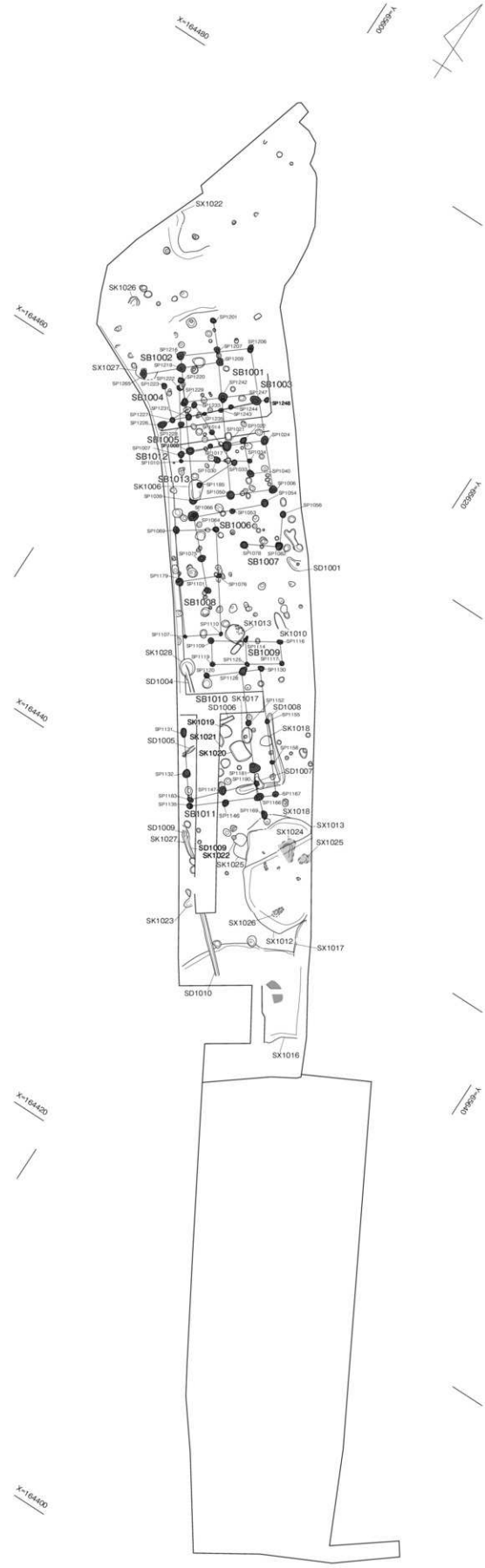
蒲生遺跡

2017年3月17日
編集　香川県埋蔵文化財センター
〒762-0024 香川県坂出市府中町字南谷5001－4
Tel 0877－48－2191
E-Mail　maibun@pref.kagawa.lg.jp
発行　香川県教育委員会
印刷　株式会社 成光社

1・2区　第1面



1・2区　第2面



香川県　蒲生遺跡　遺構全体図　S=1/200

0　20m
(1/200)